

伊 良 原 V

下伊良原高木神社跡
下伊良原庄屋屋敷跡
下伊良原宮園遺跡
上伊良原高木神社跡
上伊良原善治遺跡

福岡県文化財調査報告書 第256集

2017

九州歴史資料館

伊 良 原 V

下伊良原高木神社跡
下伊良原庄屋屋敷跡
下伊良原宮園遺跡
上伊良原高木神社跡
上伊良原善治遺跡

福岡県文化財調査報告書 第256集

2017

九州歴史資料館

序

福岡県教育委員会では、伊良原ダム建設事業に伴い、主として京都郡みやこ町犀川上伊良原・同下伊良原に所在する遺跡の発掘調査を平成18年度から実施しています。

本書では、上伊良原・下伊良原両地区の心の拠り所であり、年中行事においても中心的な存在であった上伊良原高木神社、下伊良原高木神社及びその旧社地伝承地の発掘調査のほか、2地点の調査成果を報告します。

両高木神社は平安時代初期に、日本三大修験の一つといわれる彦山（現在は英彦山と表記）神領内に49社が祀られたといわれる大行事社が、明治の修験道禁止令によって社名を変えた神社です。上伊良原高木神社ではその開創の伝承に相応しい土器が出土しました。また、下伊良原高木神社は13世紀に現在地へ遷座したといわれていますが、ここでも伝承を裏付けるような遺物が出土しています。また、下伊良原高木神社の旧社地という伝承をもつ下伊良原宮園遺跡では、後世に土石流に見舞われたためか相応の遺構・遺物を発見できませんでした。下伊良原庄屋敷跡は旧家白川家の宅地跡です。大規模な造成・石垣構築がなされ、江戸期の庄屋の権威の一端を知ることができました。

本書が、地域のみならず広範に歴史資料として活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、福岡県県土整備部河川開発課・同伊良原ダム建設事務所およびみやこ町・同教育委員会、そして上伊良原・下伊良原地区をはじめとする地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成29年3月31日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例　言

- 1 本書は、県営蔽川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）に伴い、平成25～27年度に九州歴史資料館が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡は、下伊良原高木神社跡（しもいらはらたかぎじんじゃあと）、下伊良原庄屋敷跡（しもいらはらしょうややしきあと）、下伊良原宮園遺跡（しもいらはらみやぞのいせき）、上伊良原高木神社跡（かみいらはらたかぎじんじゃあと）、上伊良原善治遺跡（かみいらはらぜんじいせき）の5遺跡である。
- 3 発掘調査および報告書作製は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関してみやこ町・同教育委員会の多大な御協力を得た。

- 4 本書に掲載した遺構写真の撮影は飛野が、遺物写真の撮影は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が行った。両高木神社社殿等の写真是みやこ町教育委員会木村達美氏の提供による。

なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。

また、写真測量は九州航空株式会社に委託した。

- 5 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、調査担当者が作成した。

- 6 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、秦の指導の下で実施した。

- 7 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

- 8 本書に使用した地形図は国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・糸島・後藤寺・仲津・吉井・耶馬溪」を改変したものである。

また、本書で使用する座標は世界測地系によるが、使用した方位は基本的に磁北である。

- 9 本書の執筆・編集は飛野が行った。一部、「III-1-(3)-9 繩文時代の石器」は福岡県教育庁文化財保護課杉原敏之氏、「IV」のうち、「附記」についてはみやこ町教育委員会木村達美氏に寄稿いただいた。

目 次

	頁
I はじめに.....	1
1 発掘調査に至る経過.....	1
2 発掘調査の組織と関係者.....	1
II 位置と環境.....	3
III 調査の内容.....	11
1 下伊良原高木神社跡.....	11
2 下伊良原庄屋敷跡.....	67
3 下伊良原宮園遺跡.....	99
4 上伊良原高木神社跡.....	131
5 上伊良原善治遺跡.....	175
IV おわりに.....	177
V 上伊良原櫻遺跡出土縄文土器の ¹⁴ C年代測定	179

図版目次

下伊良原高木神社跡

- | | | |
|------|---|-------------------------------|
| 図版1 | 1 調査中全景（東から） | 2 調査中全景（上空から） |
| 図版2 | 1 社殿解体前（東から）
3 社殿解体前拝殿近景（北東から） | 2 社殿解体前前庭東石垣（南東から） |
| 図版3 | 1 本殿跡（南から）
3 幣殿・拝殿跡（南から） | 2 本殿南の破碎礫（南から） |
| 図版4 | 1 1トレンチ拝殿東端土層（南東から）
3 1トレンチ前庭土層2（南東から） | 2 1トレンチ前庭土層1（南西から） |
| 図版5 | 1 1トレンチ前庭土層3（南東から）
3 2トレンチ中央付近土層（北東から） | 2 2トレンチ西半土層（北東から） |
| 図版6 | 1 2トレンチ東端土層（北東から）
3 4トレンチ土層（南東から） | 2 3トレンチ土層（南から） |
| 図版7 | 1 5トレンチ土層（北西から）
3 拝殿跡空中写真（上空から） | 2 6トレンチ土層（北西から） |
| 図版8 | 1 石垣1～3（南東から）
3 石垣1石段・石垣2（北東から） | 2 石垣1～3（南から） |
| 図版9 | 1 石垣1～3（北から）
3 石垣2抜取り跡のサイダービン（北東から） | 2 石垣2背面の銅鏡（北西から） |
| 図版10 | 1 調査中全景（東上空から）
3 調査中全景（東から） | 2 石垣群（上空から）
4 東端石垣南半（北東から） |
| 図版11 | 1 東端石垣南半（北東から）
3 東端石垣石段（東から） | 2 東端石垣石段土層（南東から） |
| 図版12 | 1 東端石垣石段北付近（南から）
3 東端石垣北端上層（南東から） | 2 東端石垣2トレンチ付近（東から） |
| 図版13 | 1 東端石垣北端下層（南東から）
3 東端石垣石段南の矢跡（東上から） | 2 東端石垣北端下層（北東から） |
| 図版14 | 1 北端石垣（南東から）
3 南石垣付近（上空から） | 2 北端石垣（南東から） |
| 図版15 | 1 南端石垣南東西土層（南東から）
3 南端石垣（南東から） | 2 南端石垣南北土層（南東から） |
| 図版16 | 1 石組1（北から）
3 土坑1（南東から） | 2 石組2（東から） |
| 図版17 | 1 土坑2（北東から）
3 左：土坑4（東から） 右：土坑5（北東から） | 2 土坑3（南から） |
| 図版18 | 1 前庭1・2トレンチ間（東上空から）
3 土器群出土状態（東から） | 2 同上疊と焼土（東から） |
| 図版19 | 1 土器群周辺銅鏡出土状態（南東から）
3 鳥居跡と東端石垣（東から） | 2 鳥居跡と東端石垣（東上空から） |

図版20	1 烏居跡礫石（東から） 3 烏居跡北側土坑（南から）	2 烏居跡南側土坑（南から）
図版21	1 集石1（東から） 3 集石3（北から）	2 集石2（東から）
図版22	1 集石4（南東から） 3 集石5（北から）	2 集石4下層（南東から）
図版23	1 アカホヤ火山灰層（南西から） 3 アカホヤ火山灰層（南西から）	2 アカホヤ火山灰層（北西から）
図版24	1 アカホヤ火山灰層（南東から） 3 石斧出土状態（左：南東から、右：東から）	2 石垣1東側の南北土層（北東から）
図版25	出土遺物1	
図版26	出土遺物2	
図版27	出土遺物3	
下伊良原庄屋屋敷跡		
図版28	1 全景（上空から）	2 全景（西上空から）
図版29	1 西辺石垣オルソ画像（西から）	
図版30	1 1トレンチ中央付近（南東から） 3 1トレンチ西端南壁（北西から）	2 1トレンチ西端（南東から）
図版31	1 2トレンチ西端付近（北から） 3 4トレンチ東端付近（北西から）	2 3トレンチ西半（北西から）
図版32	1 4トレンチ西半（北東から） 3 5トレンチ東端付近（北西から）	2 4トレンチ西端付近（北東から）
図版33	1 5トレンチ東端（北西から） 3 5トレンチ中央付近（南西から）	2 5トレンチ中央付近（北西から）
図版34	1 6トレンチ（北東から） 3 石組土坑検出状況2（西から）	2 石組土坑検出状況1（南から）
図版35	1 石組土坑検出状況3（北から） 3 石組土坑全景（西から）	2 石組土坑全景（北から）
図版36	1 P1（南西から） 3 埋甕検出状況（北から）	2 P2（西から）
図版37	出土遺物1	
図版38	出土遺物2	
図版39	出土遺物3	
図版40	出土遺物4	
図版41	出土遺物5	
図版42	出土遺物6	
下伊良原宮園遺跡		
図版43	1 遠景（南西上空から） 3 遠景（西上空から）	2 遠景（北西上空から）
図版44	1 全景（上空から） 3 石垣1（南から）	2 全景（南西上空から）

図版45	1 平成26年度の調査（南東から） 3 1トレンチ西半（南から）	2 1トレンチ東端（南西から）
図版46	1 石垣3北端付近（奥は4トレンチ北壁、南西から） 2 3トレンチ東端（北西から）	3 石垣1張出南東端（西から）
図版47	1 石垣1張出検出状況（南東から） 3 石垣2（北から）	2 石垣2北端付近（南から）
図版48	1 調査区南西隅付近（南西から、畔は2トレンチ北畔） 2 石垣2北端（南から）	3 石垣2・3断割り状況（北から）
図版49	1 石垣3露出前（南から） 3 2トレンチ付近の礫群（北西から）	2 石垣3露出前
図版50	1 石垣3屈曲部付近（北から） 3 石垣3南端断割り状況（南西から）	2 石垣3北端（北西から）
図版51	1 石垣3南端断割り状況（南西から） 3 全景（北東から）	2 石垣3西側石臼出土状況（南から）
図版52	1 石垣4（北から） 3 土坑2半截状況（南から）	2 石垣4（南西から）
図版53	1 立石（南西から） 3 石垣3背面天目椀出土状況（北から）	2 立石（北西から）
図版54	出土遺物	
上伊良原高木神社跡		
図版55	1 遠景（上空南から）	2 全景（西上空から）
図版56	1 全景（北西上空から） 3 本殿・合祀社跡清掃後（北から）	2 本殿・合祀社跡調査前（北から）
図版57	1 押殿跡調査前（北東から） 3 押殿跡調査後（北東から）	2 押殿跡客土除去後（北東から）
図版58	1 1トレンチ東端付近（北西から） 3 1トレンチ石垣4西（北から）	2 1トレンチ石垣3・4間（北から）
図版59	1 1トレンチ石垣4西（北西から） 3 焼土・炭検出状況（南西から）	2 1トレンチ西端（北西から）
図版60	1 焼土・炭除去後（南西から） 3 2トレンチ西壁（北東から）	2 炭層の状況（北東から）
図版61	1 石垣1～4・9（西上空から） 3 石垣5・6東端付近（東から）	2 石垣1～4（西から）
図版62	1 石垣5～7（東から） 3 石垣6・7背面（南から）	2 石垣6北辺（北西から）
図版63	1 石垣5・6間ビール瓶出土状況（北東から） 2 石垣6北西隅付近（北から）	3 石垣6西辺北側（北東から）
図版64	1 石垣6西辺北側（北東から） 3 石垣6西辺南端付近（南西から）	2 石垣6西辺南側（北西から）

- | | | |
|------------|---|---------------------|
| 図版65 | 1 石垣6西辺南端付近（北から）
2 石垣6南端付近背面土層（北東から） | 3 石垣6南西隅付近（北から） |
| 図版66 | 1 石垣6南辺西端付近（南東から）
3 石垣7（北西から） | 2 石垣6南辺西端付近（南から） |
| 図版67 | 1 石垣7前面堆積層（西から）
2 石垣7前面遺物出土状況（北西から） | 3 石垣8（西から） |
| 図版68 | 1 石垣8（東から）
3 石垣10南側土層（南西から） | 2 石垣9（南東から） |
| 図版69 | 1 石垣10（南東から）
3 石組全景（南から） | 2 石組検出状況（南から） |
| 図版70 | 1 石組基礎（南東から）
3 末社跡トレンチ土層（南東から） | 2 石組全景（北東から） |
| 図版71 | 1 北区西半・石垣11上層（南から）
3 北区東半（南西から） | 2 北区道路跡・石垣11下層（南から） |
| 図版72 | 1 北区中央付近（北から）
3 道路上の堆積層（南西から） | 2 北区土器出土状況（南西から） |
| 図版73 | 1 北区道路跡・石垣11上層（北から）
3 解体前の北参道（北西から） | 2 北区道路跡・石垣11下層（北から） |
| 図版74 | 出土遺物1 | |
| 図版75 | 出土遺物2 | |
| 図版76 | 出土遺物3 | |
| 図版77 | 出土遺物4 | |
| 上伊良原善治遺跡ほか | | |
| 図版78 | 1 調査後全景（北東から）
3 石垣（東から） | 2 調査後全景（南西から） |
| 図版79 | 1 石垣と巨岩（南東から）
3 2トレンチ北壁土層（南西から） | 2 1トレンチ北壁土層（南西から） |
| 図版80 | 1 下伊良原高木神社本殿（北東から）
3 上伊良原高木神社おとなし潤の梵字岩（北東から） | 2 上伊良原高木神社本殿（南から） |

挿図目次

	頁
第1図 伊良原ダムの位置 (1/100,000)	x
第2図 みやこ町と伊良原の位置	1
第3図 下伊良原高木神社境内図	4
第4図 上伊良原高木神社境内図	6
第5図 伊良原ダム関係調査地点位置図1 (広瀬地区等、1/5,000)	8
第6図 伊良原ダム関係調査地点位置図2 (下伊良原地区、1/5,000)	9
第7図 伊良原ダム関係調査地点位置図3 (上伊良原地区、1/5,000)	10
下伊良原高木神社跡	
第8図 社殿配置図 (1/500)	11
第9図 遺構配置図 (1/200)	折込
第10図 本殿跡布石実測図 (1/20)	15
第11図 1トレンチ土層実測図 (1/80)	16
第12図 2~6トレンチ土層実測図 (1/80)	18
第13図 2トレンチ出土銭貨拓影 (1/1)	19
第14図 2トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	19
第15図 石垣1~3実測図 (1/80)	折込
第16図 石垣1~3石段実測図 (1/40)	23
第17図 石垣2背面出土銭貨拓影 (1/1)	24
第18図 石垣2抜取跡出土銭貨拓影 (1/1)	24
第19図 石垣2前面出土銭貨拓影 (1/1)	25
第20図 石垣2抜取跡出土遺物実測図 (1/3)	25
第21図 東端石垣付近出土遺物実測図 (1/3)	26
第22図 東端石垣実測図 (1/80)	折込
第23図 北端石垣実測図 (1/40)	30
第24図 南端石垣実測図 (1/40)	31
第25図 石組・土坑等実測図 (1/20)	32
第26図 土坑等出土遺物実測図 (1/3)	33
第27図 1・2トレンチ間主要部実測図 (1/80)	34
第28図 前庭「嘉祐通寶」出土状態	34
第29図 土器・銅鏡等出土状態実測図 (1/10)	34
第30図 祭祀土器群実測図 (1/3)	35
第31図 烏居状遺構実測図 (1/40)	36
第32図 集石及び石斧出土状態実測図 (1/20)	37
第33図 集石4出土石製品実測図 (1/3)	38
第34図 柱穴出土遺物実測図 (1/3)	39
第35図 本殿・拝殿跡出土銭貨拓影 (1/1)	41
第36図 幣殿・拝殿跡出土銭貨拓影 (1/1)	41
第37図 前庭出土銭貨拓影 (1/1)	41
第38図 前庭南半出土銭貨拓影 (1/1)	41

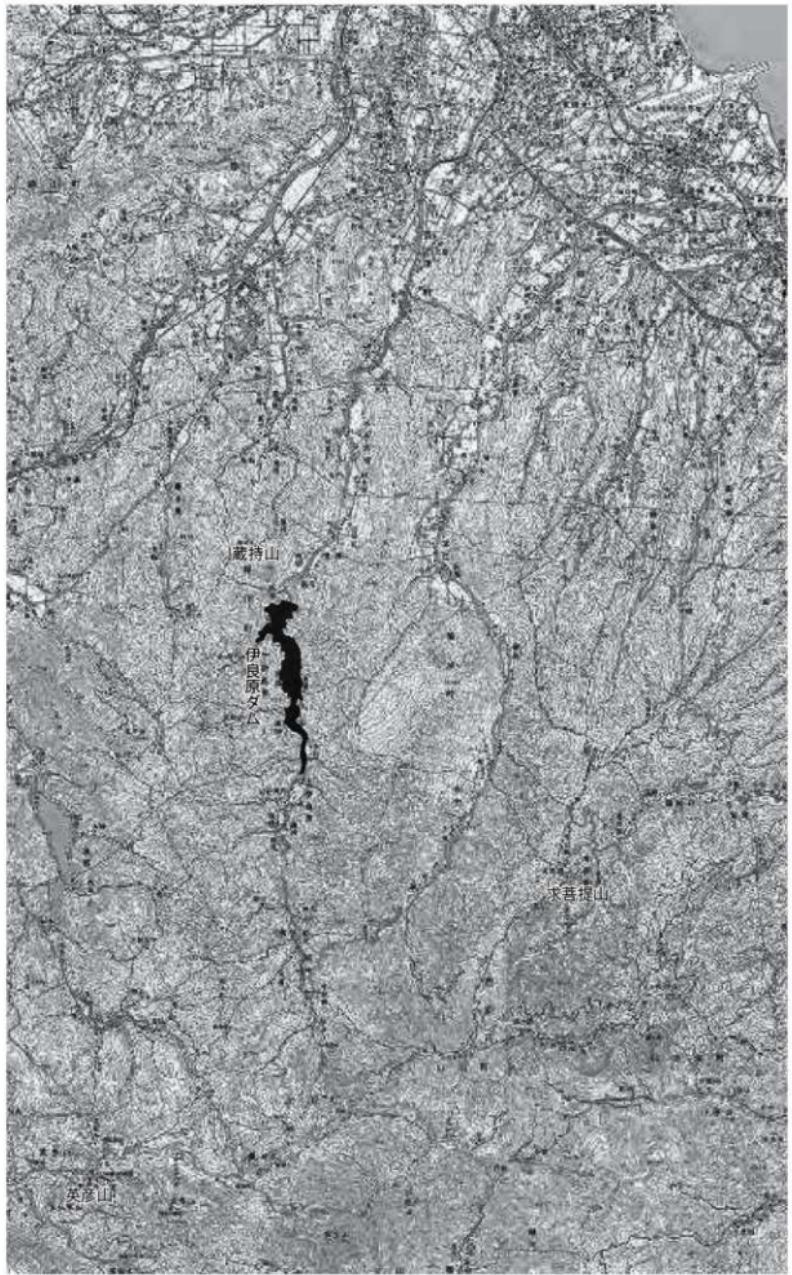
第39図	拌躑跡南出土遺物実測図 (1/3)	42
第40図	前庭南半出土遺物実測図 (1/3)	43
第41図	前庭北半遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)	45
第42図	前庭北1区出土遺物実測図 (1/3)	46
第43図	前庭北2区出土遺物実測図 1 (1/3)	47
第44図	前庭北2区出土遺物実測図 2 (1/3)	48
第45図	縄文土器実測図 1 (早期、1/3)	50
第46図	縄文土器実測図 2 (前期1、1/3)	51
第47図	縄文土器実測図 3 (前期2、1/3)	52
第48図	縄文土器実測図 4 (後期1、1/3)	54
第49図	縄文土器実測図 5 (後期2・晚期、1/3)	55
第50図	出土石製品 1 (2/3)	56
第51図	出土石製品 2 (1/3)	58
第52図	出土石製品 3 (1/3)	59
下伊良原庄屋敷跡		
第53図	庄屋敷跡遺構配置図 (1/200)	折込
第54図	白川家系図	68
第55図	白川家住宅建物配置図 (1/500)	69
第56図	1トレンチ土層図及び石組実測図 (1/40)	70
第57図	1トレンチ及び母屋付近出土遺物実測図 (1/3)	71
第58図	2～5トレンチ土層実測図 (1/80)	72
第59図	5トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	74
第60図	5トレンチ東南グリッド出土遺物実測図 (1/3)	76
第61図	6トレンチ土層実測図 (1/80)	76
第62図	6トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/6)	77
第63図	石組土坑南北土層実測図 (1/80)	78
第64図	石組土坑実測図 (1/40)	78
第65図	石組土坑出土鉄滓 (1/3)	79
第66図	石組土坑出土遺物実測図 1 (土師器カマド 1、1/3)	80
第67図	石組土坑出土遺物実測図 2 (土師器カマド 2、1/3)	81
第68図	石組土坑出土遺物実測図 3 (土師器・瓦器、1/3・1/6)	82
第69図	石組土坑出土遺物実測図 4 (陶器 1、1/3)	83
第70図	石組土坑出土遺物実測図 5 (陶器 2、1/3)	84
第71図	石組土坑出土遺物実測図 6 (磁器 1、1/3)	86
第72図	石組土坑出土遺物実測図 7 (磁器 2、1/3)	88
第73図	石組土坑出土遺物実測図 8 (1/3)	90
第74図	石組土坑周辺出土遺物実測図 (1/3)	90
第75図	柱穴・埋甕実測図 (1/20)	91
第76図	埋甕・柱穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)	92
第77図	東西石組溝出土遺物実測図 (1/3)	93
第78図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	94

第79図	石製品実測図 (1/4).....	95
下伊良原宮園遺跡		
第80図	遺構配置図 (1/100).....	折込
第81図	東西土層実測図 (1/80)	100
第82図	1トレンチ出土遺物実測図 (1/3).....	102
第83図	2~4トレンチ出土遺物実測図 (1/3).....	104
第84図	石垣1~3南半実測図 (1/40)	折込
第85図	石垣1~3北半実測図 (1/40)	折込
第86図	南端石垣1・2間出土遺物実測図 (1/3).....	110
第87図	石垣1張出部南縁群中出土遺物実測図 (1/3).....	111
第88図	南端出土遺物実測図 (1/3).....	112
第89図	石垣3屈曲部付近実測図 (1/40)	114
第90図	石垣4実測図 (1/80)	115
第91図	石垣4東側出土遺物実測図 (1/3).....	115
第92図	土坑・立石実測図 (1/40)	116
第93図	土坑・柱穴等出土遺物実測図 (1/3).....	118
第94図	試掘トレンチ周辺出土遺物実測図 (1/3).....	119
第95図	1・2トレンチ間出土遺物実測図 (1/3).....	120
第96図	1・3トレンチ間出土遺物実測図1 (1/3).....	121
第97図	1・3トレンチ間出土遺物実測図2 (1/3).....	122
第98図	1・4トレンチ間出土遺物実測図 (1/3).....	123
第99図	2・3トレンチ間出土遺物実測図 (1/3).....	125
第100図	その他表土等出土遺物実測図 (1/3).....	126
第101図	石製品実測図1 (1/3).....	127
第102図	石製品実測図2 (1/4).....	128
第103図	石製品実測図3 (2/3).....	129
上伊良原高木神社跡		
第104図	社殿配置図 (1/500).....	131
第105図	遺構配置図 (1/200).....	133
第106図	1・2トレンチ土層実測図 (1/80)	134
第107図	1トレンチ出土遺物実測図 (1/3).....	135
第108図	拝殿及び下層実測図 (1/60)	折込
第109図	石垣2・3間出土遺物実測図 (1/3).....	139
第110図	石垣3・4間出土銅錢拓影.....	140
第111図	石垣5・6間出土遺物実測図1 (ガラス瓶、1/3).....	141
第112図	石垣5・6間出土遺物実測図2 (1/3).....	142
第113図	石垣6北西隅付近実測図 (1/40)	144
第114図	石垣6西辺南実測図 (1/40)	折込
第115図	石垣6南西隅付近実測図 (1/40)	折込
第116図	出土金属製品実測図 (1/3).....	150
第117図	石垣6・7間出土銅錢拓影 (1/1).....	150

第118図	石垣6・7間出土遺物実測図（石製品、1/3）	150
第119図	石垣6・7間、石垣7上出土遺物実測図（1/3）	152
第120図	石垣8下出土遺物実測図（1/3）	153
第121図	石垣10実測図（1/40）	153
第122図	本殿跡・末社跡実測図（1/100）	155
第123図	末社跡付近土層実測図（1/80）	156
第124図	方形石組実測図（1/40）	157
第125図	本殿周辺出土遺物実測図（1/3）	157
第126図	「寛延」石柱実測図（1/4）	158
第127図	拝殿下北半出土遺物実測図（1/3）	159
第128図	拝殿跡北東部出土遺物実測図1（1/3）	160
第129図	拝殿跡北東部出土遺物実測図2（1/3）	162
第130図	拝殿跡南西部等出土遺物実測図1（1/3、1/1）	162
第131図	拝殿跡南西部等出土遺物実測図2（1/3）	163
第132図	御輿庫西出土遺物実測図（1/3）	164
第133図	石垣11実測図（1/40）	165
第134図	北区石段実測図（1/40）	166
第135図	北区東西トレンチ出土銅錢拓影（1/1）	166
第136図	北区東西トレンチ出土遺物実測図（1/3）	167
第137図	北区出土遺物実測図1（1/3）	168
第138図	北区出土遺物実測図2（1/3）	169
第139図	北区出土遺物実測図3（1/3）	170
第140図	縄文土器実測図1（早期、1/3）	171
第141図	縄文土器実測図2（後・晩期、1/3）	172
上伊良善治遺跡		
第142図	土層実測図（1/40）	175
第143図	遺構配置図（1/200）	176
上伊良原櫻遺跡出土縄文土器の ¹⁴ C年代測定		
第144図	測定資料の較正年代	180
第145図	採取土器及び付着状況	183
第146図	前処理状況	184

表目次

		頁
表1	伊良原ダム関係調査地点一覧	2
表2	測定した資料の ¹⁴ C年炭素年代(BP)と暦年較正年代(Cal BC)	180



第1図 伊良原ダムの位置 (1/100,000)

I はじめに

1 発掘調査に至る経過

伊良原ダムは、大分県境に聳える靈峰英彦山山塊に源を有し、みやこ町東部（旧犀川町・豊津町）・行橋市を略南北方向に貫流する二級河川祓川の上流に建設中の重力式コンクリートダムである。洪水の調節、水道用水の開発、既得取水の安定化及び河川環境保全のための流量確保を目的として計画された。集水面積36.8km²、湛水面積12.2ha、総貯水量2,870万m³を有する県下有数の多目的ダムである。

水没地は福岡県京都郡みやこ町犀川（旧犀川町大字）下伊良原・上伊良原に及び、ことに下伊良原地区では祓川本流の東西に位置した集落中心部の全てが、上伊良原地区でもその一部が水没することとなり、またダムサイト北（下流域側）の横瀬でも付け替え道路等の関連事業によって一部の家屋が移転した。

埋蔵文化財の調査は平成18年7月、ダム建設に付帯する工事用道路建設から開始された（下伊良原中ノ坪遺跡）。その後は、用地買収の進捗及び各種の工事工程との調整を検討したダム建設事務所サイドが試掘地点・本調査地点の優先順位を付し、それに対して文化財サイドは工事に支障を与えないように人員を配置して対応した。なお、発掘調査を実施した地点を第1表に示した。着手から11年の長期間を要し、平成28年度に旧伊良原小学校校舎部分の地点（竹ノ内遺跡Ⅲ区）をもって漸く現地での発掘調査は終了した。

このダム建設事業（県営祓川流域総合開発事業）が着手されるまでの経過については既に刊行された「伊良原」I～IVで触れられているので、ここでは略することとする。

2 発掘調査の組織と関係者

本報告に掲載した各遺跡の発掘調査・報告書作成に至る間の福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。

福岡県教育委員会

総括	25年度	26年度	27年度	28年度
教育長	杉光 誠	城戸秀明	城戸秀明	城戸秀明
教育次長	城戸秀明	西牟田龍治	西牟田龍治	西牟田龍治
総務部長	西牟田龍治	川添弘人	川添弘人	辰田一郎
文化財保護課長（副理事）	伊崎俊秋	赤司善彦	赤司善彦	赤司善彦
企画係長	吉田東明	吉田東明	吉田東明	吉田東明



第2図 みやこ町と伊良原の位置

	25年度	26年度	27年度	28年度
企画係技術主査 (地域担当)		大庭孝夫	宮地聰一郎	宮地聰一郎
企画係主任技師 (地域担当)	大庭孝夫			
九州歴史資料館				
総括				
館長	荒巻俊彦	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
副館長 (副理事)		伊崎俊秋	伊崎俊秋	
副館長	篠田隆行			飛野博文 (報告担当)
参事			飛野博文 (調査担当)	
参事 (文化財調査室長)	飛野博文 (調査担当)	飛野博文 (調査担当)		
企画主幹 (総務室長)	圓城寺紀子	塙塙孝憲	塙塙孝憲	塙塙孝憲
企画主幹 (文化財調査室長)			吉村靖徳	吉村靖徳
企画主幹 (文化財調査室長補佐)	吉村靖徳	吉村靖徳		伊崎俊秋
技術主査 (文化財調査班長)	小川泰樹	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二 (整理担当)
庶務				
企画主査	長野良博	山崎 彰	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	青木三保	南里成子	宮崎奈巳	西村知子
	南里成子	宮崎奈巳	西村知子	
主任主事	近藤一崇			原野貴生
				秦 健太
主事	三好洸一	秦 健太	秦 健太	甲斐進也

なお、発掘調査に当たっては、地元在住の方々をはじめ、調査に参加した方々、みやこ町・同教育委員会、伊良原ダム建設事務所、工事関係者などの御理解・御協力を得て無事に終えることができました。改めて感謝申し上げます。

遺跡名	調査期間	調査面積 (m ²)	内容	報告書
民俗文化財調査	95~98			〔伊良原-民俗文化財の調査〕
1) 上伊良原台ノ原遺跡(1~3次)	07.04~09.11	3,700	縄文包含層、古代・中世集落、近世石畳道路跡	〔黒報〕2291〔伊良原Ⅱ〕2011
2) 下伊良原中ノ坪遺跡	06.07~06.10	3,300	縄文包含層、中世集落	〔黒報〕2221〔伊良原Ⅰ〕2009
3) 下伊良原寺ノ谷遺跡	06.09~07.01	4,500	縄文包含層、中世集落	〔黒報〕2227〔伊良原Ⅰ〕2009
4) 下伊良原寺ノ谷遺跡	07.01~07.02	1,500	中近世集落(瑞光寺跡)	〔黒報〕2227〔伊良原Ⅰ〕2009
5) 下伊良原寺ノ谷遺跡	11.10~11.12	2,100	縄文包含層、中世集落	〔黒報〕2227〔伊良原Ⅰ〕2009
6) 下伊良原広瀬原中切橋遺跡	11.1	120	手保15年(1730)	
7) 下伊良原中ノ原遺跡	11.12~12.05	3,900	縄文・弥生・集落・包含層、中世集落、ドングリピット	
8) 下伊良原羽後屋敷遺跡	12.06~12.09	1,350	縄文包含層、中世墓地(?)	
9) 下伊良原中ノ切道跡	12.09~13.03	4,500	縄文集落、中世集落	
10) 下伊良原竹ノ内遺跡Ⅰ区	13.01~13.09	5,000	縄文包含層、中世集落・墓地	
11) 下伊良原竹ノ内遺跡Ⅱ区	12.09~12.12	1,800	縄文包含層、中世集落	
12) 下伊良原竹ノ内遺跡Ⅲ区	16.05~	3,000	伊良原小学校北側挖去後	
13) 下伊良原竹ノ内遺跡Ⅳ区	12.10~12.11	1,500	縄文包含層、中世集落・墓地	
14) 下伊良原西の谷遺跡Ⅰ区	13.01~13.03	800	中近世集落	
15) 下伊良原西の谷遺跡Ⅱ区	13.04~14.03	4,000	縄文集落・ドングリピット、中世集落・墓地	
16) 下伊良原西の谷遺跡Ⅲ区	13.07~13.09	1,700	縄文・中世集落	
17) 下伊良原西の谷遺跡Ⅳ区	13.09~13.11	60	散在地	
18) 下伊良原屋敷遺跡	13.05~13.08	3,000	江戸後期庄屋屋敷跡	本冊
19) 下伊良原高木神社跡	13.07~14.03	3,000	1222年に遷坐した高座山末社跡。縄文・中世～	本冊
20) 下伊良原中ノ坪遺跡	13.08~13.11	1,200	縄文包含層・六・中世集落	
21) 下伊良原中ノ坪遺跡Ⅴ区	13.08~13.12	1,500	中近世集落	
22) 下伊良原中ノ坪遺跡	14.02~14.05	3,000	中世集落・墓地	
23) 下伊良原中ノ坪遺跡	16.02~16.07	500	中近世集落(?)	本冊
24) 上伊良原高木神社跡	06.11~06.12	1,100	縄文集落	〔黒報〕2227〔伊良原Ⅰ〕2009
25) 上伊良原下ノ坪遺跡	01.01~01.02	600	縄文・中世	〔黒報〕2227〔伊良原Ⅰ〕2009
26) 上伊良原遺跡群	07.04~07.10	14,000	縄文集落・中世集落・墓地	〔黒報〕2291〔伊良原Ⅰ〕2011
27) 上伊良原森木道跡	08.06~08.11	500	縄文・中世	〔黒報〕2327〔伊良原Ⅲ〕2012
28) 上伊良原マトロ口遺跡	11.06~11.10	450	縄文集落	
29) 上伊良原高木神社跡	14.04~14.11	3,000	819年創建の豪彦山末社跡。	本冊
30) 上伊良原高木神社跡	14.10~14.12	200	水田を墾う浜水路(昭和50年代)	本冊

表1 伊良原ダム関係調査地点一覧

II 位置と環境

地理的、歴史的環境についてもほかの報告書で繰り返し記されることと思う。ここでは上伊良原・下伊良原の二つの高木神社の歴史について、大正8年（1919）刊行（以下は、1975年復刻版によった。）の伊東尾四郎編『京都都誌』「第八章神社 第三節村社」の記載を引用しておく。なお、原書は縦書きであるが横書きとし、旧仮名遣いは改め、読みやすいように文頭を下げている。

高木神社 伊良原村大字下伊良原字荒良鬼山にあり、高皇產靈尊、神皇產靈尊、玉積皇產靈尊、生皇產靈尊、足皇產靈尊、大宮日売命、御食津命、事代主命を祀る、例祭四月十日

この社もと大行事と称す、維新の際高木神社と改む、社伝に云わく、当社往昔は宮園（傍点筆者）にありしが、貞応元年（1222）三月今之地に移れり、この地方もと英彦山の神領地たり、嵯峨天皇弘仁五年（814）彦山開基第四世羅運上人、四十八所に大行事社を建て、高皇產靈神を祀る、当社は即ち其一なり、天正十五年（1587）豊臣秀吉、彦山の神領没収後は、下伊良原の氏神として、崇敬することとなれり

境内神社数社あり、阿蘇神社は阿蘇日売命、健磐龍命、豊日別命を祀り、貴船神社は高龜神、閻羅神を祀り、大歲神社は大歲神を祀り、須佐神社は須佐之男命を祀り、猿田彦大神社は猿田彦神を祀り、鷦鷯神社は天忍穗耳命、伊弉諾命、伊弉冊命、素戔雄命、大山祇命、旬々廻智命、大日売命を祀る、鷦鷯神社はもと下伊良原字岩屋にありしが、明治四十五年（1912）六月高木神社に移転合祀せり、同時に鎧越、山ノ神、登岩、石山、赤岩の五处にありし山神社も亦移転合祀せり

高田氏豊前国志に「白山大行事、下伊良原村にあり、祭神神產靈命、高御產靈神、玉產靈神、当社は後堀河天皇貞応元壬午年三月鎮座、敷地氏子下伊良原村、祭礼四月六日、末社阿曾明神、貴船二座、岩屋権現、山靈神社」とせり

この社豊國樂の歌の事は、第十一章風俗習慣の条に記せり

〔京都郡神社明細帳〕

当社は往昔英彦山神社の神領地なりしに依り、彦山開基第四世羅運末代守護のため神領地七口四拾八個所に、高皇產靈神を大行事社として祭祀す、時に弘仁拾年なりと云う、而して大行事の最初に祭祀せられたるは、落合口にして、伊良原口を其次に祭祀せしものにて、第二番目と云えり

当社は天正一五年迄は彦山の領地なりしに依り、英彦山神社とともに、当社も国主領主の保護する所なり、然るに同年豊臣秀吉、九州治定の後、押（神社）領を没収せられたるに依り、爾來下伊良原氏子中より、造営することとなれり

英彦山神社古記に、彦山七口の事、□居越口、□野崎、伊良原靈仙見石云々とあり、□居越は鳥居越にして、上伊良原高木神社、伊良原とあるは即ち下伊良原高木神社にして、從前より英彦山神社の攝社なり

附記当社高皇產靈尊の御神体は、最古金銅鑄造にして、弘仁年間勧請の当時、彦山より遷座奉斎せるものと云い伝う、今内陣の奥殿に奉安し、古来より神職の外、決して余人の拝することを得ざる所なり

古神体（神皇產靈尊の御体仏像なるを以て、維新的時、神鏡に改め、古神体は御奥庫の一隅に奉蔵せり）其背銘に、森之宮白山大行事者、彦山七口之一也、貞応元年三月十四日与阿蘇大明神同時於荒良鬼山遷座（正保四年（1647）十一月因旧記再刻之）とあり

附記当社最初勧請の時は、宇森に祭祀せらる、又阿蘇神社は、境内神社なり、此阿蘇神社

は、高木神社勧請以前より、此地に鎮座なりしも、高木神社鎮座以後、崇敬厚き故、高木神社を本社とし、後荒良鬼山に鎮座の節、同時遷座せるものなり、又豈前国誌に後堀河天皇貞応元年三月鎮座とあるは、此古神体背銘により起因す

元和四年（1618）拝殿再建棟札に、奉建立大行事拝殿一字、天下泰平、国土安穩、所願成就、大權那長久、子孫繁昌、富貴万福、人民安全、守御順円満、皆令満足、農前領主細川越中守忠興公、惣庄屋白川次郎兵衛藤原鎮信、願主白川形丁尉藤原鎮次、元和四年戊午九月下旬とあり

正保三年（1647）御神体彩色の置札に、奉彩色大行事御神体六軸、天長地久、国泰安民、百穀成熟、諸願充足、永退障難、極増安富、村御無事、信蒙頼兼、御神体一軸、施主御代官中村三太夫殿、願主白川次郎兵衛藤原鎮信、惣庄屋白川十左右門藤原鎮兼、社司熊谷勝太夫、正保三丙戌十月吉祥日とあり

延宝六年（1678）神殿再建棟札に、奉造立伊良原鎮守大行事宝殿一字、聖主天中迦陵頻伽声哀民衆生者、我等今敬礼、神光高照、德風鎮扇、国家安全、村中榮華、豊前当太守小笠原遠江守源朝臣長真公、願主白川次郎兵衛藤原信親、惣庄屋白川十左右門藤原信経、社司熊谷勝太夫種氏、延宝六歳次戊午秋九月廿日造畢りとあり、裏面に此時公儀伐払社地雜木、江戸杉賜植五千本、御神徳倍増、祈御村繁榮者也とあり

附記、本文に杉苗木五千本を賜植すとあるは、領主より杉木を植付けたるものなり

宝永二年（1705）神号額奉納（大行事）の三字、裏面に（彦山座主僧正相有敬書、宝永二乙酉孟夏穀日）とあり

宝永一〇庚辰一二月建築華表表銘に、筋奉行三宅円治氏子中とあり（宝永8年：1711に正徳と改元：筆者註）

慶応四年（1871）戊辰閏四月の書上に、文政五戊八月郡代杉生十左衛門殿、御用材伐払の節、領主御紋付挑燈御寄附相成候とあり

〔京都郡神社明細帳〕鷹嶺由来記（寛文十一年（1671）梅本房記述）

夫豈前国仲津郡鷹嶺三所大権現と申奉るは、伊弉諾命、伊弉冉命、天忍穗耳命の三柱の御



第3図 下伊良原高木神社（大阪大成館編『大日本名所図録－福岡県の部』1898、大蔵出版会『福岡県名所図録図絵』1983復刻）

神にて云々。往昔彦山第六祖羅運上人、法行修歴の砌、或夜此巔に宿す、夜半奇き夢を感じ云々、三つの鷹飛て、巖穴に入て、跡を見ず、巖戸合して又もとの如し、運□其奇瑞を歓喜して、社壇を創建して、斎き祭りける、時に人皇五十二代嵯峨天皇弘仁四年癸未之夏也、是より感応靈験日夜に新なり、世人初めて此巔に神靈のいますことを知て、歩みを運び、懇祈するに、所願満足せずと云ことなし、上人は是より本山に遷往して云々、其後も此巔に往返し給うこと度々なり、靈鷲の奇瑞に因て、鷹巔と号す、此巔は彦山四境神領地の内に、兜卒の摩尼殿を擬して、四十九個の靈巔あり、即其第十一番はなり、往古は彦山福泉坊、此巔の官司たりしが故あって其後蔵持山梅本坊、社務を統て云々、(以下略之)

寛文十二年(1672)神殿再建の棟札に、奉修作仲津都鷹巔三所大権現宝殿一字、天下泰平云々、惣庄屋白川十左右門藤原信経、願主緒方善兵衛親元云々、寛文十二年壬子秋七月吉祥日とあり

明治三年(1869)鷹巔七月九日神社と改正す、祭日四月八日

明治四十五年(1912)六月□日字岩屋より当村社高木神社境内に移転、同年同月同日伊良原村大字下伊良原千二百五十三番地字鎧越鎮座無格社山神社、同村同大字千百四番地字山ノ神鎮座山神社、同村同大字二千二百四十番地字登岩鎮座山神社、同村同大字三百七十一番地ノ二字石山鎮座山神社、同村同大字五百八十八番地字赤岩鎮座山神社、同村同大字千三十八番地字高座鎮座山神社、同村同大字千三百七十一番地字井ノ上鎮座木祖神社、同村同大字千六百七番地字下地ヶ原鎮座山神社、鎮座山神社、同村同大字二千四百十番地字山田ノ下鎮座山神社、同村同大字六百四十五番地字竹ノ畑大日神社、同村同大字二千二百八十七番地字安良鎮座木祖神社、以上十二個所鎮座の無格社を移転合併し、社号は由緒明確なるを以て、鷹巔神社の社号を存置す

高木神社 伊良原村大字上伊良原字向田にあり、高皇產靈尊、神皇產靈尊、國常立命を祀る、例祭四月十三日

この社も下伊良原の高木神社と同じく彦山四十八所の大行事社の一なりしが、天正十五年豊臣秀吉神領没収後は、上伊良原村の氏神として、崇敬することとなれり

境内神社三社あり、貴船社は象岡女命を祀り、須佐神社は須佐之男命を祀り、山神社は大山祇命を祀る

高田氏豊前国志に「白山大行事上伊良原村にあり、祭神大己貴命、高皇產靈神、國常立命、敷地氏子上伊良原村、祭礼八月十六日末社荒神社、貴舟社、山靈神」とせり

〔京都都神社明細帳〕

当初は往昔官幣中社英彦山神社の神領地なりしにより、彦山開基第四世羅運末代、神領地守護のため、領内四十八個所に、高御產靈神を勧請し、大行事社とし、祭祀する処の一社にして、実に嵯峨天皇弘仁年中の創立なり

天正十五年迄は、当地方は彦山の神領地にして、本社は彦山の摂社とし、英彦山神社とともに、國主領主の保護せらるる処となりしが、同年豊臣秀吉九州治定の後、神領を没収せられたるより、爾後氏子(上伊良原)より造営祭祀することとなれり

英彦山神社古記録に、造営並に額面奉掲の記事あり、即左の如し

奉再建大行事神社毫宇、大旦那彦山靈山寺座主僧正有依(敬白)永享三辛亥年(1431)八月善法日

奉掲大行事社額一面、大旦那彦山座主法嗣小僧都有休(敬白)助願施主云々、元和二丙辰

年（1616）八月吉辰日

同書に左の記事あり 藤ノ宮大行事の社号彦山座主助有法親王御簾中者、在昔仲津郡城井城主宇都宮頼房嗣子宇都宮信勝第一女云々（中略）、御簾中從前宇都宮家産土神なる由縁に依り、藤ノ宮には御崇敬被為在、猶於座主院も、亦神領内産沙（土ガ）神として云々（中略）、景行天皇十二年熊襲反す云々（中略）、其後熊襲叛す、於是日本武尊云々（中略）、御巡狩之砌、伊良和羅之大藤葛御聖覧の上、忝も賜賞詞之榮、尚御稟威亦有幾千載之余榮在、幸撫此故事、大行事社御遷座當時藤ノ宮号奉つる起原（源カ：筆者註）に云々（下略）

本社に寄進札二枚を蔵す、其文左の如し

寄進一上酒壺丁（金式朱式拾本）細川越中守

一銀札三百目小倉細野御氏

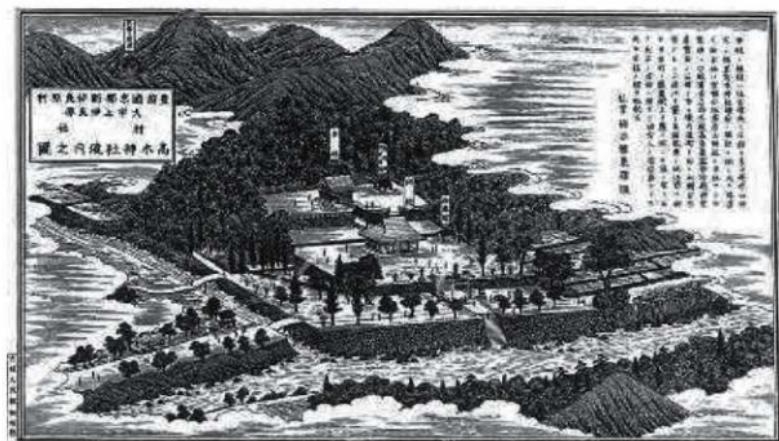
附記、前件二枚の札には年号月日記載なきも、古老の伝うる所によれば、寛永三年御神体改影、及社殿改革のことあり、當時国主たる細川家、並に郡役たる細野氏よりの寄附なりと云う。

寛保三癸亥年（1743）九月、額面（大行事の三字）奉掲す、筆者は英彦山龍王院法眼孝有なり
享保二丁酉年（1717）十一月石鳥居建設、額面（大行事の三字）の筆者は慧明別鹿朴覽義之印とあるのみ、氏名分明ならず

寛延元年（1748）拝殿再建棟札に 奉建立大行事拝殿一字、社司熊谷左膳、宮柱緒方忠兵衛、庄屋進久兵衛、惣氏子中、寛延元辰歲八月吉祥日

天保十一年（1840）神殿改築棟札に、当社建替棟上天保十一年七月二十四日、棟梁田川郡上津野村栗山四郎兵衛、同栗山清藏とあり

附記、棟札に建替とあるも、天保の改築は腐朽の木材を取替、大營繕を施したるなり、彫刻物の如きは、全く従前のものを用い居りて、此彫刻物は竹田番匠の作なりと云う、故に棟札に頗る粗略の記載方なり



第4図 上伊良原高木神社（大阪大成館編『大日本名所図録－福岡県の部』1898、大蔵出版会『福岡県名所図録図絵』1983復刻）

両高木神社の本社である彦山（享保14年：1729から英彦山）は大峰山・羽黒山とともに日本三大修験山に数えられている。ただ、北魏善正上人の開山、役小角の入山、宇佐法蓮の彦山靈仙寺創建等その開創は伝説の域を出ない。彦山の名が見える最古の同時代史料は右大臣藤原宗忠の日記『中右記』にある寛治8年（1094）の記事で、大宰府安樂寺（天満宮）と弥勒寺（宇佐宮）・彦山が「鬪乱」したというものである。当時の大宰大式藤原長房が帰京・辞職する。この頃には一定の勢力となっていたことが窺える。そして12世紀には多くの経塚が営まれる。中でも、大永年間（1521～1528）に求菩提山（豊前市）の胎蔵窟から発見されて現在に伝わる国宝銅板法華經（康治元年：1142）、大分県国東長安寺に伝来する重文銅板經、そして現存しないが作成経緯の記録が残る彦山の銅板經などに同一人物が複数見えることで、豊前南部から豊後北部にかけての社寺間に強い紐帯が存在したことが指摘されている。建保2年（1213）の奥書があるとはいえ、成立年代に疑義が出されている『彦山流記』には巖石寺（田川郡）・藏持山法輪寺を北限とする七里四方の彦山四至や域内への大行事社の設置が記されている。中世には380坊を擁したというが、戦国時代に龍造寺・大友氏の焼き打ちにより焼亡、加えて天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州入りに際して、島津氏と通じた咎で神領を没収された。以後、近世豊前領主であった黒田・細川・小笠原各氏や九州諸藩の信仰を受けて、幕末まで250坊が維持されていたという。明治元年（1867）の神仏分離令、同5年の修験道廃止令によって英彦山靈仙寺は廢されて英彦山神社となった。

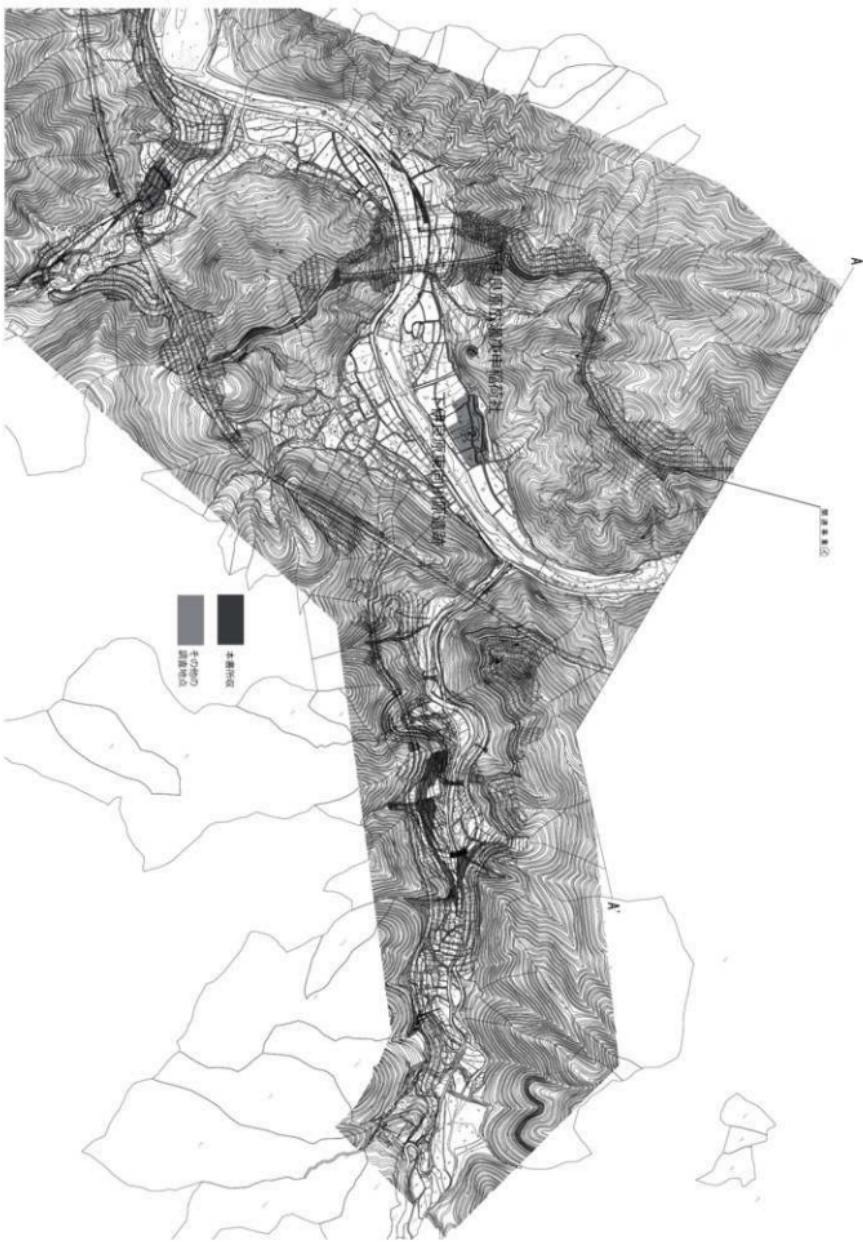
『彦山流記』中で彦山神領の北限とされた藏持山は、伊良原ダム堰堤の北西近くに位置する標高478mの秀麗な山である。ここもその始まりは神功皇后に仮託され、また超能力を持つ彦山有縁の僧静謹が承平・天慶期（931～947）に藏持山宝船寺を開創したと『彦山流記』にある。彦山を中心とする近隣の靈山・修験道場「彦山六峰」の一つに挙げられ、杉の巨木・金銅十一面觀音懸佛は県指定文化財、その他町指定された遺品が残存する。これも明治以降、郷社藏持山神社と名称を変えて存続したが明治33年の大火で全山焼亡、終戦時までに山中は無人化して現在に至るという。この藏持山で坊跡を横切る林道が計画され、それに伴う発掘調査が平成16・17年度に犀川町（現みやこ町）教育委員会によって実施された。調査を行った一つの坊跡では焼土層が深い位置、最新の遺構である礎石建物跡とその基壇より下位であることから明治大火の裏付けはできていないが、出土遺物には明治期の硬貨や陶磁器など相応しいものがあった。また、別の地点では火葬骨片や龍泉窯系蓮弁文楕・白磁口禿皿を伴う集石遺構があり、巨岩の籠から出土した大量の土器類の中には高く大きな高台をもつ黒色土器などもあって、開山伝承の一部を裏付けるともいえるが、さらなる調査が期待される。

藏持山から尾根伝いに3kmほど北に神楽山城跡がある。鎌倉幕府によって平家与力であった豊前国府在庁官人板井氏の所領は下野御家人宇都宮氏に宛てられ、この神楽山城に入ったと言われる。宇都宮宗家は後に東隣りの城井谷（築上町）に遷るが、神楽山城が位置する木井馬場及び祓川上流域は後々まで宇都宮氏の基盤となる地域であった。豊臣秀吉の九州仕置きに伴う伊予への転封の命に従わなかつた当主宇都宮鎮房は、やがて豊前六郡を知行した黒田孝高（如水）・長政父子によって中津城（大分県中津市）で謀殺され、豊前宇都宮氏は滅びる（天正16年：1588）。しかし、築上町城井谷、両伊良原地区を含むみやこ町木井谷のみならず、近隣には、今なお宇都宮家臣を名乗る人々が多く暮らしている。

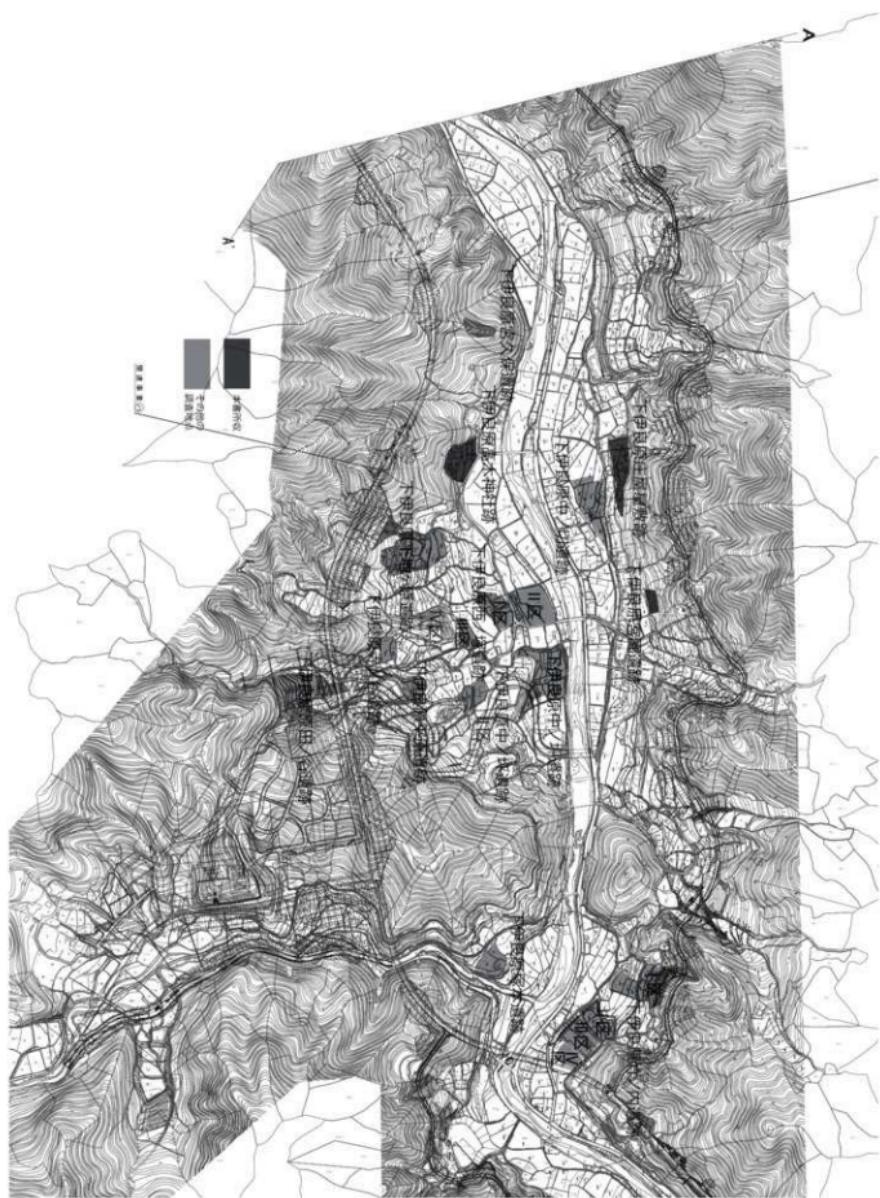
文献

添田町教育委員会『彦山総合調査報告書』2016

みやこ町教育委員会「藏持山遺跡群」（『みやこ町文化財調査報告書』第9集、2012）



第5図 伊良原ダム関係調査地点位置図1（広瀬地区等、1/5,000）



第6図 伊良原ダム関係調査地点位置図2（下伊良原地区、1/50,000）



第7図 伊良原ダム関係調査地点位置図3（上伊良原地区、1/50,000）

III 調査の内容

1 下伊良原高木神社跡

(1) はじめに

地区的幹線道路である国道496号線は犀川下伊良原（かつての犀川町大字下伊良原）に入ると、北から高座・広瀬を過ぎて一端人家が途切れ、両側に山が迫る険路となる。国道が祓川を横切って東岸に移ると視界が開け、両岸に住宅と田畠が混在する光景が広がっていた。特に左（西）岸では棚田が発達する。下伊良原高木神社はこの地区の左岸の北端近く、西側山裾に東面して位置していた。現在はかつての集落の西側山上に造成された集団移転地内に移転新築されている。

「Ⅱ 位置と環境」に引用したように、この神社は古い歴史を有するといわれている。教員の傍ら郷土史研究に熱心であった故神崎昭吾氏が「下高木神社建築の起源」と題する資料紹介を『郷土史さいがわ』第12号、1994で行っている。かつて下伊良原高木神社の社司であった熊谷家に伝わる、大正9～11年に行われた拝殿等の建築に関わる日誌のような形態の文書の紹介を中心とし、『京都郡誌』に記載された神社創始以来の事象も簡略に記載されている。そこから今回の調査に関わると思われる部分を抜粋しておく。

明治29年（1896） 広坪大石垣新設・石階段改築

明治45年（1912） 神殿後方山岳ヲ採掘開拓シテ、後方上部ヲ繰上げ現今ノ状況トナル。

無格社ヲ合併ス ※開墾人夫、一戸十人役デ百日間、千人役トナル

大正3年（1914） 背後の山に新規造成した壇上に宝曆14年（1764）改築の社殿を一部改変して移築。（神崎氏はこの件に言及がないが、「伊良原一民俗文化財の調査一」『福岡県文化財調査報告書』第143集、1999に記されている）

大正10年（1921） 3月10日 建築委員会ヲ開設。（以下略）

（一）拝殿改築ノ事、（一）社務所改築ノ事、（一）御輿庫位置変更ノ件、（一）幣殿屋根仕換ノ事、（一）神殿屋根塗換ノ事

右二関スル設備

（一）拝殿地ナラシ、石垣組直シノ事（以下略）

大正10年11月7日 上棟式二付会議 六人出席

一、11月19日棟上二決ス。

一、地ならし、地づき、15日釜の河内出夫



社殿撤去前の下伊良原高木神社



社殿等撤去後の下伊良原高木神社跡

(註：釜の河内は隣接地区)

大正11年1月30日 社務所上棟式

一、惣代、部長ニテ建築テ致ス。午前ハ地ナラシ、石据時間ヲ費ス

午後建方、午後6時上棟ニナル。(大正11年8月30日遷宮)

この記録以降の改変については調べようがないというのが実情であるが、現況は概ねこの時の状況を保つものであろう。ただ、南端付近には間知ブロックの上に自然石が積まれた部分があり、そうしたコンクリートを使用した個所は戦後もかなり過ぎて造られた構造物だと思われる。

平成25年(2013)6月18日、みやこ町教育委員会文化財担当が自作した木製慰靈塔を借用、旧社地であるということで簡略な神事を行ってから発掘調査に着手した。当時は祓川を挟んで反対側となる東山麓の下伊良原庄屋敷跡の発掘調査を行っていて、そこから小人数を派遣、最終的に8月初旬までに全員が下伊良原高木神社へ移動した。

調査着手前、社殿や立木は除去され、拝殿東の花崗岩製間知石積の一部と、東端(最前面)の鳥居付近の自然石石垣もほぼ全て除去されていた。残存する石垣は本殿背後及び本殿・幣殿・拝殿を画する花崗岩製間知石積み、拝殿前のお部の間知石積だけであった。

発掘調査は残されていた本殿布石、拝殿東の石段跡のそれぞれ中心を結ぶラインを東へ延長し、それに接して南側に幅3mのトレンチ(1トレーナー)を掘削することから開始した。

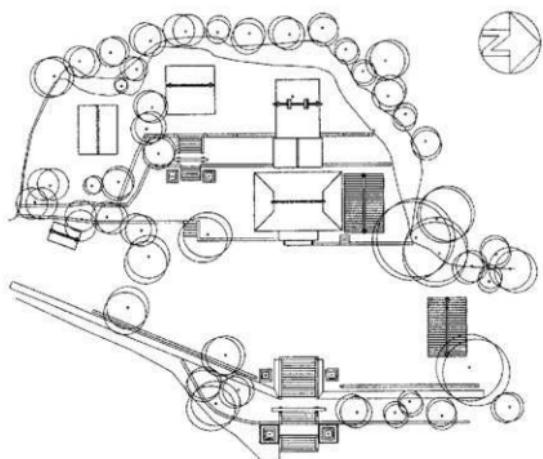
この過程で、本殿・拝殿が位置していたところの大部分が花崗岩バイラン土を掘削して平坦化した場所に位置することが判明し、これは上記した明治45年の「神殿後方山岳ヲ採掘開拓」の痕跡と見てよいのであろう。また、拝殿東の大部分の石材が抜き取られた石段(石垣3)の下から、



発掘調査着手前の神事



重機による表土剥ぎ



第8図 社殿配置図 (1/500)



第9図 潟原配電図(1/200)

古い時期の花崗岩製間知石積（石垣2）と自然石を用いた石列・石段の一部（石垣1）が、そして最東端（最前面）の石材が抜き取られた部分の下位からも石垣（東端石垣）が現れた。その直ぐ西側では階段状に並ぶ石列（耳石）も確認している。さらに、拝殿東の広場（以下、前庭と呼ぶ。）は0.8~1.6mほどの厚さで主として砂を用いて客土されていることがわかり、後日その客土部分を重機で除去した。

1・2トレチの土層観察から、前庭では厚い客土の下に青灰色の薄い層が広がっていて、その下層に土師器細片が比較的多く認められたことから、この青灰色土を除去して遺構検出を試み、焼土やいくつかの土坑状の落ち込み、祭祀に伴うと思われる土器群と銅錢を検出した。

また、さらに下位には鮮やかなオレンジ色のアカホヤ火山灰のブロックが混ざっていて、その下に黒色系の堆積層があり、その上面でいくつかの集石遺構を確認、この黒色系堆積層を除去して遺物が全く出土しなかったことから面的な発掘はここで終えている。

最終的に発掘調査を終了したのは3月19日であった。調査面積は約3,000m²である。

(2) 層序

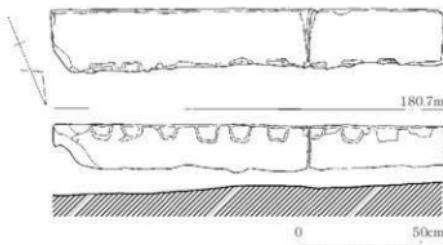
1トレチ（図版1・3・4・5、第11図） 本殿・拝殿等の社殿中軸線に沿って設定したトレチで、北壁で土層図を作成した。なお、本殿南側で破碎された花崗岩が検出されたので、それについてもここで触れておく。

本殿地区 最大で0.2mの堆積層が認められるが、この地区の大部分は花崗岩バイラン土を削り込んで平坦面を造成したもので、これが明治45年の「神殿後方山岳ヲ採掘開拓」を示すのであろう。本殿背面の崖面にも花崗岩間知石を積み上げるが、その基底部から0.8mほど東の堆積層中で幅0.4m、深さ0.05mほどの細砂が詰まった落ち込みが認められた。ある時期の雨落ち溝であろうが、バイラン土への掘り込みは認められなかった。東側は幣殿との間の間知石積の西2m付近で地山が落ちていて、これは裏込めに伴うものであろう。前（東）面の石積は高さ1.4mほどでは残存。

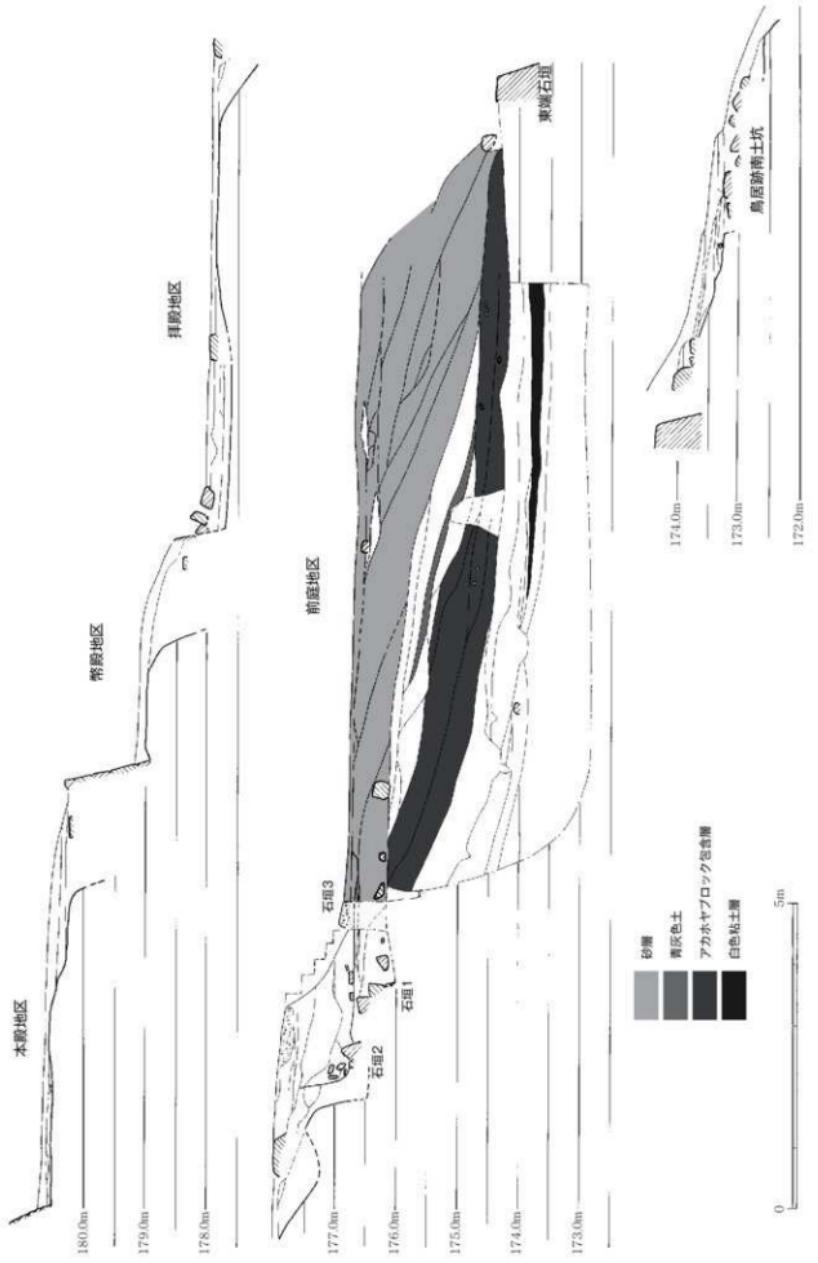
なお、畦にかかっていないので土層図に示していないが、本殿の基壇化粧と思われる布石がコ字形に残されていた。図版3上の写真で黒く見える3点が凝灰岩、白く見える石材は花崗岩でこれは後補であろう。南辺東端の凝灰岩を用いた石材を図示した（第10図）。大きさは長さ1.6m、幅0.2~0.25m、高さ0.2m弱である。設置時に見えない社殿内側となる面に上端幅約10cm、下端幅5cm強、最大で15cmほどの深さの矢穴が10cm前後の間隔で10個所確認できる。その他の表に現れる面は丁寧に敲打して整形しているが、研磨は施しておらず工具痕がそのままである。

また、本殿南で花崗岩の「集石」を検出した（図版3）。当初は遺構と考えて図化していたが、その過程でこれは地山開削時に露出した風化していない花崗岩を、平坦面を作るために割ったものであろうとの認識に達したためここには図示していない。

幣殿地区 社殿が位置する付近は、本来全体に北西から南東にかけて傾斜する地形で、土層図作成位置がその表層に近い位置に当たっているために黄褐色土が地山となっていた。トレチ北に残した畦を挟んで北側は本殿地区同様に下位の



第10図 本殿跡布石実測図 (1/20)



第11図 1 トレンチ土層実測図 (1/80)

花崗岩バイラン土が露出する。拝殿との間の間知石積は一部壊れて高さ1mほどが残存するが、本来はやはり1.4mほどであったようである。

拝殿地区 ここも本殿同様、薄い堆積層が覆うが、花崗岩バイラン土を掘り込んで造成した平坦面であった。ただ、拝殿が置かれた平坦面の南東部は暗黄褐色土を地山としていて、掘削がバイラン土まで及んでいない。上記したように境内地は全体に北西から南東にかけて下降していて、後述するアカホヤ火山灰の堆積はそういう地形によるものであろう。

ここでは、拝殿東端の礎石付近から東側で土層が大きく乱れていて、地中から間知石積（石垣2）と自然石の石段（石垣1）が検出された。石垣2は1段が残るのみで、その抜き取り跡は礎石の東0.8m付近から掘り込まれている。石垣2の抜き取り跡は、解体された拝殿東の石垣3に伴う石段の基底部となるコンクリートの下に続く水平な土層から下位に及んでおらず、土層から見て石垣1は石垣2が使用されていたときには既に埋没していたものと思われる。

前庭地区 石垣1の基底部に連続する灰黄褐色土は、緩傾斜面となるものの現前庭を造成する際の地山であることは間違いない。当初はそれだけでなく最終的な地山であると認識していたのであるが、その「地山」にも炭や土師器片が混入することからさらに掘り下げると、青灰色の薄い層が3m近い幅で緩く勾配をもって現れ、その直下の層にも土師器片が比較的多く混入していた。この青灰色土層が統一して設定した2トレンチでも確認されたことから両トレンチの間及び2トレンチ北側でも面的に追っていった。この青灰色土を除去した後に、いくつかの散在する川原石や焼土塊、土坑状の落ち込みや祭祀行為と思われる土師器や銅錢の集中する様を検出した。

青灰色土層下の土師器を包含する層のさらに下位に鮮やかなオレンジ色のアカホヤ火山灰プロックを包含する暗灰褐色土があり、さらに下位に黒色系土層があって、この上面が集石遺構の検出面となる。さらに掘り下げると、灰白色の混ざりの無いきれいな粘土層が最大0.2mの厚さで現れ、奇異な感を抱いた。さらに下位の西端では標高174m付近で締まりのない粗砂層が現れた。この層は灰白色～青灰色～灰褐色を呈し、部分的に層状となるところもあるが連続的なラインを引くことが困難なため一括している。結果的に、集石炉を検出した黒色系土層から下位では遺物を出土しなかったことから、面的な発掘は黒色系土層の除去で終了した。

この1トレンチ東端付近で、自然石を立てた石垣を再び検出し（東端石垣）、その前面でも礎が詰まった落ち込みを確認したが、この落ち込みは結果的に鳥居の基礎であろうと判断している。

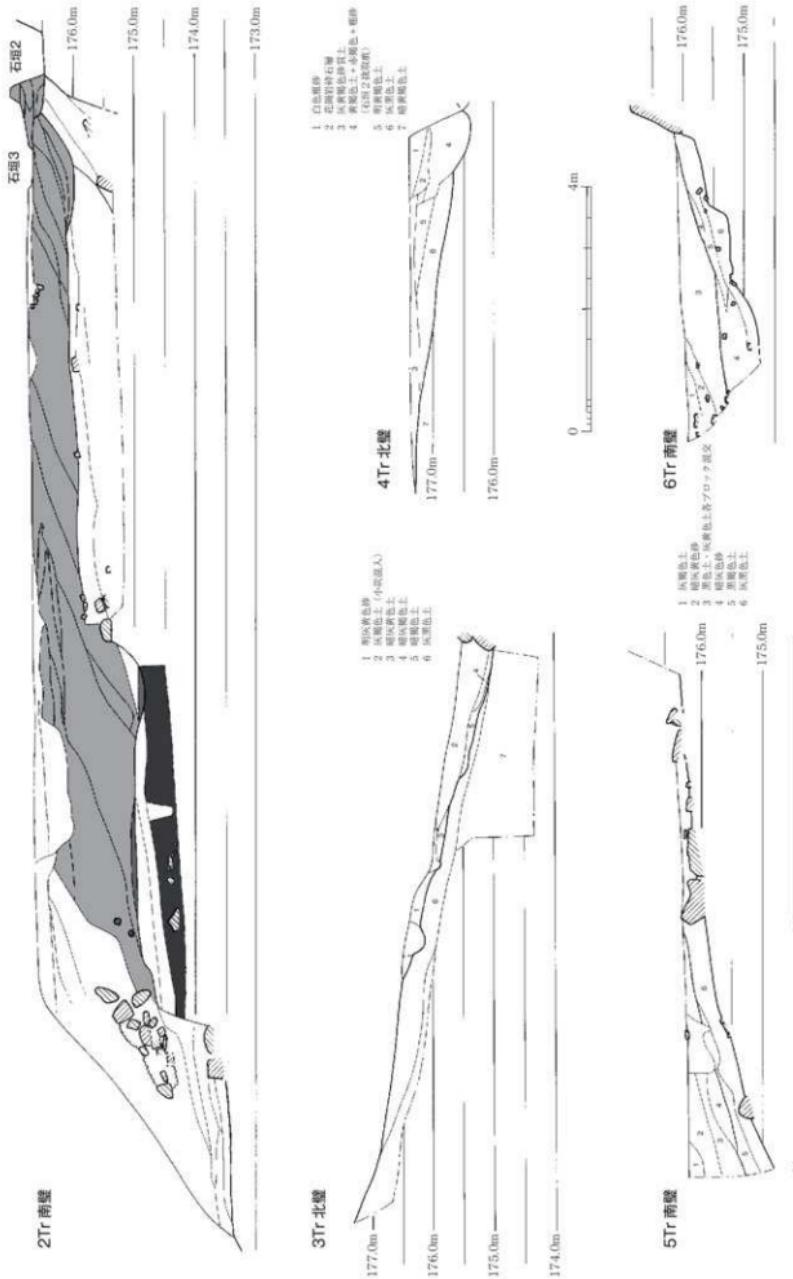
なお、1トレンチ内前庭部西寄りの客土中の浅い部分で床の半分ほどが被熱赤変した長軸2.5m、幅0.9m、深さ0.2mの不整長円形の落ち込みを確認したが、新しい遺構と判断して略した。

2トレンチ（図版5・6、第5図） 1トレンチの北7mの付近に設定した略東西トレンチで、南壁で土層観察を行った。

図右端のしっかりととした落ち込みは石垣2の抜き取り跡で、構築時の掘形はその前面（東側）へさらに0.6mの広がりをもつ。石垣2の抜き取り跡の1.2m東に石垣3の抜き取り跡、すなわちこの度の社殿移転に伴って抜き取られた石材の痕跡がわずかに残っていた。

石垣2抜き取り跡の床面から西側は花崗岩バイラン土であるが、その床面東端からバイラン土は急角度で落ちていき、その上に崩落したバイラン土、灰黄褐色砂質土、灰黒色砂質土がのるが、後二者は硬く締まった土質で自然堆積層であろう。この灰黒色砂質土は、1トレンチで検出した石垣1石段直下の土層と同じもので、後述する集石遺構の地山となる層である。

さて、石垣2抜き取り跡から東へ3.6mの付近までは比較的細かい単位で客土がなされていて、以東はごく大雑把な客土となり、厚さは西端付近で0.7m、東端の法面付近では1.6mほどとなる。



第12図 2～6 レンチ土層実測図 (1/80)

客土は砂・砂質土（真砂土）でなされている。

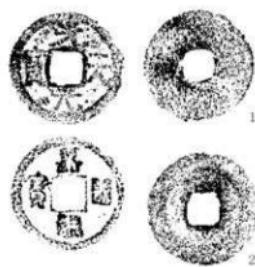
なお、西端付近の細かい客土の中、最下層は床面が浅く凹んでいる。意図的なものであろうが、現状でこの部分に対応する構造物が認められない。このトレンチの直ぐ南側で自然石を用いた石垣1が途切れているが、これは石垣2を構築する際に破壊された可能性も考えられる。石垣1基底部は、検出した範囲で大部分が標高176.2m付近である。2トレンチ南壁には接する北端部では石材が小振りとなり、標高が176.4m付近となっていて、先のU字形となる土層の西側最高所が176.5m付近であることは石垣1に伴う凹みと考えるには都合がよい。ただ、石垣の前面に接するように深さ0.5mほどの深さの溝を敷設する意味は説明困難である。

1トレンチと同様の青灰色土が石垣2抜き取り跡から9mの付近で長さ1.2m、厚さ0.2m程の規模でU字形に堆積していて、さらにその東端から1.3mほど離れた位置でも0.1mに満たない厚さでほぼ水平に堆積している様子が観察できた。青灰色土の西端には平面長0.4~0.6mのやや大振りの石材が置かれたようになっていて、その直上で垂直に近い「不自然な土層ライン」が見られる。この石材の3mほど南では同一面といってよいレベルで焼土塊も検出していて、本来は南北7mほどの長さで川原石が並べ置かれていた可能性がある。さらには、痕跡を確認していないが、並べ置いた川原石の西側背面にかつての「神社の主要部」が置かれていた可能性も考えられよう。

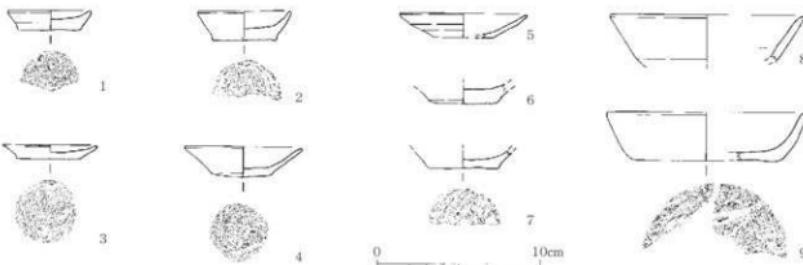
このトレンチでは東端石垣は小石材を残すのみで、かつ浮いた位置で多くの中小石材が投棄されたような状態で観察された。新たな石垣（今次移転前に存在した石垣）を構築する際に、古い石垣の石材を抜き取って取捨選択したものと考えてよいであろう。1トレンチ以降では東端石垣のはほとんどが基底部が残存して対照的であるが、大きすぎて抜き取ることができなかった、あるいは必要がなかったということであろう。移転前の石垣は比較的小振りで大きさが揃っていた。

出土遺物

銅錢（図版25、第13図）2トレンチは後述する祭祀土器群の近くに偶然設定している。このトレンチから出土した銭貨は出土地点を細かく記録していないが、寛永通宝以前の銭貨の出土は祭祀土器群周辺だけであることから、この2枚もそれに伴うものと判断している。1は光天元宝（初鑄前蜀918年）で、遺存状態が悪く、背面も郭・輪とも鋳出していないといつてもよいくらい弱いものである。2は篆書で鋳出された嘉祐通宝（初鑄北宋1056~1063年）である。これも粗悪な感があり、背面もはっきりしない。



第13図 2トレンチ出土銭貨拓影 (1/1)



第14図 2トレンチ出土遺物実測図 (土器、1/3)

土器（第14図） いざれも厚く客土された「砂層下位」あるいは「盛砂下」と注記がある土器で、客土時の地山付近から出土したものとしてよい。

1・2は肉厚の底部から体部が高く立ち上がり、2は特に深くなる。胎土・作りは良好で、いざれも黄褐色系、復元口径は5.2、5.7cmを測る。3～5は体部の立ち上がりが浅い皿で、3・4は赤味をもって焼き上がる。これらも胎土・作りともに良好といってよい。復元口径はそれぞれ5.9、7.3、7.8cmである。

6は肉厚の底部片で、内面が焼けるようである。外底面に糸切り痕は見えず、撫でて仕上げているのであろう。7は胎土精良といってよく、赤味をもって焼き上がる。

8は体部が外反気味に立ち上がる口径12.0cmに復元できる皿で、これも胎土・作りが良好である。9は体部が内彎気味に立ち上がり、復元口径は12.4cm。これも胎土・作りともに良好である。

3 レンチ（図版6、第12図） 北端石垣の背面、最も北側かつ高位に設定したレンチである。堆積は薄く、黄色系の砂質土が基盤となる。この層は上方では暗く、下位に行くにつれて明るく発色する。この基盤層のすぐ上に暗灰褐色の層があるが、これは南側の集石遺構がのる黒色系の土層に対応するもので、空中写真で南西・北東にかけて帶状に続く様がよくわかる。

この北端の石垣は炭が入った落ち込みの上にのるが、その落ち込みの西端が石垣の直ぐ裏に現れている。

4 レンチ（図版6、第12図） 拝殿が置かれた平坦地の南端近くに開けたレンチである。拜殿跡の大部分は花崗岩バイラン土を掘削して造成しているが、南端付近では暗黄褐色土（1・2レンチで大規模な客土がなされた直下の層に相当）が一部で現れていて、南東部の一部に客土が施されていた。

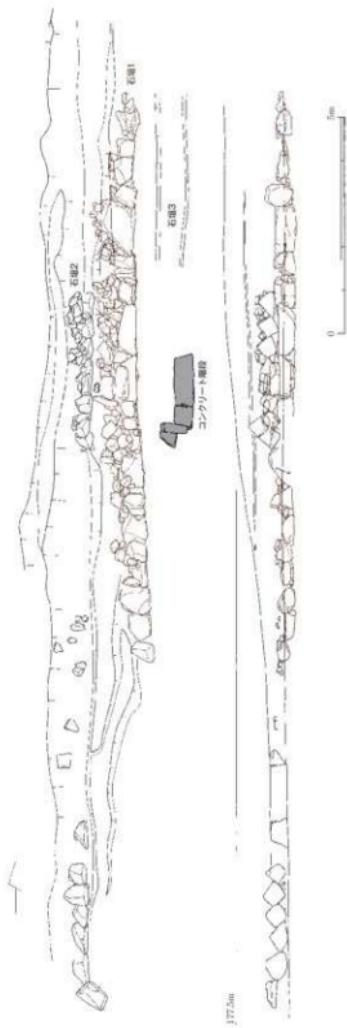
ここでも石垣2を抜き取った跡が顕著で、それを埋める際に間知石を作成する際の残滓と思われる花崗岩の細石などが使用されている。客土は灰黑色土・明茶褐色土を使用している。

5 レンチ（図版7、第12図） 4レンチの直ぐ南東、前庭部に開けたレンチで、範囲は東端段落ちまで及んでいない。

ここでは1・2レンチのような砂を用いた大規模な客土が行われておらず、最下層に縄文土器や土師器を包含する灰黑色土が0.2～0.3mほどの厚さで堆積、上面は緩やかに傾斜する。その上はやや細かく分層できるが、1・2レンチの大規模客土に相当する層がここでの1～3あるいは1～4層であると思われる。

6 レンチ（図版7、第12図） 5レンチの南に設定したもので、ここも掘削範囲は東端にまで達していない。

4レンチとは逆で、下層がより分層可能であるが、ここは暗灰色～黒色系の土からなり、上層は黒色土・黄褐色土のブロック混じりの土が厚く覆う。最上層から3層目までが明らかに客土で、1レンチの土質とは随分異なるが対応するものであると思われる。



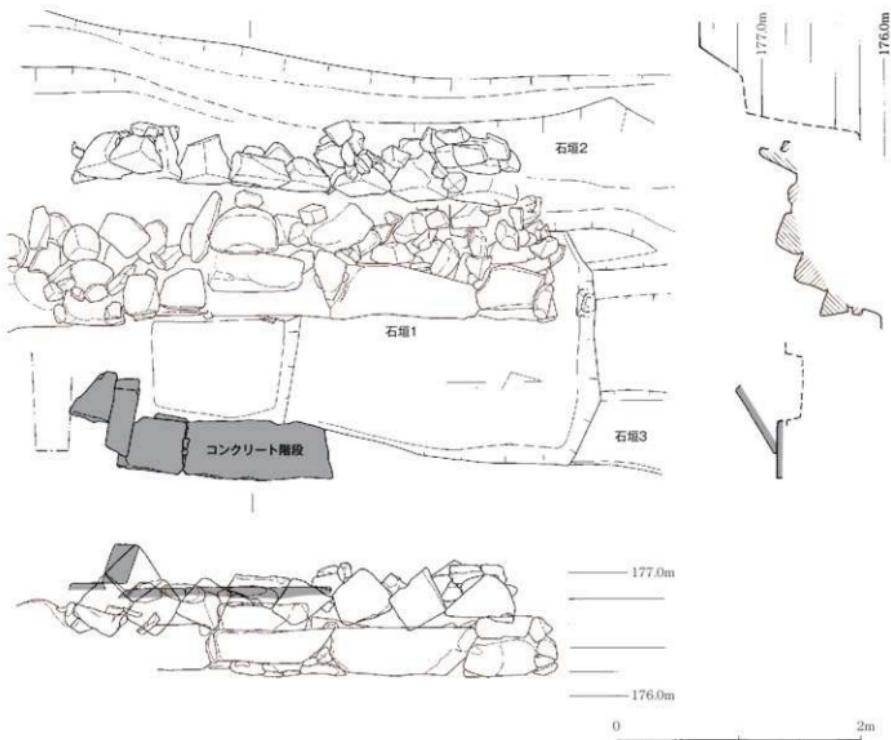
第15図 石屋1~3断面図(1:80)

(3) 遺構と遺物

1) 石垣・石列

石垣1（図版8・9、第15・16図） 石垣1～3はそれぞれ近い位置にあって、明瞭な先後関係がある。1トレンチの土層で見たように、石垣1を覆う水平な堆積層は石垣2の基底部やや上方にとりつき、石垣2を壊した抜き取り跡を埋めて石垣3の石段（調査時は抜き取られて南側の耳石・最下段のコンクリートが残っていた）が造られていた。従って、築造は石垣1→石垣2→石垣3の順に交替していく。石垣3はこの度の移転に伴って破壊されたものである。

石垣1は長さ13mに及び、高さは1～3段積みが残存、中央付近で高さ0.7mを測る。不整形の自然石を平積みあるいは立て置いたりしている。南北方向にさらに延びていたか判断の材料を欠くが、残存部の中央付近に頂部の平らな比較的大型の石材を二つ並べていて、そのうちの南側の石材は3段積みの石段状となる。石垣2に近すぎることから3段目が本来の位置を保つものか不安があるが、少なくとも2段目は本来の姿を留めていると思われる、その位置がちょうど検出した範囲の中央に位置することから、この13mの長さの石垣は本来の姿を留めている可能性も考えられよう。



第16図 石垣1～3石段実測図 (1/40)

また、北端付近で石材が小さくなることも、これが本来的に北端であることから手を抜いたと想像することもできよう。

出土遺物

鉄錢（図版25）「1・2トレンチ間石垣1の前面」と注記される鉄錢。錆のために変形、砂が付着などで実測図を示していない。直径24cm、最大厚0.2cmほどである。X線を透過しても文字は見えず無文のようである。方形孔の一部が残る。

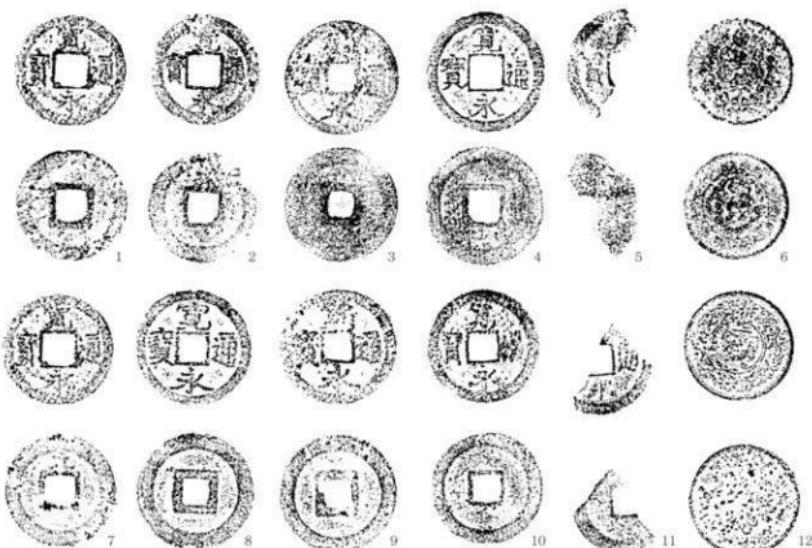
石垣2（図版8・9、第15・16図）南端の倒れた間知石から残存する北端まで17mほどを測るが、途中も多くの石材が抜かれていて、残存する北端以北も掘削した範囲では全ての石材が抜かれていた。この度の移設前の状況は拝殿正面石段から南へ10mほどのところで、石垣3は西へ屈曲して石垣2へ繋がっていたようである。今回調査した残存する南端付近の石積みは位置的に見て最後まで使用されていた石垣2であろう（第8図）。

石材の抜き取りは1・4トレンチの土層で示した。この4トレンチの北付近で、抜き取り跡から外底面にシンボルマークと「三ツ矢」を陰刻した灰味帯びる緑色半透明なビンの一部が出土していて石垣2の石材抜き取りの時期を示している。同時に、それは石垣3の構築時期をも示す。

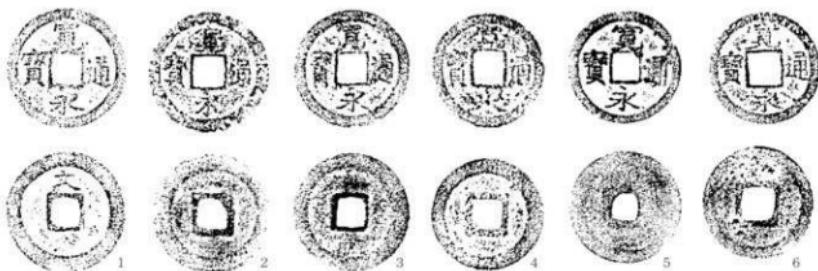
この石垣について、継続して使用された南端付近はともかく、中央付近のはば最下段だけが残されていた意味はわから



第17図 石垣2背面出土銭貨拓影（1/1）



第18図 石垣2抜取跡出土銭貨拓影（1/1）



第19図 石垣2前面出土銭貨拓影 (1/1)

ない。見えないはずの石垣1を残す意図があったのであろう。

なお、わずかに2段目が残る南端の最下段間知石の背面上に寛永通宝1枚が置かれていた。

出土遺物

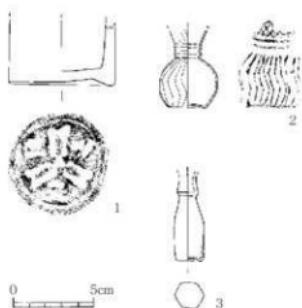
銭銅（第17～19図） 第17図は間知石の裏側、石の上に置かれていた「寛永通宝」。作業員に確認していないが、あるいは発掘時に掘り出したものを置いたのではないかという疑いも抱いている。

第18図1～6は1トレンチの北に設定した畦より北側の、7～12はその畦を除去する際に石垣2の「抜き取り跡」出土とあるが「抜き取り跡・掘埋土」出土とすべきであろう。寛永通宝10点、半錢硬貨・一錢硬貨各1点である。1・2・

7が直径2.2cm、3・8が同2.3cm、4・9・10が同2.4cmを測る。2は表裏に鉄錆が付着、3は方形孔周縁の郭、外周の輪ともに不明瞭になっている。5は非常に薄いもので、11と接合する。7は背面上部に「元」とある。6は「明治十年」(1877)の半錢。表面に龍を描き、真下から「明治」と左回りに印字される。12は「大正十」までは読めるが、もう一文字、1～3の漢数字が入るようである。表面の主文は五七桐で、真下に「十」が位置する。前者が直径2.2cm、後者は同2.3cmである。

第19図は石垣2前面出土。1～3が畦北側、4が畦から、5・6は1トレンチからの出土である。1～3はいずれも直径2.4cmを測り、1は背に「文」と陽刻される。4～6はいずれも直径2.3cm。6だけ珍しく緑青を吹いておらず、材質が違うのであろうか。

ガラス製品（図版25、第20図） 1・4トレンチ間の石垣2抜き取り跡から出土したガラス製品である。1は底部に「三ツ矢」の文字がそれぞれシンボルマークの間に陰刻されたガラス瓶。底部はほぼ完周し、体部片も数点ある。2は青味を帯びる透明な小型瓶で、高さ4.8cmが残存。底部は小さな上げ底、球形に近い体部は縱方向に凹凸を連続させるが、直線ではなく2度屈曲させている。しかも、外面だけでなく内面も凹凸をもつていて器壁の厚みはほぼ同一となるようである。球形体部の上端は一端はすばまって2条の突帯を巡らせるが、その上はまた広がって外面に斜格子を陽刻している。3も非常に薄い透明な瓶で、残存高5.3cmほどであるが図上端は全て欠く。底部はやはり小さな上げ底となり、体部を六角形としている。対角線上にバリが縦位に2本残り、他の表面もざらついていて、滑らかではない。小さな気泡が見える。



第20図 石垣2抜取跡出土遺物実測図 (1/3)

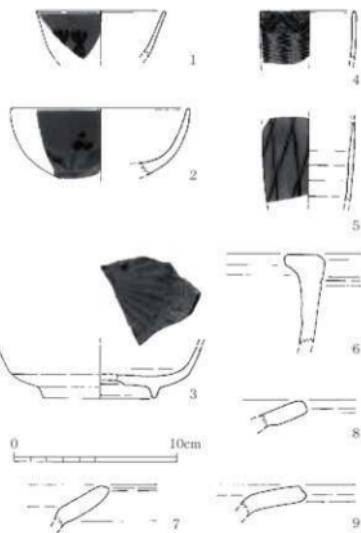
石垣3（図版8・9、第15・16図）今回の移設に伴って多くが持ち去られた花崗岩間知石積みである。ダム事務所作成の地形図及び民俗調査に伴って作成された社殿位置図によって、拝殿正面石垣の南10mほどの位置で屈曲して石垣2へ連結していたことがわかる。石段基部のコンクリートと南側耳石の一部だけが残されていた。

東端石垣（図版10～13、第22図）前にも記したが、1トレンチ掘削後、大規模な客土を重機で除去する際に南端の間知ブロック北側で、露出させないままに地山の礫と判断して大きな石材を数個外した。なお大型石材があることがわかつて浅い部分で掘削を止めた結果、長さ24mほどの弧状の石垣を検出した。検出後の写真（図版11-1）には、南端の巨石の南に3、4個所の凹みがあり、これが誤って除去した石材の痕跡である。その背面（造成された前庭）の堆積を見ると、石材が無くなる付近から南（奥）には黒色系・白色系の土層が見えるが、これらが抜き取られた石垣に伴う直近の客土ということができる。したがって、南端はさらに数m伸びていたと思われるが、北端に関しては石材を埋めた掘形が図示部で終わることから、ここで完結していたといってよい。

基底部に立てられた石材は概ね0.4～0.6mの高さをもつが、南端近くでは高さ1.2mを超える巨石を立てている。検出した南端から10.4mほど北までは石材を立て据えていて、そこから4m弱ほどの間は立てた石材が無く、横置きされた直方体に近い石材と小礫が置かれていた。横置きされた石材が唯一残された石段の踏石で、大部分が花崗岩で構成される東端石垣の中ではほとんど唯一の凝灰岩である。ここが石段の最下段であったと思われる。対応する石材がないが、再び大型の礫が遺棄され、かつ西へ張り出す部分までの2間=3.6mの幅であったと思われる。この少し西側で検出した階段状の塊石がこの南端に対応することからそれも石段の一部と想定している。因みに、石段の直ぐ南に立てられた石材上面に矢穴が残っていた。先端幅約4cm、深さも4cmほどである。

推測した石段の北側はまた様相が異なっている。石段跡の直ぐ北の巨石の一つは東西方向に置かれたように見えるが、本来的な位置を保っていないのであろう。意図的に割ったものか、破面が新しいようにも思える。そのすぐ北の石材は南北方向に掘えられているが、これも上半が削られたようにも見える。そこから3mの間は巨石ではなく、裏込めに用いられたような小石材だけである。さらに北では3個の巨石が並ぶが、明らかに浮いた状態であった。北西部の背面に詰めたような石材が見えたことから、これら3個の巨石を外すと下位から明らかに組んだ石積みが現れた。これが本来のもので、何らかの理由で3個の巨石を用いて補修したものと思われる。

図版2-2は移設前の前庭へ上の石段とその北側の石垣である。この写真的石垣が移設に伴って全て抜かれていることが、2トレンチ土層との比較で明らかであろう。民俗文化財調査時の社殿配置図(1/1000)を拡大してこの石垣と狛犬台座との距離を測ると約3mであり、この東端石垣とはほぼ同じ位置にあったことになる。移設前の石垣は先の図版に見るように比較的大きさの揃った石材を積んでいて、第21図 東端石垣付近出土遺物実測図(1/3)



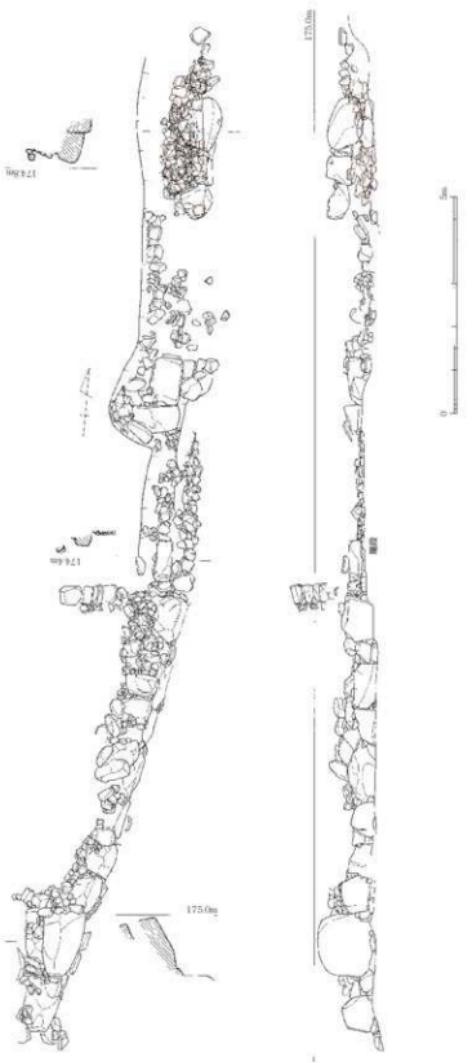


圖22 四 黑雲石板灰岩層 (1.80)

目地に小礫を多用していない。

移設前、参道の石段には二つの踊り場があり（図版2参照）、下段のそれは狛犬台座の上面に據え、上段のそれに鳥居を置いていた。また、両狛犬の背後には上段踊り場に高さが揃う下段石垣があつて、見かけ上、上段石垣はその上にのっている。この上段石垣の基底部を確認していないが、下段石垣がある以上、それほど深く入っていると考える必要はなかろう。

狛犬台座上面の正確なレベルを記録していないが、各種の写真を見ると東端石垣の基底部は狛犬台座上面とほぼ同じレベルにある。また、第9図に調査時に撤去した北側狛犬の台座を示しているが、東端石垣の推測される石段幅に比べて両台座の間隔が狭くなっている。従って、この東端石垣が今次移設した狛犬ひいては石垣に先行することは間違いない。また、後述する巨石を用いた鳥居跡も、その北土坑は狛犬台座に覆われていた。配置からみて東端石垣で推測した石段に伴うとして問題がなく、これらがセット関係にあったと考えている。抜き取られた石垣と平面的にもほぼ重なる東端石垣の石段以南は、抜き取られた石垣の基底部に利用されていた可能性がある。既に過去の造作で基底部まで多くの石材が抜き取られた北半では、平面的な位置も異なっていて別個に積み上げられていたはずである。

出土遺物

土器等（第21図） 石垣に直接伴うとは言い難いが、その周辺からの出土品を図示した。

1～5は「東端石垣前面最下層」の注記があり、石垣東側の地山に近い付近から出土した陶磁器類である。1は口縁部の1/4が残存する染付で、外面には「林」をデザインしたような施文が鮮やかな青色で発色する。また、口端部は光沢をもつて露胎ではないが、茶褐色となる。2は肥前染付によくある施文をもくらわんか椀片。3は内底面に型押しで花弁を陰刻する焼成不良の磁器で、花弁中央部が盛り上がり、立ち上がる部分にもごく浅い花弁がスタンプされるようである。白濁した釉を掛けるが、外面の垂れる部分では褐色を帯びる。内面及び高台部にも目痕が残り、かつ高台内は所謂蛇の目凹形高台となる。この高台は18世紀に現れ、明治以降まで使用されるという。4は筒状の染付口縁部付近小片で、文様は手描きのようでは鮮やかなコバルトブルーに発色する。5もやはり筒型の染付片。内面は露胎、外面には網目状の文様を施文するが、これは斜格子を描いたものではなく、鋸歯文を上下に連続したようである。6は石段の直ぐ北、小礫に混在していた陶器質の甕口縁部片で、口縁部上面は水平となり、その外側を面取り、下位にしっかりした沈線を刻む。胎土に1～2mmの砂粒を含むが、器表は非常に滑らかに仕上がっている。内外面ともに赤味をもつ。

7～9は1トレンチ東端付近出土の土師器鍋口縁部片で、これは明らかに石垣とは無関係の遺物である。口縁部が発達した同巧の形態の鍋で、今回の調査ではこの種の鍋が一定数出土していて、この遺跡の鍵となる遺物である。これについては後述することになる。

北端石垣（図版14、第23図） 東端石垣除去の経験があって、重機による掘削に際して石材に触れたら残すように注意して検出したものである。東端石垣北端から約6mの距離を置き、やや西側、本来高位となる部分に積み上げられていた。

東端石垣と異なって石材はいずれも平積みとしていて、構造的にしっかりしたものとは思えない。川原石を中心に花崗岩も数個使用している。南側は基底部をほぼ水平とし、地形が北に向かって高くなるが、頂部は高さを揃えていたようで、したがって北端は1段で終わっている。全長6.3m、最大高0.8mほどであった。

3トレンチの土層説明でも触れたが、この石垣の大部分が炭を多く交えた土坑の埋土上にあり、地山が赤変する部分もあった。ただ、この焼土坑の精査を怠っている。

南端石垣（図版15、第24図）

東端石垣南端の南8mの付近で検出した。この付近には花崗岩の大小の礫が多く散在し、この石列の南に堆積層があった。石列自体堆積層中に築かれたもので、高さは0.6m、2段程度でしっかりした感じのものではない。略東西方向に置かれ、東端（下位）に接するように小礫が連続するが、この小礫群は本来のものか後世のものか確認できていない。

石垣から南に向かってレンズ状の堆積が見られ、中に小炭を多く交えた黒色系のものがあり、ここから土師器鍋等が出土した。ただ、必ずしも遺物の出土地を峻別できていないため、「前庭南半出土遺物」でまとめて図示している。

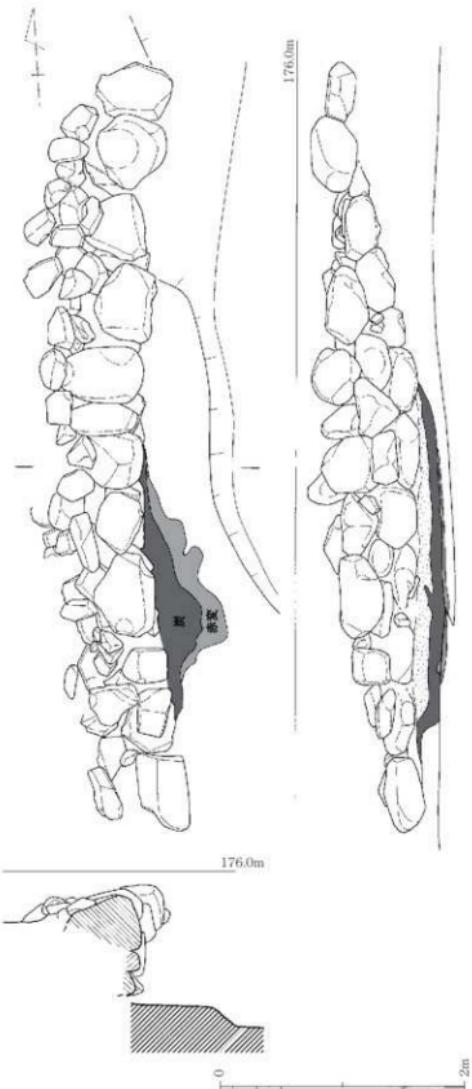
2) 石組・土坑

人為的と思われる石組あるいは土坑をいくつか検出したが、ここで紹介する遺構はいずれも大規模な客土が行われる以前、1・2トレンチにある青灰色土層の下位に相当する層で確認したものである。

石組1（図版16、第25図） 2

トレンチ中程で大規模な客土に「不自然な土層ライン」が見られたが、その垂直に落ちるラインの肩で検出した礎石状の石組である。土層図に根石が図示されている。礎石状の石材は長軸0.5m余、短軸0.4m、厚さ0.2m余の大きさの

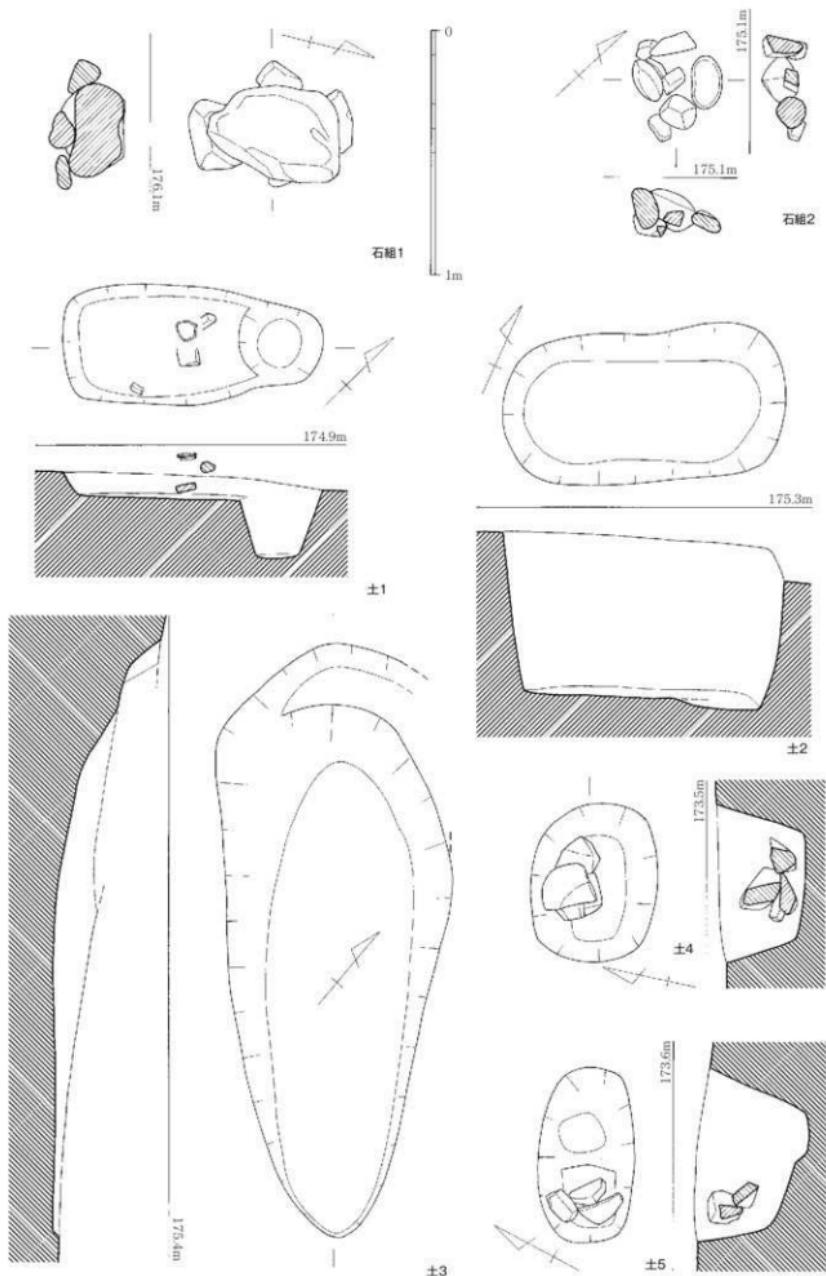
川原石で、上面がほぼ水平に置かれ、5個の小石が根石状に置かれている。対応する石組を確認できなかったことから断定はできないが、礎石である可能性がある。なお、地業は認められなかった。



第23図 北端石垣実測図 (1/40)

第24図 甫羅石斑実測図 (1/40)





第25図 石組・土坑等実測図 (1/20)

石組2 (図版16、第25図) 前庭の1トレンチ内で検出した。拳大の小砾4つを置き、内部に一回り小さな石が入っていた。レベル的には大規模な客土の下層、青灰色土層の下位で、後述する土師器皿群と同じ層の中にある。断ち割ってみたが、掘り込みや特別なものは見受けられなかった。

土坑1 (図版16、第25図) 2トレンチの「不自然な土層ライン」のやや東にあって、トレンチの北辺に近く位置する。長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.1mの長方形の浅い遺構で、北東小口に円形プランとなる深さ0.3mほどの掘り込みがあるが、土層などから同時性を確認したものではない。若干の土器が出土したが、墓と思わせるものではなかった。

出土遺物

土器等 (第26図1・2) 1は底部が丸味をもつ土師器皿で、口縁部の1/4が残存。復元口径8.0cm、器高1.6cmを測り、丁寧に仕上げられる。2は図示部が完周する土師器椀である。低いが断面方形に近いしっかりした高台をもち、高台内には回転糸切り痕が残る。内面は器表剥落が多く、全体に灰黒色～黒色となるが、黒色土器や瓦器のそれとは異なる。

土坑2 (図版17、第25図) 土坑1の北5mほどの位置にある。平面形は小口が丸味をもつ隅丸長方形に近い平面となり、長軸1.2m、短軸0.6m、深さ0.7mのしっかりとした遺構である。

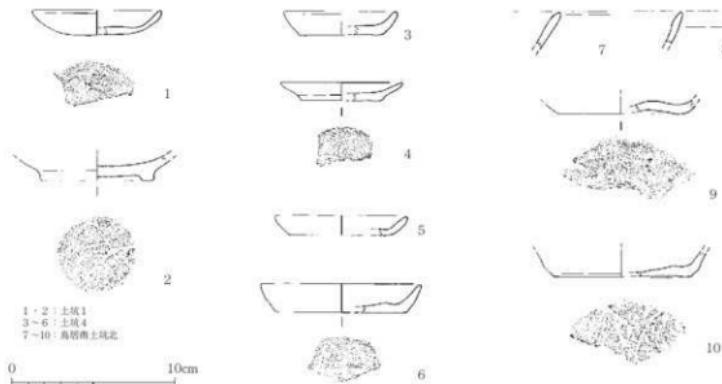
土坑3 (図版17、第25図) 北端石垣の西に近接し、一部を3トレンチで破壊した。北西側小口が幅広となり、長軸2.4m、短軸0.9mの長円形プランをもち、深さは最大で0.3mほどである。

これは埋土に炭小片や青灰色土の小ブロックが混入していた。

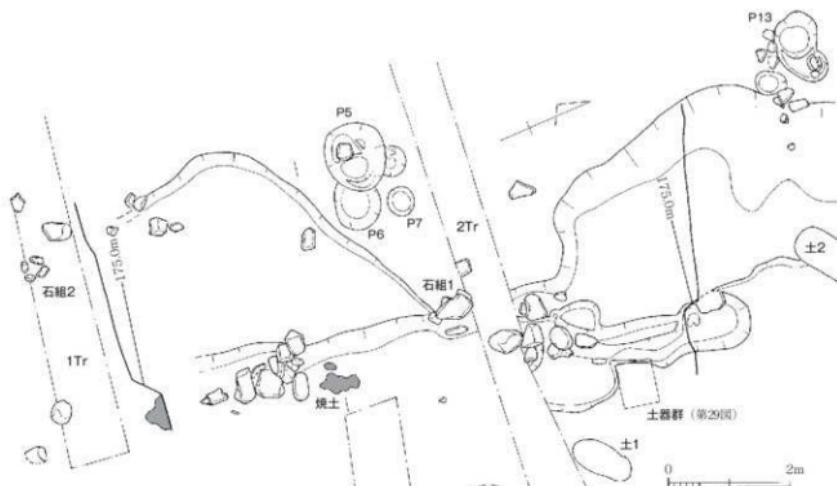
土坑4 (図版17、第25図) 2トレンチ東端付近、東端石垣が破壊された付近に位置する。長軸0.6m、短軸0.5mほどの隅丸長方形に近い平面プランをもち、深さは0.35mを測る。内部は北側長側辺に添うような位置に花崗岩がまとめられていた。

出土遺物

土器等 (第26図3～6) いずれも土師器の小皿である。3は復元口径7.0cm、器高1.5cm。全体に肉厚となり、体部・口縁部はわずかに内擣する。胎土は良好というべきで、器内・器表は黒色系と



第26図 土坑等出土遺物実測図 (1/3)



第27図 1・2トレンチ間主要部実測図 (1/80)

なり、調整は粗い感がある。4は復元口径7.4cm、器高1.1cmを測る。体部は下端を強く押さえて浅く大きく開くため、他の3点とは大いに形状が異なる。5・6は3に近い形状である。5は復元口径8.2cm、器高1.2cm、6は同10.0、1.8cmとなる。ともに胎土は良好といってよく、5は仕上げも丁寧、6は比較して雑となる。

土坑5 (図版17、第25図) 土坑4の北1m強の付近、本來的に東端石垣の下位に位置する。長軸0.7m、短軸0.4mほどの平面隅丸長方形を呈し、深さは0.3mほどであったと思われる。ここでは南東小口に偏して小礫が3個置かれていた。

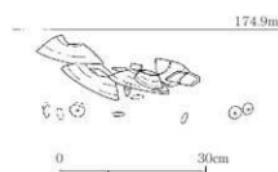
これらの土坑4・5は1mほどの距離を置いて並ぶように位置し、形状も似たようなものとなる。あるいは鳥居のようなものが置かれていたことも考えられる。

3) 土師器・銅錢集中部 (図版18・19、第29図)

土坑1の西に近接して土師器皿・銅錢が集中して出土した。図化時は土師器皿7点、その周辺で銅錢9枚を数えた。土師器はいずれも伏せ置かれ、重ねられていて、明瞭な掘形といったものは確認できなかった。銅錢は土器群の東に散在していて、ほぼ同一のレベルにあるが立った状態のものが多い。また、銅錢の周囲はごく狭い範囲で黒変していて、有機質で包まれていた可能性があるが、肉眼で顕著なものは認められなかつた。



第28図 前庭「嘉祐通寶」出土状態



第29図 土器・銅錢等出土状態実測図 (1/10)

出土遺物

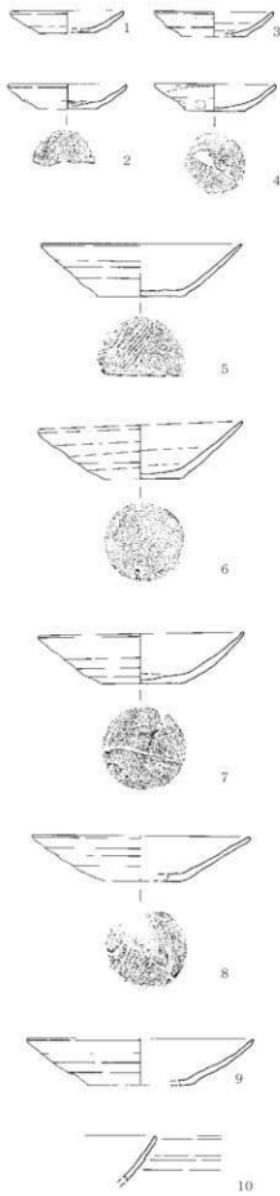
銅錢 遺物が所在不明となっている。調査時には8枚の銅錢と1枚の鉄錢が記録されている。中には取り上げ時に細片化したものもあったが、図化時に判読できた銭貨は「至元通宝」(初鋤元1264年)、「永樂通宝」(初鋤明1411年)2枚などがある。第28図は土器群の西5mほどの高位で検出した嘉祐通寶(初鋤北宋1056年)の出土状態で、取り上げ時に細片化した。寛永通寶以前の銅錢であり関連するものであろう。

卑近な位置にある2トレンチからの出土銭(第13図)も参考になるであろう。

土器等(図版25、第30図)「ラベルなし」の注記がなされている。出土状態の写真と照合して大型土師器は特定できたが、小型土師器はやや曖昧なところがある。ただ、ここから出土した小型土師器は濃く発色していて、かつ遺存状態がよいなど比較的特徴的であったため、それらを選別して図示した。

1~4は胎土精良、丁寧に作られた小型皿で、口径は7.0~7.6cmに復元でき、器高1.4~1.7cmを測る。体部は浅く開き、下端はわずかに内彎、中位以上はほぼ直線的に開き、口端部に面を付してシャープに作り出される。底部は口径のはば1/2の大きさで、その外周はしっかりと屈曲を見せる。4では体部下位に指頭痕が部分的に残り、口縁部に至る粘土紐接合痕のような筋が残る。これらの4点は全体に赤味を帯びて焼き上がる。

5~9は土師器杯と呼ぶべきであろうが、皿との厳密な区別が困難なのでここでは皿としておく。これらは口径12.4~14.0cmに復元でき、器高2.8~3.2cmを測るが、概して口径が小さい個体の器高が高くなっている。5~8では底径が4.7~5.4cmで、9のみ6.5cmに復元されているが、これは残存率が小さいためであろう。その意味では最大口径の9を除外して13.5cmが平均的な口径とすべきであろうか。小型品と同様に、これらも概ね胎土精良、丁寧に作られていて、体部から口縁部にかけて直線的に、大きく開くという点でも共通する。8が特に立ち上がりが浅く図化されているが、これは写真で特定できる個体で、かつ底部の3/4、口縁部の1/2が残存していることから図化に問題はないが、焼け歪みが見られることからそのために極端に復元された可能性がある。小型皿は赤味をもっていたが、大型皿は灰黄色系に焼き上がり、9・10では灰褐色に濃く焼き上がる。



第30図 祭祀土器群実測図(1/3)

4) 鳥居状遺構（図版19～21、第31図）

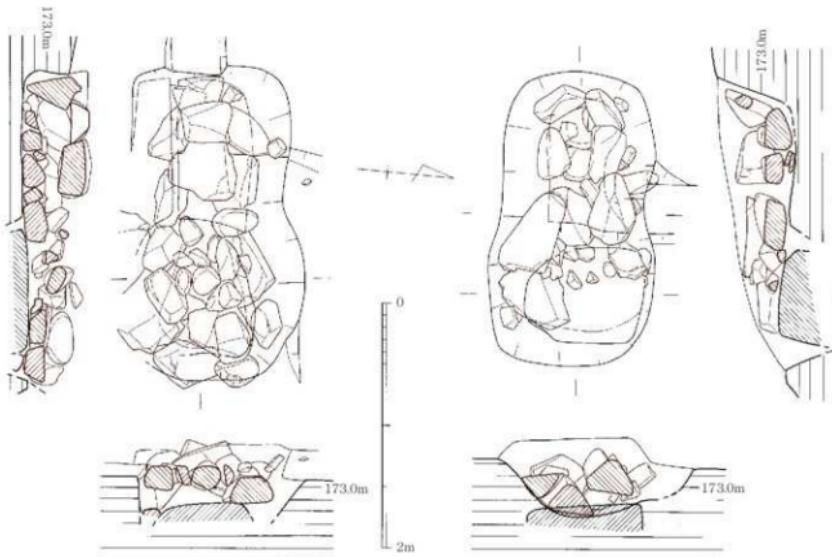
1トレンチの東端付近に位置する。長軸2.6mの長方形に近い東西方向の土坑が、1.5mを隔てて南北に並ぶ。なお、後述する礎石状石材の芯々の距離は3m強となる。南土坑は1トレンチに一部がかかっていて、検出当初は石が詰まった意味不明の落ち込みであった。後に北側でも同様の礎が詰まった落ち込みが現れ、両者ともに東端に縦横1m前後の巨石を、上面をほぼ同一レベルで水平に保って据え置いていることから鳥居の基礎構造であろうと考えるに至った。鳥居の礎石と考えている巨石はいずれも川原石様の自然石で、加工痕はない。

南土坑 残された南狛犬の台座の直ぐ北に位置し、重複はしていない。1トレンチ掘削時に現れたが、遺構内全面に礎が詰まっていた。それらを除去していくと、南端に東西長約1m、南北長約0.8mほどの巨石が上面を水平にした状態で現れた。巨石の部分は南北長1.5mほどと掘形も膨らみ、一段深くなっている。東西長2.5mほどを測る土坑の西半は、検出時は南北長1.3mほどであったが一部が浅くなっていて、上段の石材を外すと床面では南北長0.6mほどとなる。この部分の深さは0.55mであった。

北土坑 コンクリート製の北狛犬台座の下に位置していた。検出時に南土坑同様に礎が現れたが、ここでは当初から東端の巨石が現れていた。掘形は東西長2.4m、南北長1.2～1.3mで、中央付近がわずかにくびれて巨石が据えられた東半が幅広かつ深くなる。巨石は軸長0.7～1mほどの長方形に近い自然石である。

出土遺物

土器等（第26図7～10） 上記南土坑の北辺に接して出土したもので、厳密には土坑に伴うものとは断定できないが、関連する可能性があるとしてここで紹介する。

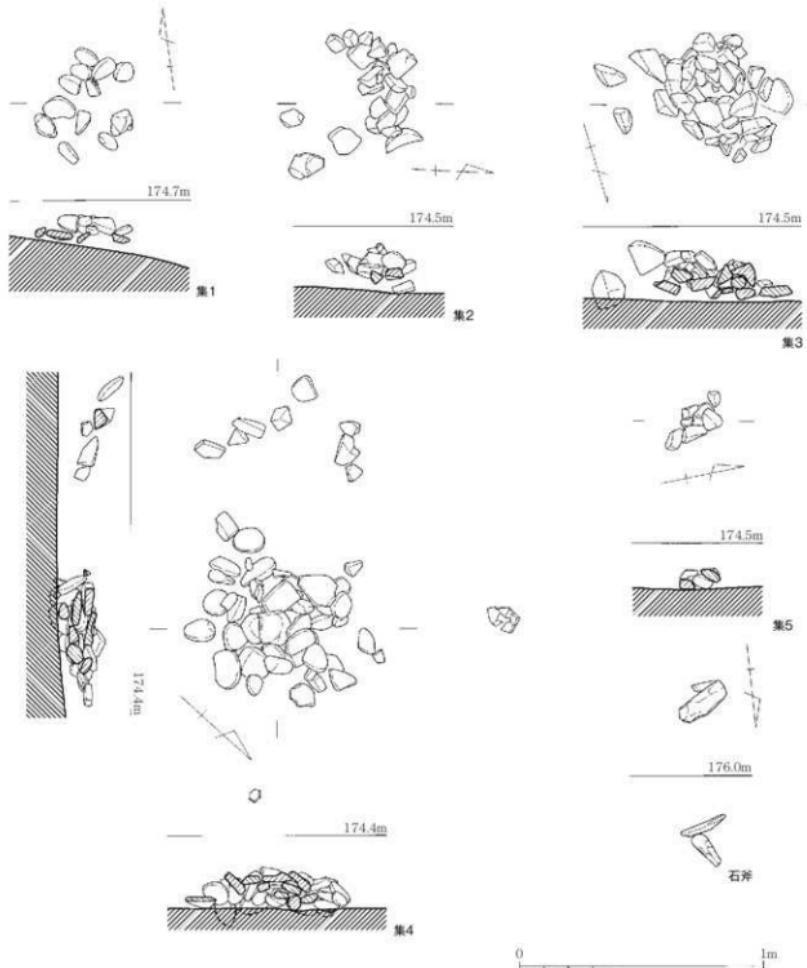


第31図 鳥居状遺構実測図（1/40）

いずれも土師器皿片。7は赤味をもって焼き上がる口縁部片で、胎土は良好といってよいが緻密さを欠く。8は外面に水挽き痕が残る。9は形状が歪む底部片で、これは赤味をもたない。10は体部が急角度で立ち上がる残片で、胎土良好だが仕上げは雑な感がある。

5) 集石遺構

中には危ういものも存するかも知れないが、前庭下層の1トレンチの南北で5基の集石遺構を確



第32図 集石及び石斧出土状態実測図 (1/20)

認した。これらの集石はアカホヤの小ブロックを包含する層の下位、黒色系の土層の上にある。調査区南西部のようにアカホヤ単純層が厚く堆積している部分には集石遺構はなく、また図版24-1で見るようアカホヤの下位に黒色系の土層は見えない。しかし、図版24-2に示した石垣1に沿う南北方向の土層写真では、薄いアカホヤの単純層が広がっていて、それ以上は黄褐色系の堆積層、その下位に明るい色の堆積層を挟んで黒色系の土層が見える。従って、集石がのる黒色系の土層は「アカホヤ以前」と見てよいであろう。

集石1 (図版21、第32図) 1トレンチの南5mほどの位置にある。1トレンチの南はアカホヤの単純層が比較的広がっていて、それらを除去してこの集石を確認した。ただ、この集石の直上をアカホヤ層が覆っていたと確認したものではない。

集石は緩斜面に位置していて、0.4~0.5mの範囲に風化安山岩を主とする計10cm内外の小礫が集中していた。礫の間には炭小片がわずかに残り、焼けたように見える礫もあった。

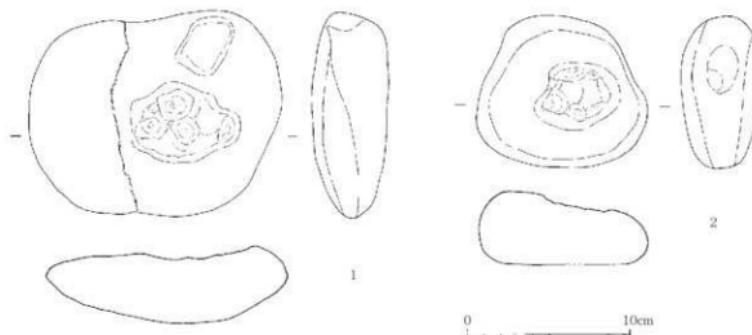
集石2 (図版22、第32図) 集石1の東、1トレンチの南に接するような位置で検出した。北側は直径0.5mほどの円形を描いているが、南半はほぼ失われたようである。川原石や角の取れた花崗岩を使用していて、離れて位置する礫の二つが赤変する。

集石3 (図版22、第32図) 1・2トレンチ間東側にサブトレンチを設定したが、その直ぐ南で検出した。0.5~0.7mの規模で集積されていて、大部分が花崗岩の小礫である。また、焼けて赤変した礫が多いものの、焼けた面は無秩序な方向を向いている。

集石4 (図版22、第32図) 先のサブトレンチ・2トレンチ間に位置する。遺構に近接して残していた柱状土層に比較的単純・連続的なアカホヤ層が見えていて、この状況はアカホヤ層が明らかに集石遺構の上位に位置する。

集石の厚みという点では最も良好に残るといつてよいであろう。川原石を多く使い、0.8mほどの範囲に集積するが、中央付近では厚く、周辺では散乱するといった状況となる。多くの石が赤変あるいは焼けて黒変し、図中央付近の石材は焼けて割れたようである。

出土遺物



第33図 集石4出土石製品実測図(1/3)

石製品（図版27、第33図） 1は扁平な川原石で、最大長15.5cm、厚さ4.0cmを測る。図示した面に敲打で剥離したような部分がある。また、わずかに赤變あるいは黒変した部分がある。二つに割れているのも含めて火熱のせいであろう。2はやはり図示した面に変形の凹みがあるほか、端部小口に敲打痕もわずかに見られる。背面は平坦な面となる。これもわずかに黒変するようである。最大長9.1cm、厚さ4.5cmである。

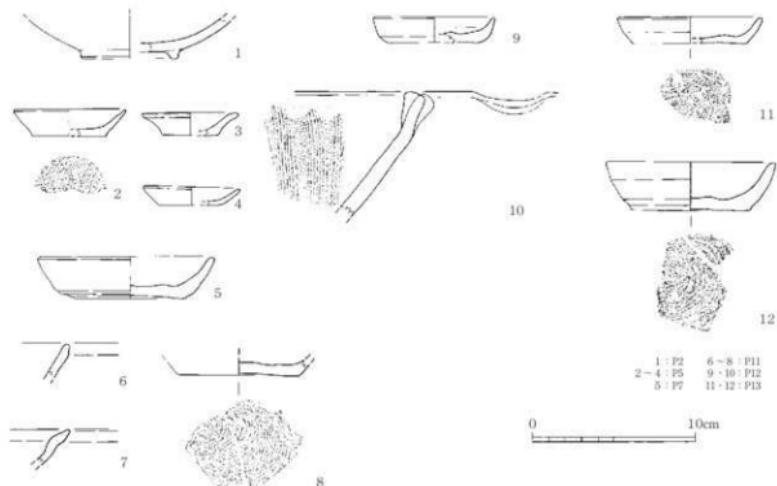
集石5（図版23、第32図） サブトレンチ西端の南付近で検出した。7個の小礫が集中したものであるが、赤變あるいは煤けたような石材がなく、他と同一視してよいか若干疑問がある。とはいって、サブトレンチの土層（図版21-3）、また1トレンチ下位の土層（図版5-1）中にはまったく礫を含む層がないことから、人為的な行為の結果であることは間違いない。これもアカホヤプロックを含む層の下位に位置する。

6) 柱穴出土遺物

P2（第34図1） 拝殿南、4トレンチの中程北側に接するような位置にある。直径0.4~0.5m、深さ0.4m弱の柱穴である。

1は器表が灰白色、器肉が青灰色に近く発色する瓦器椀で、1/4が残存。高台はしっかりとした断面方形を呈するが、器表が荒れて調整痕は見えない。

P5（第34図2~4） 2トレンチ中程の南側近くに位置する。直径1.0~1.1m、深さは最大で1.0mほどを測るが、3つのテラスがあるために底径は、0.35~0.45mほどの規模となる。床面上0.2mのテラスにはほぼ水平に置かれた0.25~0.3mの川原石が伴う。あるいは発掘ミスで、本来はこの川



第34図 柱穴出土遺物実測図 (1/3)

原石が根石として使用されたことも考えられる。祭祀土器群や焼土の西側で南北方向に並んでいた可能性がある疊群の西側2mほどに位置し、掘形の規模から見ても重要な意味をもっているのかも知れない（第27図）。

それぞれ復元口径・器高は7.0・1.7、6.0・1.5、6.0・1.2cmを測り、形態が異なる土師器小皿で、いずれも胎土造作とともに良好である。2は体部が直線的に高く立ち上がる。3は外彎して立ち上がり、口端部まで肉厚となる珍しい形態である。4も立ち上がりの角度は先の2点に近いが、高さが低く終わるもの。2・3は赤味帯びて焼き上がり、4は器肉も含めて全体が暗灰色となるが、黒色化を意図したものではないようである。

P 7（第34図5） P 5の北東に近接する直径0.45～0.5m、深さ0.5mの柱穴である。

土器は復元口径10.9cm、器高2.6cmを測り、全体に肉厚、鈍重な感の土師器皿である。底部は糸切り、体部下位の撫で痕は所謂水挽き痕とは明らかに異なっている。底部の3/4が残存。

P 11（第34図6～8） 前庭北側、東端石垣北側の背面掘形に近くに位置する。直径0.6mを測るが、深さは記録を失念している。

いずれも土師器である。6は口端部を摘み上げるようにして外面に弱い棱を作り出す。胎土は普通、赤く焼き上がる。7は口縁部が浅く外折するもので、胎土・色相は6に似る。8は胎土良好な底部片で、これも赤味が強い。

P 12（第34図9・10） P 11の西側に土坑2があるが、その中に掘り込まれたと見なした柱穴である。直径0.2mほどの大きさで、深さは記録していない。土坑2と同一遺構である可能性も考えられる。

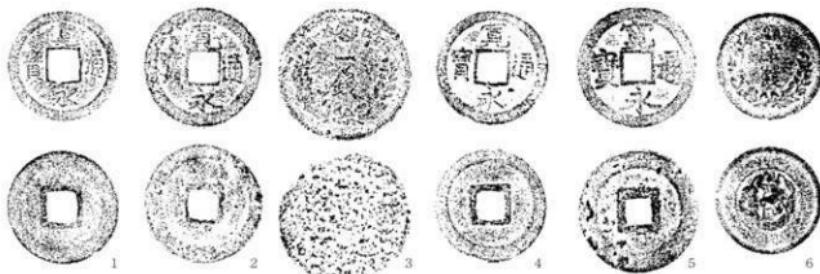
9は厚みのある底部から体部が丸く短く立ち上がる土師器皿で、復元口径7.5cm、器高1.6cmであるが法量には不安がある。10は胎土良好の瓦質摺鉢で、器肉芯が黒色、内外の器表近くが灰黄色、器表は暗褐色となる。口縁部はわずかに肥厚させて、スリ目上端付近で内側へ小さく屈曲させ、さらに口端部付近は内側へ小さく摘む。体部外面は横方向の丁寧な箝削りで仕上げる。

P 13（第34図11・12） 土坑2の西側に2基の小柱穴とともに位置する大型の柱穴である。直径0.7～0.8m、深さは0.8mほどを測る。位置的にはP 5とした柱穴と約8mを隔てるが、祭祀土器群や焼土と関連する石列を想定した場合には二つの柱穴はそれにはほぼ平行する位置関係となる。P 13の床面レベルが174.75mであるのに対して、P 5の掘り過ぎた可能性のある床面レベルが174.65m、根石の可能性のある川原石の上面が174.84mと離れた位置にある2基の柱穴だが規模や床レベルの共通性を無視できないように思われる。

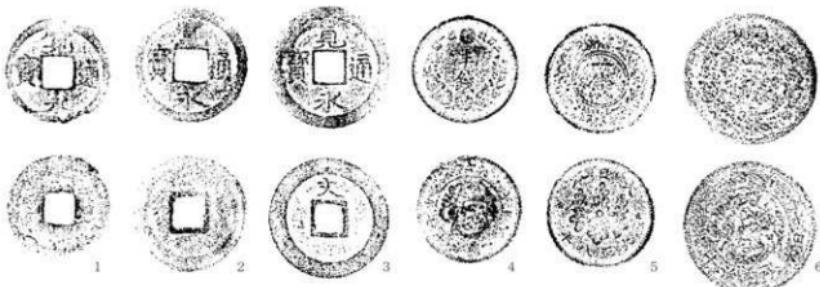
11は復元口径9.0cm、器高1.6cmを測る土師器皿で、胎土に微砂粒を交えるが緻密さを欠く。12は復元口径10.4cm、器高3.0cmを測る。体部から口縁部にかけて内彎しつつ急角度で立ち上がる。全体に肉厚となり、調整は難というべきであろう。

7) 包含層等出土遺物

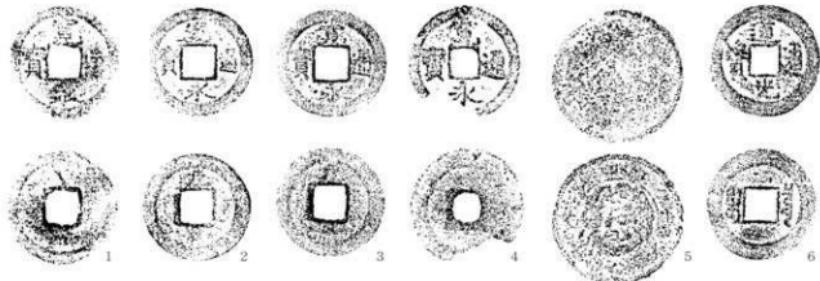
遺構に伴わない遺物が多くある。幾度か記したように拝殿が位置していた区画の南東部は本来緩斜面で、平坦化するために客土がなされていた。また、前庭では厚い客土がなされていて、その下



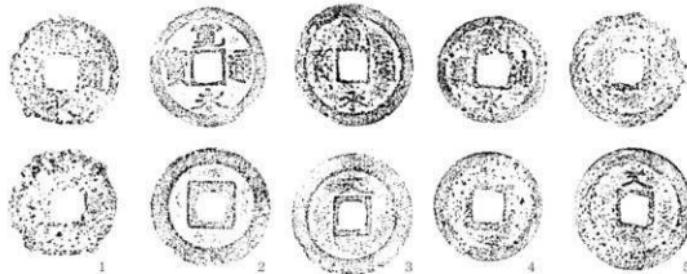
第35図 本殿・拝殿跡出土錢貨拓影 (1/1)



第36図 幣殿・拝殿跡出土錢貨拓影 (1/1)



第37図 前庭出土錢貨拓影 (1/1)



第38図 前庭南半出土錢貨拓影 (1/1)

位でいくつかの土坑・柱穴などを検出したが、それらの遺構を検出する際に少しづつ地下げし、その際に出土した遺物がある。また、プライマリーな状況ではないが縄文土器も一定程度の出土を見た。これら、遺構に伴わない遺物をここでまとめて紹介する。

銅錢・鉄錢（図版25、第35～39図） 本殿・幣殿・拝殿及び前庭のほぼ表土から出土した錢貨をまとめて紹介する。第35図1～3は「本殿」、4～6は「本殿・拝殿」出土。直径2.2cmの1は「寛」の上半が、同2.4cmの2は「寶」のうかんむりを除く部分が鋳造時の失敗で潰れている。3は一錢硬貨で、主文様は龍であろう。4は直径2.3cm、5は同2.4cmの寛永通宝。6は「明治十年」と陽刻された半錢硬貨で、主文様は龍。図示していないが、図版25に示した半次の鉄錢が「拝殿」からの出土である。これもX線透過で文字は見えない。

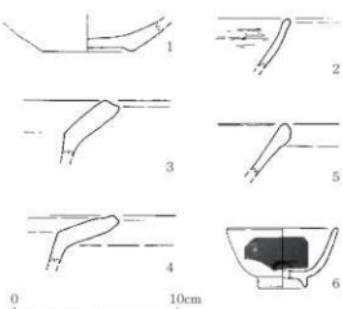
第36図は「幣殿・拝殿」出土。1～3は寛永通寶。1は直径2.2cmで非常に薄い。2は同2.3cm、3は同2.4cmで、これは「寛」のうかんむりが潰れている。4は龍文をもつ「明治十七年」の半錢硬貨、5は桐を主文とする「大正八年」の一錢硬貨、6は龍文となる一錢硬貨で「明治十八年」とある。

第37図は「前庭表土」出土。1～4は寛永通寶。1～3はいずれも直径2.2cmとなるもので、2・3は背面上部に「元」と鋳出され、2では「水」の表裏に亀裂が入る。1の背面上部にも斜位のしつかりとした線があるが、これは范傷か。1はほかの2点に比べて文字がわずかに大きい。4は直径2.3cmで、表面はしっかりと鋳出されているが、背面の輪・郭は甘い。5は「明治十八年」の一錢硬貨。6は道光通寶（初鑄清1821年）で、背面の方郭の右上に小さな珠点が一つと満州文字が陽刻されている。なお、「寶」のうかんむりから方郭の左下にかけて亀裂があるようで范傷であろう。直径2.3cmの大きさである。

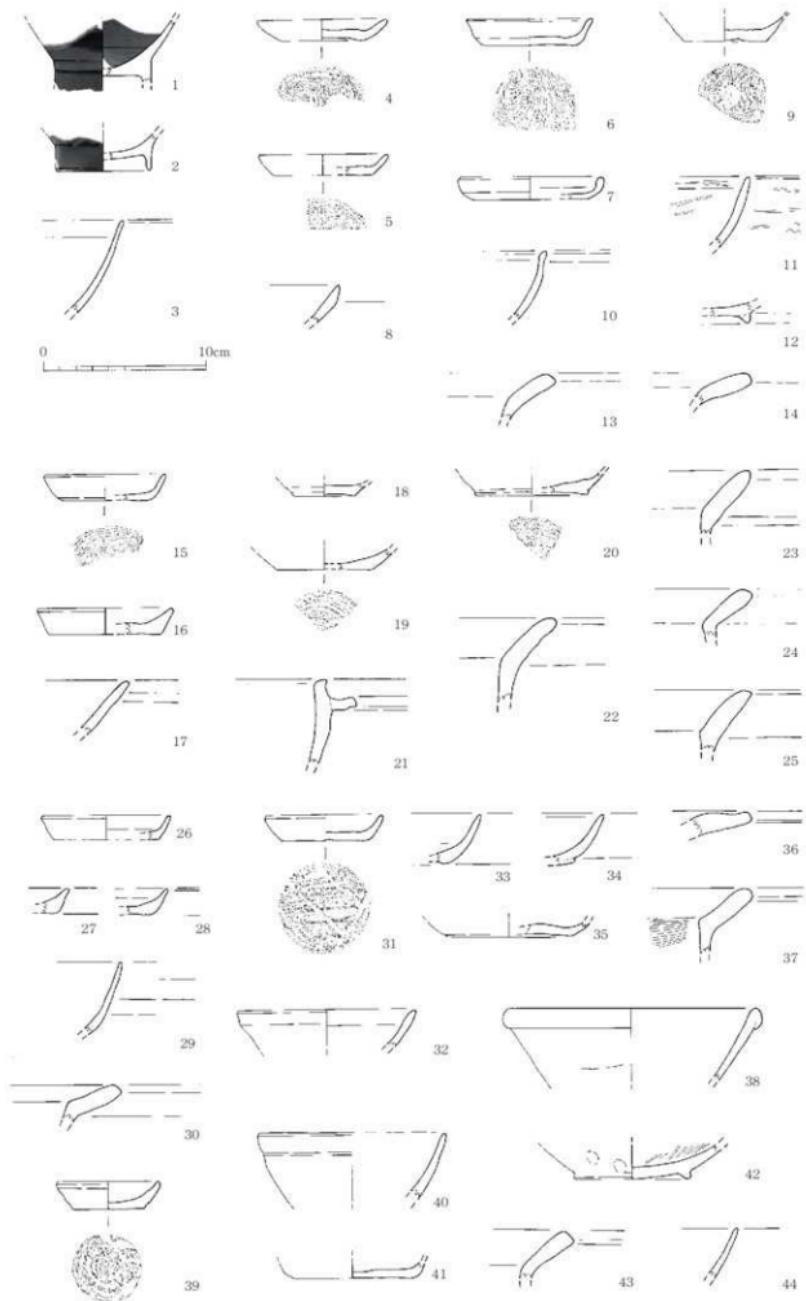
第38図1・2は「前庭南半」、3～5は「前庭南端」出土である。1は外周（輪）の大部分を失つて小さくなっているが、2・3とともに直径2.4cmほどの大きさである。3は背面上方に「文」とある。4は直径2.2cmで、「寶」のうかんむり直上に径1mm前後の不整円形の孔がある。鋳造時のものであろう。5は文字面が銹着した2枚の銅錢で、1枚は径2.3cmで背面無文、1枚は径2.5cmで背面に「文」とある。

拝殿跡南出土遺物（第39図） 拝殿跡の南東部、4トレンチ周辺の客土からの出土遺物。

1は高台付土器器底の1/2の残片。器表が荒れて剥離が進むせいか、高台も非常に小振りとなっていて本来の形状ははっきりしない。2は瓦器の口縁部小片で、胎土は良好。口縁部外面から内面にかけて黒色化。外面の下位は淡灰色となる。器表は荒れている。3・4は土器器鍋口縁部片。3は口端部に大きな面を作る。胎土に砂粒が目立ち、外面は黒色、口縁部内面は黒褐色、体部内面が灰褐色となる。4は口縁部がやや長く、端部内面が匙面状となる。口縁部外面下位に工具の当たりが残り、体部外面は雑な作りの感があるが、内面は丁寧に調整されている。これは胎土良好。5は白磁玉縁の小片。玉縁は小さく退化している。6は染付の小椀で、底部の1/2が残存する。灰味帯びる透明釉を施すが、



第39図 拝殿跡南出土遺物実測図（1/3）



第40図 前庭南半出土遺物実測図 (1/3)

光沢が新しそうな印象を与える。見込に灰緑色に発色する施文がある。

前庭南半出土遺物（第40図）前庭南半部では南端石垣以外はこれといった遺構を確認できず、出土遺物はほぼ客土あるいは包含層からのものであった。出土地点あるいは層位を特定できなくなつたものも存するが、注記に従つて説明を加える。

1・2は「客土」出土の染付。「客土」は5・6トレンチのそれぞれ上位3層で、明らかに人為的になされた盛土である。2点ともに所謂廣東椀で、1780年代～19世紀前半まで流行したという。

3は南端の間知ブロック北側「疊群上」出土の施釉陶器椀。肉薄の胎土は灰色の精良緻密なもので、口端部が茶褐色、その他は淡灰色となる。口縁部下内面にごく弱い沈線が巡り。内面に一部釉が及ばない部分があって、口端部と同じ発色をしている。施釉が薄くて口端部での有無がよく見えないが、発色からすると口端部は露胎であるかも知れない。とても精緻な椀である。

4～14は「包含層」出土であるが、4・5・7・13・14は特に「南端付近」と注記がある。4～9は土師器皿で、いずれも胎土・作りとも良好といつてよい。4・5は口径8.0cm、器高1.2cmに復元できる。5は口縁部付近が赤変する。6は復元口径7.8cmで先の2点に近いが、器高は1.8cmで随分異なる。これは器表の遺存状態もよい。7は口径9.0cmに復元しているが、小片のため不安がある。口縁部がほぼ直立して肉厚となる。8は口縁部下外面にしっかりした稜が入る小片で、断面が三角形となる。9の底部片は他の皿と異なって、底部外周にしっかりとした稜をもち、体部との境が明瞭となる。また、内底面に所謂水挽き痕が見える。

10～12は瓦器椀。10は緩く外彎する口縁部小片で、大粒の石英粒が見えるが胎土精良といつてよい。器表は色落ちして淡灰色となる部分が多いが、一部暗灰色を留める。11も小片。これは口縁部に変化を加えないが、内面に沈線を刻むようである。胎土は灰白色精良なもので、器表は黒色、内外面に範磨き痕が見えるが、疎らなようである。12は高台が付く底部小片で、これは胎土に微砂粒が多く見える。器表は灰黒色となる。

13・14は同巧の鍋口縁部小片。胎土良好で、13は器表が荒れている。

15～25は南半「包含層上層」とあり、「客土」も含むものである。いずれも土師器で、概ね胎土良好である。15は復元口径7.6cm、器高1.6cmで全体に器壁が薄い。16は復元口径8.4cm、器高1.6cmであるがこれは底部が非常に内厚となっていて、内外面に煤が付着しているようである。17は椀形といふか、この時期であれば杯（皿）形と呼ぶべき口縁部小片。外面に水挽き痕が目立つ。18～20は皿の底部片で、19は鮮やかな赤色、20は灰黄褐色に発色する。21は羽釜で、口端部に内傾する面を付け、そのわずか下外面に突出する鈎を付す。これも胎土良好で、全体に灰黄褐色となるが鈎上面から下位には煤が付着する。22～25は微妙な形態差があるが、口縁部がく字形に外反する鍋。いずれも外面が赤・黒変、あるいは剥離して荒れている。これらも胎土良好である。

26～30はいずれも土師器で、「（黄）褐色土」の注記があるが、4・6トレンチにはその土層名がない。後述する「灰黒色土」が所謂地山直上の堆積層であることから、「客土」と「灰黒色土」の間の堆積層であろう。局部的に堆積した特殊なものではない。26は復元口径8.0cm、器高1.5cmの皿で、丁寧に作られる。27・28は肉厚の底部をもつ小片で、27は特に顯著である。これらも胎土良好、丁寧な造作である。29は土師器椀の小片で、胎土・造作ともにとても良好。内面は荒れているが器表の剥けが目立ち、外面では水挽き痕の凹部に褐色の付着物が多く見られる。化粧掛けの痕跡であろうか。30は端部に面を作る鍋口縁部小片で、外面が煤ける。

31～38は「灰黒色土上」の注記があるが、次に述べる「灰黒色土」との厳密な差異はないと考えている。38が白磁、ほかは土師器である。31は復元口径7.3cm、器高1.6cmで、胎土良好、丁寧に作

られる。外底面には間隔の細かい回転糸切痕とスダレ状の圧痕が残る。赤味帯びる灰褐色となる。32は口縁部直下に弱い稜をもつ皿で、胎土は粗い感がある。赤味強く発色している。33・34はよく似ていてあるいは同一個体か。器表が荒れているが、胎土良好で黄味強い灰褐色となる。34は底部外縁に粘土の溜まりが残る。35も器表が荒れていて、これは赤味強く発色する。36・37は土師器鍋口縁部小片。両者とも外面が黒変する。

38は白磁玉縁椀小片で、玉縁はやや小型化している。釉は灰味強く発色する。

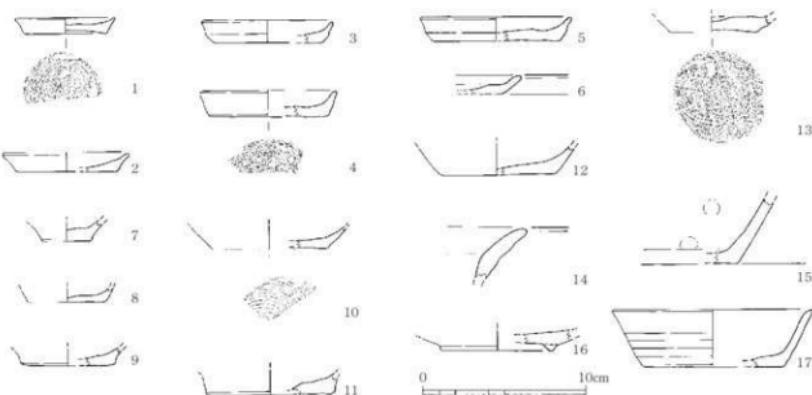
39~44は最下層の「灰黒色土」からの出土。42は瓦器椀、44が白磁（染付）であるほかは土師器である。39はほぼ完存する小皿で、口径6.4cm、器高1.7cmで底部と体部の境はしっかりと稜をもつ。胎土・作りともに良好。40は器表が荒れた小片からの復元で、口径に不安がある椀。胎土精良で、黄白色に発色、器表が荒れる。外面口縁部下に沈線が見られるが、意図的なものか判断しかねる。41は赤味をもつ底部片で、胎土・内面調整は良好であるが、外底面の回転糸切痕には雑な感がある。

42の瓦器椀には「ブロック積み北端灰黒色混炭層」とあって、南端石垣の南堆積層から出土したものである。完周する底部で、灰白色の胎土は非常に精良。対応する内外面は灰黄色で部分的に褐色化する。火熱を受けて吸着していた炭素が飛んだものであろうか。内面は放射状の箇磨きがほぼ全体に施されるようで、外面には部分的に指頭痕が残る。貼付高台の内部は切り離しの痕跡が丁寧に消されている。43は胎土良好の鍋で、外面が煤ける。

44は白磁椀小片。青味をもつ釉が掛かるが、近世の染付であろう。混入と思われる。

前庭北半遺構検出時出土遺物（第41図） 1 トレンチ北の前庭部で厚い客土を除去した後に遺構検出を試み、その際に出土した遺物である。1~13は「砂層下遺構検出」・「盛砂除去後検出」、14は「北端石垣東（西の誤記か）遺構検出」、15・16は「2トレ付近灰黄褐色砂質土」の注記がある。

1~5は全体が窺える土師器小皿で、1・2は立ち上がりから口縁部まで連続して外縁する。1は口径6.2cm、器高1.0cmを測る1/2の残片。胎土・作りともに良好である。2は1/3の残片で、復元口径は7.8cmを測るが、焼け歪みがあり法量は厳密なものではない。器高は1.2cm。3・5は体部中位付近で屈曲するもので、両者とも胎土・作りが良好。口径は8.1・9.2cm、器高は1.4・1.5cmである。3は内面が黒色化する。5は立ち上がりが急角度となるので、口端部が本来のものか、欠失して



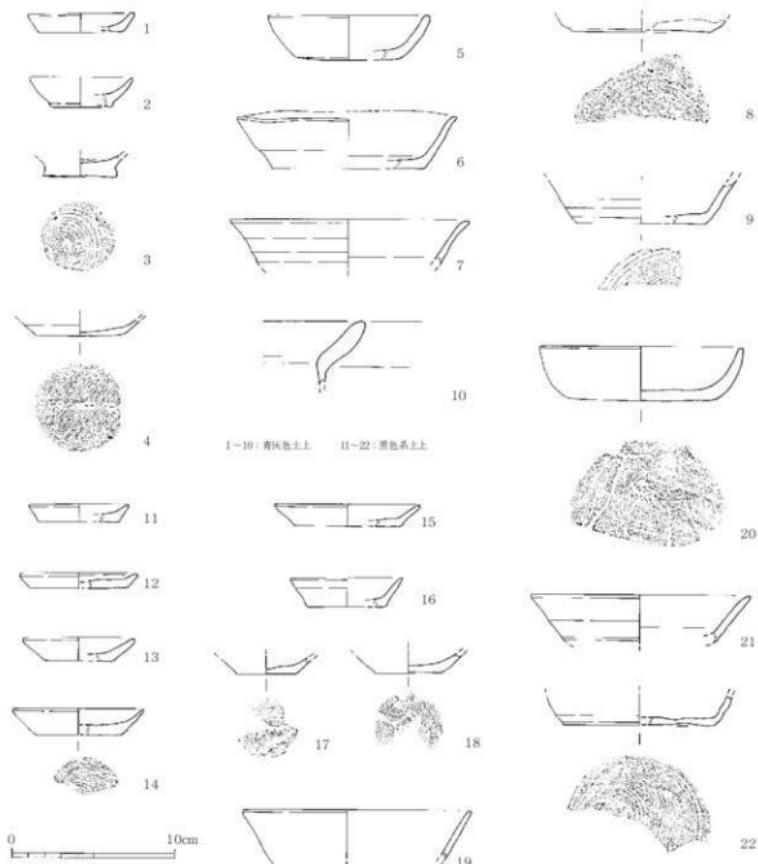
第41図 前庭北半遺構検出時出土遺物実測図(1/3)

いるか定かでない。これは器表が荒れている。6は立ち上がりの器壁厚さが変わらない小片。

7は厚みがある小型の底部片で、8・9ともに胎土良好で赤味をもって焼き上がる。10も丁寧に作られた残片。11は大粒の石英粒が見え、灰黄色となる。12は胎土が粗く、13は作りが雑に見える。14は口縁部が内面に稜をもってく字形に外反する鍋の小片で、胎土良好で丁寧に作られている。外面は煤けて黒変、内面は赤味を帯びる灰褐色となる。

15は瓦質の鉢底部片で、器肉は淡灰色、内面が灰黒色、外面が暗灰色となる。内面に指頭痕が目立ち、外面では器表の弾けが多い。

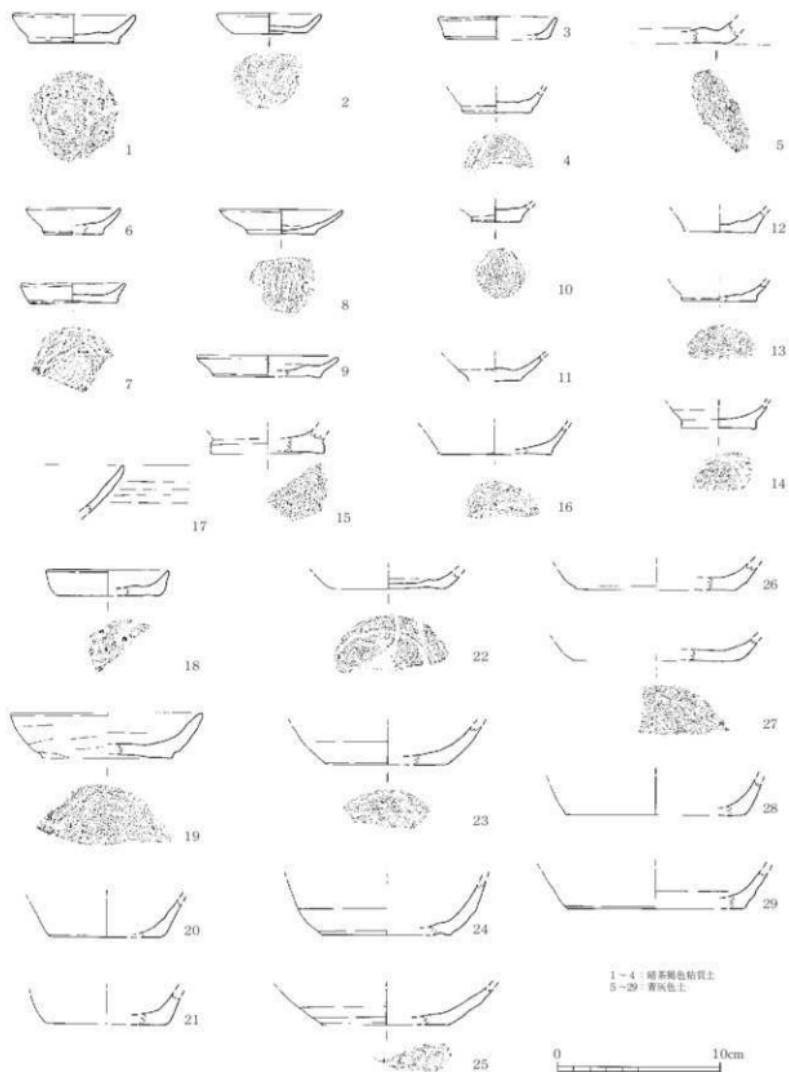
16は低い高台が付く土師器碗の底部。内面に箝磨きを確認できないが、手触りがよいことからその可能性がある。器表は全体に黄白色となるが、器肉が灰黒色で焼成不良。17は体部が高く立ち上がり、口縁部がわずかに外彎する土師器皿で、口径12.4cm、器高3.5cmに復元できる。胎土良好で丁



第42図 前庭北1区出土遺物実測図(1/3)

寧に作られた感があるが、わずかに焼け歪む。体部外面に所謂水挽き痕が顯著である。

前庭北1区出土遺物（第42図） 1・2トレンチの間を北1区とした。1・2トレンチ土層の説明の中で、鍵層として「青灰色土層」に触れたが、ここで紹介する遺物のうち1～8・10には「青



第43図 前庭北2区出土遺物実測図1 (1/3)

灰色土層上」、9には「青灰色土」の注記があるが、両者とも「青灰色土」と読み替えてよいものと考えている。

1~10は土師器。皿はいずれも胎土・作りともに良好といってよい。1は復元口径6.6cm、器高1.2cmに復元でき、器表が荒れている。2は同6.4cmではほぼ同大であるが、器高は2.0cmと大きく異なる。底部が特に肉厚で体部も内側して立ち上がり、形状が随分異なっている。3も肉厚の底部だが、これは底部側面が強くくびれていて、やはり形状が異なる、内底面には水挽き痕が残る。4は底部が内薄、体部が大きく浅く開くものであろう。器表が荒れるが外底面に回転糸切り痕とスダレ状圧痕が残り、黄白色となる。5は小片からの復元のため口径に不安がある。器内は全体に均一で厚くなる。6は底部を多く欠くが、体部・口縁部はほとんどが残存する。歪みがあって復元口径13.4~13.8cm、器高は3.0~3.6cmを測る。所謂水挽き痕は見えず、内面下半が黒変、一部は口縁部まで及ぶ。外面も隨所で黒変するが、一部の器表が特に荒れているということはない。7は体部から口縁部にかけて緩く外側して広がる1/3の残片で、外面に水挽き痕が顕著である。8は内面が全て剥離する残片で、赤味をもって焼き上がる。9も赤味をもって焼き上がり、体部の形状は7と同様である。10は鍋の小片で、外面は黒色化、内面は赤変したものか、荒れている。

11~19は「黒色系土層上」の注記がある。「黒色系土層」上に集石遺構があり、「青灰色土層」と「黒色系土層」の間から出土したものである。先に紹介した「祭祀土器群・銅錢」も層位的にはここに位置する。20~22は2トレンチ東端近くの南側の「黒色系土層上」から出土したものである。ここに示した土師器もいずれもほとんどが胎土・作りともに良好といってよい。11~14の小皿は復元口径・器高がそれぞれ6.1・1.2、7.3・1.0、7.0・1.4、8.1・1.6cmを測る。15は同9.0・1.3cmであるが、小片のために復元値に不安がある。13・15は底部厚が体部と同様であるが、他の3点は厚くなっている。16は他に比べて立ち上がりが高くなるもので、復元口径7.0cm、器高は1.8cmである。赤味をもって焼き上がる。17・18は底部片。19は椀の小片で、肉薄、灰黄色となる。

20は底部から体部にかけて丸く移行する皿で、復元口径12.6cm、器高3.4cmを測る。胎土は普通、作りは粗雑な感がある。21は胎土・作りともに良好で、外面に水挽き痕が残る。22も同様の器形が推測され、これは赤味をもつ。

前庭北2区出土遺物 2・3トレンチ間を称した。1~5は「暗茶褐色粘質土」の注記がある。これは2トレンチ中程の並べ置かれた可能性がある砾の背面（西側）の「不自然な土層ライン」をなす西側の土層である。5~29のうち、18が「アカホヤ上層」とあるほかは「青灰色土」出土である。

銅錢 付着物があつて文字の判読が困難で、X線写真で辛うじて「祥」のような文字、孔の右にたけかんむり、左に「寶」が見える。孔下は読めないが「元」ではない複雑な文字であり、「祥符通寶」（初鑄北宋1009）であろう。出土位置は祭祀土器群周辺。

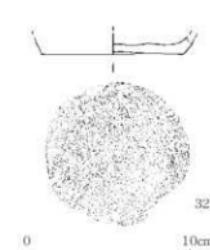
土器（第43・44図） 1~5は土師器。1~3の復元口径・器高はそれぞれ7.6・1.8、6.6・1.7、7.4・1.4cmである。2・3は胎土・作りともに良好であるが、1は底部の形状も2・3と異なり、胎土粗く、



30



31



32

第44図 前庭北2区出土
遺物実測図2
(1/3)

作りも雑な感がある。4は小振り厚底となる底部、5は器表が荒れる底部片。

6～16は体部下位を強く押さえて、底部・体部界が明瞭となるものを示した。これらも概ね胎土良好、丁寧な造作である。6は底部が肉厚で、非常に丁寧に作られている。復元口径6.0cm、器高1.6cm。7はやはり底部が肉厚、立ち上がりが短い。復元口径6.6cm、器高1.2cm。8は底部が薄く、体部が浅く大きく開く皿で、復元口径7.6cm、器高1.5cmである。9は底径が大きく、立ち上がりが浅く短い。復元口径8.8cm、器高1.3cm。これは器表が荒れる。10～16は底部で、底部の厚さはまちまちとなる。

17はこれまでに見た小皿に比べて大型となる口縁部小片。外面に水挽き痕が顯著であることから杯形の可能性がある。赤味強く焼き上がる。

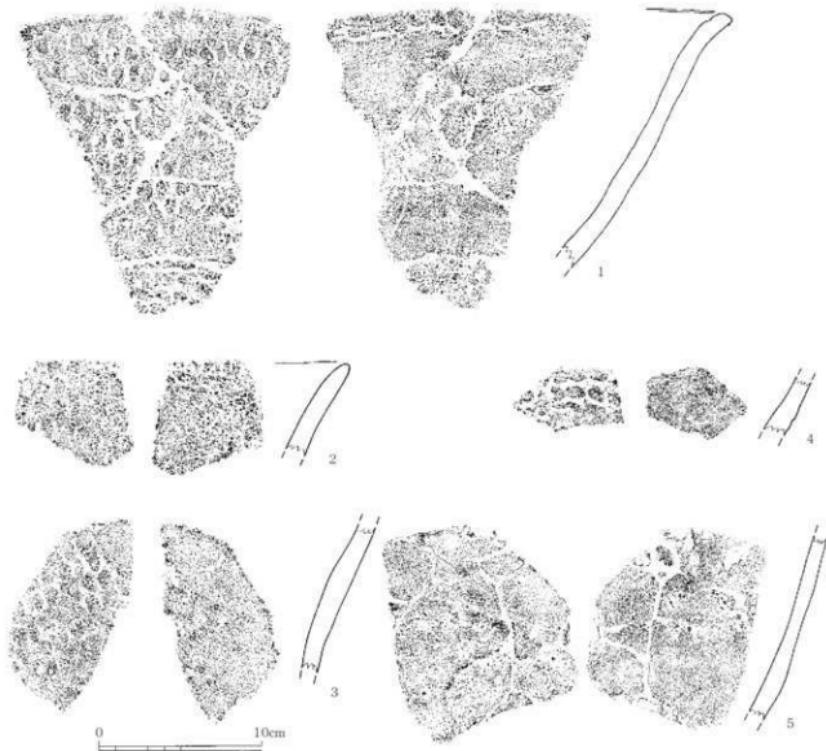
18～32は体部下端が強く押さえられず、底部から体部へかけて丸く移行するものを示した。18は復元口径7.8cm、器高1.6cmを測り、厚い底部から急角度で立ち上がって短く終わる。胎土は普通、仕上げは雑な感がある。19は復元口径11.8cm、器高2.8cmとなる皿で、18に比して立ち上がりの角度が緩くなるが、肉厚の底部から口端部までの形状には共通する点がある。これは混入する砂粒は微少なものであるが胎土に緻密さを欠き、調整も雑な感がある。灰黄褐色に焼き上がる。以下に示した底部片は、体部界が丸味をもつことから復元底径に不安があるものである。1～16に比して概して器表が荒れている傾向がある。

8) 縄文時代の土器

大きな楕円文を刻む早期押型文土器、複数の不整な突帯を巡らせる前期轟B式土器、沈線文だけで施文される後期鐘崎式土器、そして刻目突帯文をもつ晚期土器1点が出土していて、量的には轟式・鐘崎式土器が多い。プライマリーな状態のものではなく、層位的にまとまっていたということもない。轟式土器はアカホヤ火山灰が疎になる部分での出土が多く、取り上げ時に火山灰の「上・下」と記したもの、確たるものではない。火山灰が厚く単純に堆積していた南端付近では、火山灰の上下から1点の出土も見なかった。

図示した以外にも体部片はなお数十点出土しているが、時期的な特徴を認めることができないので割愛している。

早期の土器（図版25、第45図） 1は緩く外反する口縁部片で、外面上半に縦長の楕円文を8～9段連続して刻み、2～3cmの空白を置いて下位に横長の楕円文2～3段を刻むが、器表の荒れが進行して詳細はよくわからない。また、口縁部内面にも横長の楕円文2段が見える。楕円文は長さ1.2cm、幅0.8cmほどの大振りのものである。外面は上段楕円文の下端付近以上が暗褐色となり、以下は灰黄褐色、外面の暗褐色に対応するような位置で、内面では上方が黄褐色、下方が焦げ付きのせいか灰黒色に近くなっている。2はさらに器表が荒れて、外面では施文が見えず、内面左端に下向き弧線の一部がわずかに見えるだけである。全体として1に似ていて同一個体の可能性がある。3は体部片で外面に楕円文が見える。内面の色調が灰黄褐色、暗褐色であり、後者が焦げ付きの痕跡と判断して下位に置いて図示している。緻密な天地がはっきりしないために、楕円文は左上～右下の斜位に置いている。横位にすると明らかに形状がおかしくなることから、むしろ縦位が相応しくこれも1と同一個体の可能性が考えられる。4は小片で最大3段の横位楕円文が残るが、下端付近は無文となっている。楕円文は長軸1.8cm、幅1.2cmほどで、1よりやや大きい。外面は暗茶褐色、内面は黒色の上に薄く黄褐色が覆うようになっているが、これは器表の残存状態がいい。5は外面が大きく剥離し、剥がれた部位は黒色系、旧状を残す部分は赤色～黄色系となる。内面は下半が黒



第45図 繩文土器実測図1（早期、1/3）

色系、上半が黄色系となる。

出土状態の詳細は記録していないが、ドットを落としている。1・3が近接して出土、両地点から出土した一部の土器片が接合していることから、これらは同一個体としてよいであろう。ほかは随分離れて出土していて、二次的な在り方を示している。

前期の土器（図版25・26、第46・47図） 1は今回出土した中で唯一口端部に篦描沈線を連続して刻るもので、端部外側から内側にかけて引き、さらにはほとんどが口縁部内面まで及ぶ。口縁部の下5mmほどのところから6条の突帯を付すが、いずれも突出が低く、形状不整である。内面には横撫でのような繊細な条線がほぼ水平方向に走り、外面は突帯貼り付け時の整形痕が残るようである。外面は黒色、内面は灰褐色で、胎土は精良といってよいであろう。

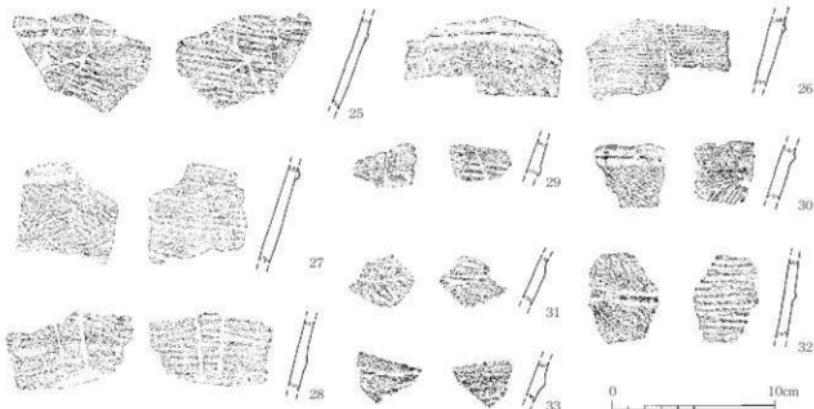
2は口端部に小さくシャープな面を作り出す。口縁部下8～9mmほどのところから4条の突帯が残存する。突帯は部分的に頂部が潰れる個所があるといえ突出するとしてよい。外面は暗茶褐色を呈し煤が多く付着、内面は灰黄褐色であるが、口縁部付近の2cmほどが暗褐色化する。器表が荒れているわけではないが、内面の調整痕が見えず、条痕といったものは用いられていない。胎土に大粒の砂粒が見えるが、概ね精良といってよい。3は口縁部が尖るようになり、5mmほど下位



第46図 繩文土器実測図2（前期1、1/3）

から2条の突帯が残る。胎土は良好。今回出土の轟式土器の多くが暗茶褐色～黒色となるが、これは灰褐色～灰黄褐色となり明瞭な色差がある。4は口縁部が丸味をもって終わり、その下位7mm程から4条の突帯が付される。ただ、3条目の突帯は残存部右側で終わっている。外面は灰黒色となるが、剥離した部分は灰褐色、内面は灰黄褐色である。また、内面に横位のしっかりとした条痕が走る。胎土は精良としてよい。5は口縁部に甘い面をもち、5mmほど下から間隔が広い3条の突帯が残る。胎土精良で内面は非常に丁寧に調整され、条痕は見られない。6は口縁部が薄く丸くなつて終わり、5mm下から3条の突帯が残る小片。これも胎土精良で、内面は非常に丁寧に調整される。7も口縁部は丸く終わり、その下8mm付近から4条の突帯が残る。内面には横位の条痕が薄く見える。胎土は良好。8は肉厚のまま丸く終わる口縁部の下5mm程から5条の突帯が残存する。間隔が不揃いで、太さも一定しない。内面では斜位の条痕が明瞭に見え、これは胎土に1mm前後の砂粒が目立つ。9は口縁部が丸く終わり、5mm下位から3条の突帯が残る。内面には条痕が残り、胎土は比較的粗い。

10は口縁部に面を付し、1.2cm下位から5条の突帯を巡らせる。突帯は間隔や形状が不整であるが、5条で終わるようである。内面はやや荒れているとはいえ、条痕は全く見えない。胎土は良好といつてよい。11は口縁部が丸く終わり、1cm前後下位から2条の突帯が残る。突帯の形状は不整で、内面には条痕が残る。胎土は比較的粗い。12は小片だが口縁部に面をもち、1cmほど下位から3条の突帯が残るが、最下段のそれは剥離している。胎土は比較的粗く、内面に条痕は見えない。13は口縁部を丸く収め、1.7cmほど下位に間隔の広い突帯を2条まで確認できる。内面の条痕は1ほどではないものの微細なもので、外面口縁部下にも同様な条痕が残る。これは胎土良好で、外面に煤が付着。14も口縁部を丸く収め、その下1cmあまりのところから4条までの突帯を確認できる。突帯は意図的に被打たせ、高さを違えているようである。胎土精良で、内面にはごく微細な条痕が見える。15も口縁部は丸く、1.5cmほど下位から5条の突帯が付されている。突帯の形状は不整で、間隔も異なる。胎土は精良といってよく、内面に一定幅の条痕が残る。16も口縁部は丸い。口端部から3cmあまり下位から3条の突帯が巡らされていて、間隔や形状は不整である。胎土は良好といってよく、部分的に厚く煤が付着する。内面は条痕がよく残り、外面の最上部突帯の上方にも同様の条痕が見える。



第47図 繩文土器実測図3（前期2、1/3）

17以下は口縁部を欠くものである。17はシャープな突帯を6条もち、突帯間に煤が多く付着する。内面は暗褐色～黒褐色で、微細な条痕が顕著に残る。胎土は良好。18は突帯の間隔が広く、形状は不整。内面に条痕が顕著に残る。19も18に似る。20は突帯間が狭く、上下の2条は頂部がシャープ、中央のそれは丸くなる。条痕は微細なものである。21は3条の突帯の痕跡があるが、最下段と中央左半は剥離し、下段の剥離痕の下には煤が付着する。内面は調整痕が見えない。22は摩滅が進む小片で、3条の突帯が確認できる。

23・24は大振りの突帯をもつもので、よく似るが突帯の間隔が異なる。不整な例が多いことを考えると同一個体の可能性は排除できない。胎土に径1～2mmの砂粒が多く、外側は全体に煤ける。内面の条痕も似ている。

25以下は突帯の上方あるいは下方に広い無文部分が付すものをまとめた。25は上方に1条の突帯があり、下方が広く開いている。内外面に条痕が顕著で、胎土には微砂粒を含む。26も上方に形状不整だがシャープな突帯を1条認めるが、現状で上下に続く突帯はない。外側の突帯下位では微細な条痕があるものの、内面のようなはっきりしたものではない。これも微砂粒を交える。27は上端にシャープな突帯1条があり、以下は条痕だけが残る。内面の条痕はほぼ横方向だけである。28は中央部に摩滅した突帯の痕跡が1条横位に走るが、その上下に突帯の痕跡はない。複数状の突帯を有する個体ではこの範囲に数条のものがあるはずであるが、ここでは単独である。29は団下端にやはり摩滅した突帯をもつ小片。内面には条痕が残る。30は上端付近に1条の突帯があり、その下位及び内面には条痕がよく残る。31は団中位やや上に1条の突帯が残り、その下位及び内面に条痕が残る小片。32は団中央付近に摩滅した突帯1条があるが、その上下は斜位の条痕である。内面は横位の条痕。33は中央付近に摩滅した突帯を付す小片。

後期の土器（図版26、第48・49図） 1～5は口縁部が短く外反し、6・7を含めて沈線文で飾る鐘崎式土器。1は短くわずかに外反する波状口縁の小片で、頂部がかろうじて残存するか。外側口端部下に口縁部に平行して刻む細沈線、その下位にしっかりとした太い沈線を水平に巡らせる。内面では口端部直下に2条の浅く幅広い沈線を刻むようである。胎土は良好といってよく、全体に灰赤色となるが、黒変する部分がある。2は口縁部内面に沈線というよりは段を付け、その上端でさらに細沈線状に深くなる。これも波状口縁のようで、胎土良好だが器表が荒れる。3は頂部に2条の平行線、その下位に上位とやや斜位となる3条のそれぞれしっかりとした平行線を刻む。口唇部及び口縁部内面にも同様の沈線を各1条刻んでいる。胎土良好で、内面は灰黄色、外側は煤けて灰褐色となる。また、内面調整は丁寧で施磨きのようである。4は3と同一個体であろうが、これは頂部下の平行線が3条、下位の斜位となる2条もそれぞれ別方向に刻まれるようである。これは明らかに波状口縁となる。

6は頂部直下であろうか。直線・弧線を組み合わせるもので、外側下半は灰赤色、上半は暗褐色、対応する内面は暗褐色、灰黒色となる。胎土良好、内面には条痕が見える。7も同様のモチーフであるが、弧線の下は無文で終わる。外側は磨きのようで、内面には条痕のようなものを見る。これは上記に比べて胎土が粗い。7は口縁部を短く強く外彎させ、口縁部に取り付く小さな橋状把手を付す。沈線はいずれも幅広く、しっかりと刻まれるが、孔に続く上端も含めて上位の3条は把手を挟んで連続しない。口唇部の沈線は団左側のそれが把手上で渦文となり、やはり右には連続しない。口縁部内面は段を刻むようになる。調整は丁寧で、粗い条痕は内面にも見えない。口縁部内面から外側にかけて灰褐色～灰黒色、内面は灰黄褐色となる。胎土はやや粗い。

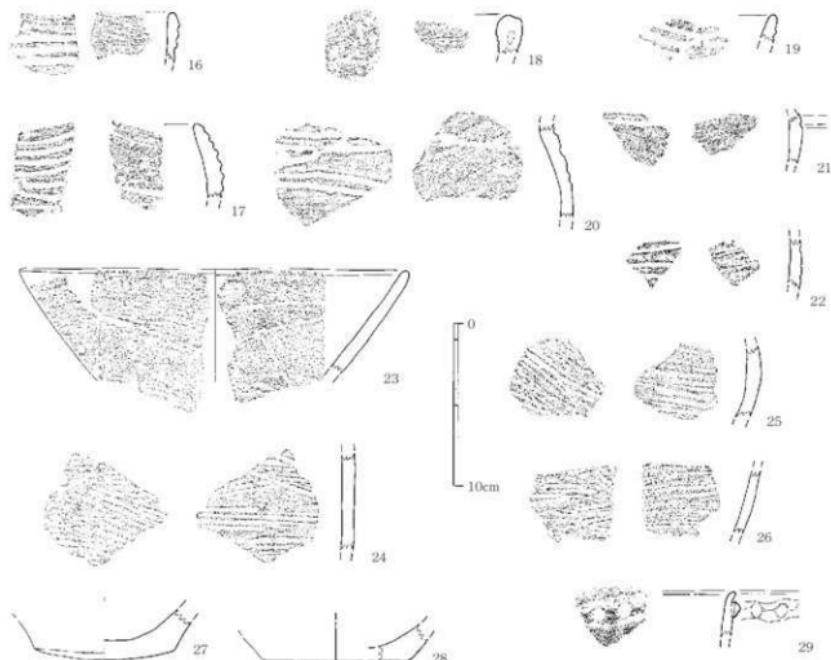
8～10は短く、小さく外彎する口縁部をもつ。やはり鐘崎式土器であろう。8は団示部が1/4ほど残存、口縁部は水平であるが、丸味をもつ小さな突起を付す。全体に器表が荒れているが、頂部に



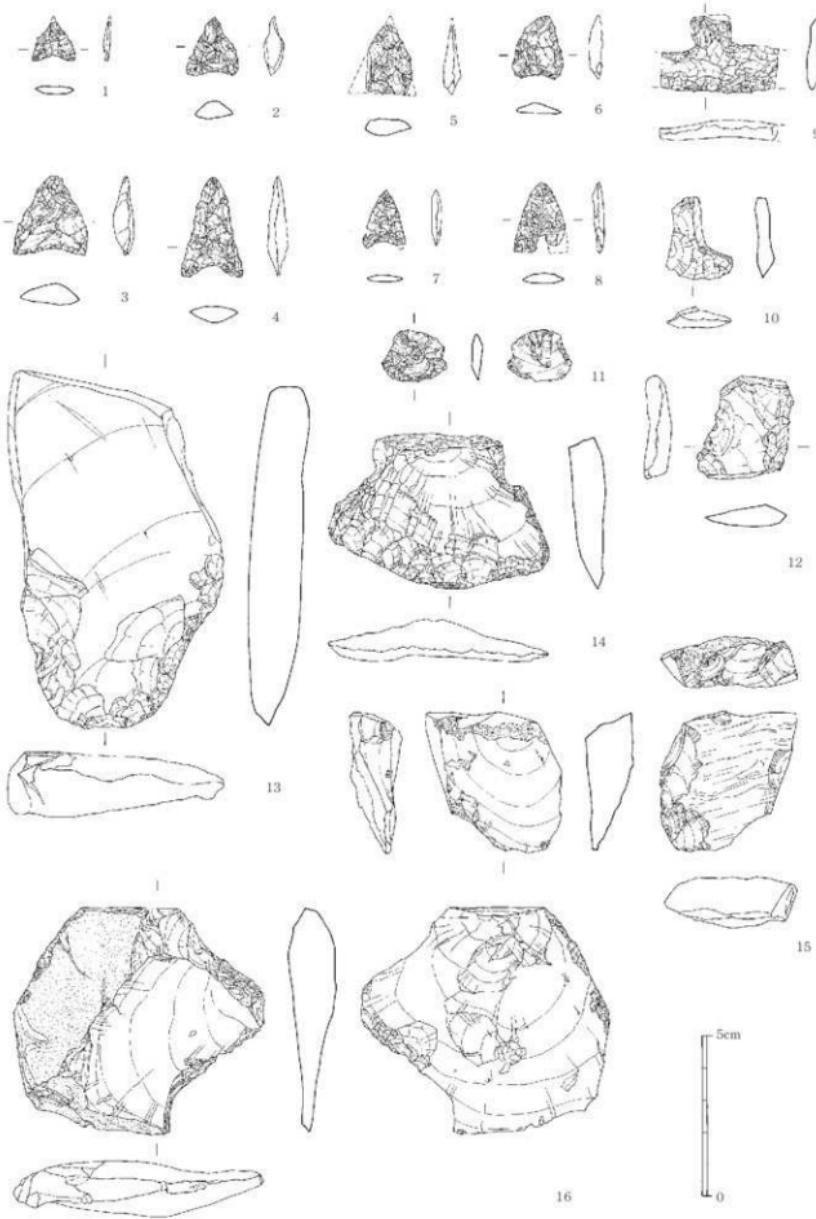
第48図 繩文土器実測図4（後期1、1/3）

境界が非常にシャープな条痕が残り、貝殻によるものであろう。内面でも同様の調整がなされ、頸部直下に粘土紐の継ぎ目が見える。頸部外面が煤けあるいは煤が付着し、内面にも焦げ付きのような付着がある。9は口縁部内面に幅広い沈線を刻み、内外面に条痕が見えるが器表が荒れている。全体に灰黄褐色となる。10は一見弥生土器を思わせたが、見慣れない調整であり、縄文土器であろうと判断した。外面は原体幅の狭い撫である、通常の条痕はない。内面では口縁部に所謂条痕が一部で見えるが、部は範削りのようである。全体に灰褐色となり、胎土は良好。11は内外面が黒茶褐色といったような色となるもので、内外面に条痕が顕著である。12は口端部に面を付す肉薄の小片。外面は丁寧に調整されるが、内面には条痕が顕著。13は11に似る土器で、これは波状口縁となるようである。14は口縁部が緩く外折するもので、内外面に条痕が顕著である。外面は各所に煤が付着、口縁部内面も黒変する。15も口縁部が外反するもので、頸部内面に稜を、口端部に面をもつ。体部内面は範削りであるが、外面には条痕が見える。体部屈曲部付近の内面には粘土紐接合痕も残る。外面は全体に煤が付着、内面下位にも焦げ付きのような変色が見られる。

16は口縁部下外面に幅広くしっかりとした沈線を3条刻むが、沈線内にも細条痕が見える。胎土は非常に精良で全体に黄褐色となる。内面には条痕が見える。17は内縁気味に立ち上がる波状口縁となりそうな口縁部で、外面にしっかりとした沈線を複数刻む。上から5本目の沈線は図左端で終わり、その下位の沈線もその辺りで変化している。胎土は普通、下端付近の内面に条痕が見える。18は波状口縁の頂部で、上面にV字形に見える沈線があるが、図右側が欠損してよくわからな



第49図 縄文土器実測図5（後期2・晩期、1/3）



第50図 出土石製品1 (2/3)

い。頂部は内側へ小さく突出、外側では細い沈線が頂部左側に見える。調整は条痕を主体とする。19は口縁部直下に「つこ」のような形のしっかりとした沈線を刻む小片で、器表が荒れる。20は外面に横位優先のしっかりとした沈線を刻む。上から2本目の沈線は右から左へ続いて中程で終わり、一見左へ連続するように見える沈線は左下から右上へ向かい、V字形に反転するものである。胎土は良好で、内面が非常に荒れて赤変・黒変する。外面は全体に赤変するようであるが、左下付近に煤が付着する。21は上辺の破面にも沈線が現れていて、2条が確認できる。全体に灰褐色で胎土良好。22は3条の沈線が残る。胎土は粗いようで、外面が暗茶褐色、内面が灰褐色となる。沈線内にも細い条痕が見え、他例に比して繊細な感がある。

23~28は無文であるが、後期に属するものと思われる。23は浅鉢形の口縁部で成形・器面調整は丁寧。内面は二枚貝条痕、外面は削りであろうか。胎土は粗く、全体に黄褐色~灰褐色となる。24は微砂粒が目立ち、内外面を巻貝条痕で調整する。外面はほぼ灰赤褐色であるが、その一部と内面が暗赤褐色となる。25・26も内外面を巻貝条痕で調整する小片。

27は1/4ほどが残存する底部片で、外底面を大きな原体で削るようで不整となる。内面は条痕か。28は技法がよくわからないが器面調整が丁寧になされ、弥生土器といつてもよいような底部片であるが、今回の調査で弥生土器は出土していないので縄文土器として報告しておく。胎土が粗く、外面は赤褐色、内面は灰黄色となる。

晚期の土器（図版26、第49図29） 1点のみ確認できた。小さく外反するシャープな作りの口縁部下に大振りの突帯を付し、棒状工具を用いたものか幅広い刻みを付すものである。胎土はごく良好。火熱を受けたものか、全体に赤味をもつ。

9) 縄文時代の石器（図版26・27、第50~52図）

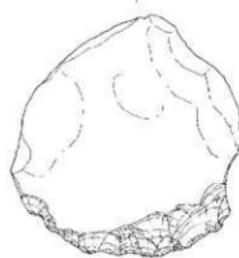
ここで紹介する石器類も多くの出土地点・標高を記録している。また、記録時にはアカホヤ層に対して上下の関係もメモしている。ただ、先述したように、純粹にアカホヤ層が厚く堆積した調査区南端付近での出土ではなく、1トレンチ付近以北の出土例が多く、そこではアカホヤは層をなさず、小ブロックで疎らに存在していただけである。したがって、「アカホヤ上（下）」と記録したもののは、アカホヤが二次的なものである可能性もあって、厳密に上下関係を把握したとは言い難いところがある。明らかに中世以降の包含層から出土したものもあることから、以下では特記するもの以外については、単純に「包含層」出土資料として扱い、層位や出土位置については省略する。

石鎌（1~8） 1は両側縁を鋸歯状に調整しながら両基端が尖る。先端部を僅かに欠損する。不純物の混じる漆黒の黒曜石製で長さ12cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm。重さ0.26g。2は先端部を尖らしているが、側縁部の調整は中途半端で厚みを残しており未完成であろう。姫島産黒曜石製で、長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ1.09g。3は先端部を欠損する。背面は両側縁からの調整で丁寧に仕上げるが、裏面は素材面を取り込んでおり、両基端を尖らす。姫島産黒曜石製で長さ2.4cm、幅2.2cm、厚0.7cm、重さ2.50g。4は先端部から側縁部にかけて斜状の剥離を行っている。両基部は丸みを持つが、両基端は鋭く尖る。細調整ではなく、剥離面同士の切り合いによって先端部を形成する。姫島産黒曜石製で、長さ3.1cm、幅1.9、厚さ0.7cm、重さ1.95g。5は両側縁部と先端部の一部を欠損するが、凹基でなく平基に近い形態である。姫島産ガラス質安山岩製で、長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ1.52g。6は両側縁の調整を行っているが、先端部を尖らせるまでは至っていない。表裏面に素材面を残す。サヌカイト製で長さ1.9cm、幅1.6cm、厚0.4cm、重さ0.95g。サヌカイト製。7の調整剥離面は比較的大きいが、丁寧に剥離している。側縁部にやや丸みを持ちなが

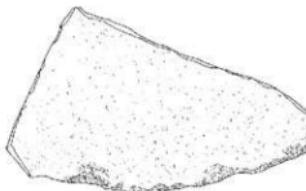
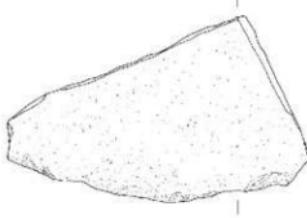


17

18



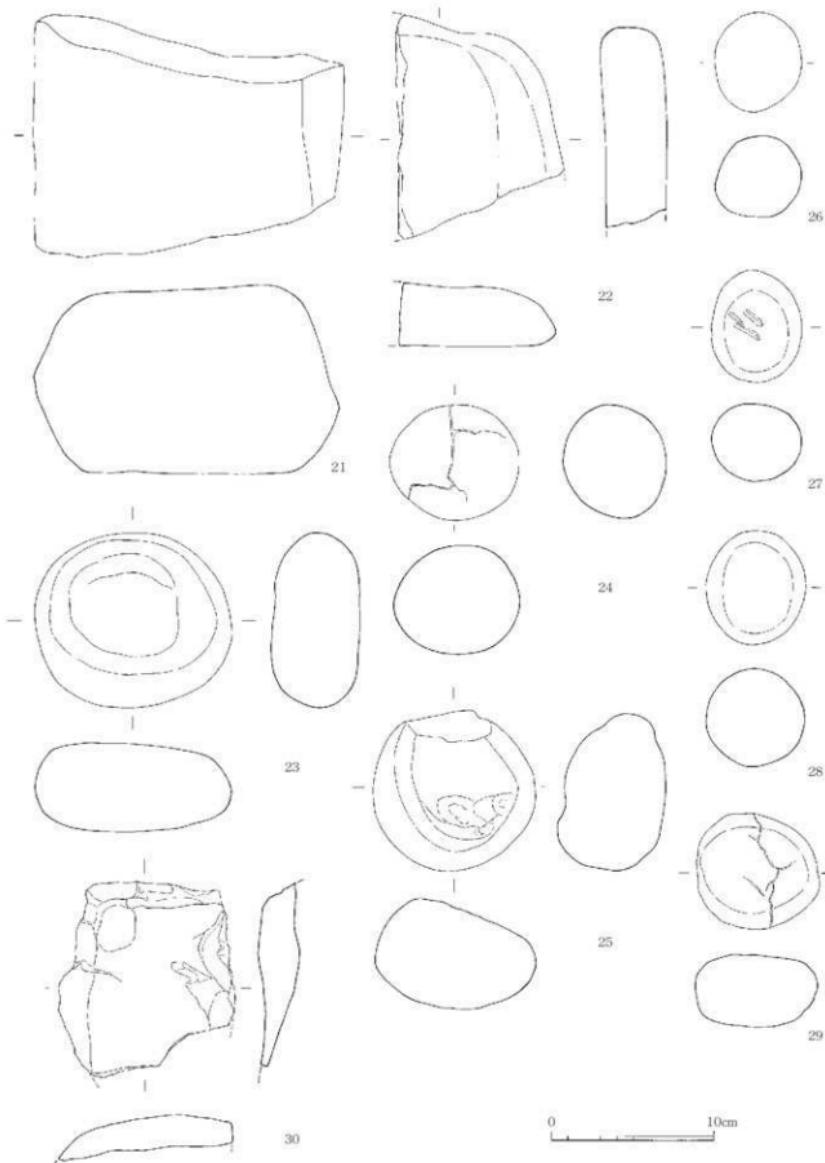
19



20



第 51 図 出土石製品 2 (1/3)



第52図 出土石製品3 (1/3)

ら両基端を尖らせる。形態的には早期の石鎌とみて良いだろう。サスカイト製で、長さ18cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.47g。8は右側縁と端部を欠損する。剥離面は大きく側縁の調整も丁寧で器壁を薄く仕上げる。凹基だが、両基端部は平基状で装着時は二等辺三角形になろう。サスカイト製で風化は進んでいないが、剥離技術や形態は古い要素であり、早期に属するものであろう。長さ22cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.89g。

石匙（9） 両端部を大きく欠損し、摘み部も僅かに欠く。表裏を大きく面調整した後、刃部を丁寧な剥離によって仕上げている。アカホヤ下（20）出土。サスカイト製で、長さ23cm、幅3.6cm、厚さ0.7cm、重さ4.82g。

二次調整剥片（10・11） 石鎌製作に関わる調整剥片類である。10は右側縁部を大きく欠損するが、残る剥離面から幅広剥片を素材としていることが分かる。表裏に押圧剥離を行っており、石鎌未成品の可能性がある。サスカイト製で、長さ2.5cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ1.72g。11は幅広剥片素材で表面は上下両端部から、裏面は打面部側から押圧剥離による二次調整を行っている。漆黒の腰岳系黒曜石製で、長さ1.5cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.09g。

石斧（12） 下端の刃部については表裏面より丁寧に加工するが、胴部は素材形状をそのまま利用している。ただし、刃部加工は丁寧な剥離でスクレイバーエッヂのようである。刃部の剥離面を切るように、刃部を中心に擦痕による平滑面がある。図裏面では胴部中位より上には擦痕が無く、ここで柄に装着して固定した可能性もある。表裏面を対称とみれば打製石斧の擦痕に似ており、同様の使用方法が想定される。在地産の安山岩製で、長さ11.0cm、幅6.6cm、厚さ2.0cm、重さ164.3g。

スクレイバー類（13～16） 13は幅広剥片が素材で両端部を欠損する。両側縁に刃部を設定しており、側縁調整は大きな剥離の後に丁寧な刃部加工をしている。風化が進んでいないサスカイト製で、長さ3.2cm、幅2.9cm、厚さ0.7cm、重さ7.19g。14は背面に礫素材面を残すことから、石核小口で幅広剥片素材を剥離していることが分かる。バルブ付近の厚みを器体に取り込んで素材周縁に刃部加工を行っている。基部側縁にはノッチ状の加工によって摘み部を作出しており石匙の退化形態とみることもできる。多久小城系のサスカイト製で、長さ4.8cm、幅6.8cm、厚さ1.4cm、重さ37.12g。15は表面の剥離は薄く深いが、打点部が不明瞭である。この剥離部分を中心に僅かな刃部加工がみられ、端部には微細剥離がある。珪化木製で、長さ4.8cm、4.2cm、厚さ1.5cm、重さ19.4g。16の礫面は少し磨滅があり転礫を利用したものかもしれない。側縁部を大きく突起状に加工した後、その周縁を刃部加工する。風化が進んでいないサスカイト製。長さ7.0cm、幅7.7cm、厚1.5cm、重78.02g。

神子柴形石斧（17・18） 17・18は1トレンチ拌殿東下の黄褐色土中より両石器のみが揃って出土した。17は重量感のある、両刃の局部磨製石斧である。素材礫を交互剥離による両面調整によって扁平となるように成形し、その後上下両端部から剥離を行って原形を作出している。刃部作出のための縦方向剥離の痕跡が僅かにみられるが、同様に基部背面にも縦方向剥離がある。胴部側縁には敲打調整がみられるが素材面も残す。刃部を中心に表裏面を研磨しているが、左側縁刃部付近では平坦な素材面を側面に取り込み研磨している。さらに裏面の刃部は砥ぎ直しを行っている。硬質砂岩製。長さ22.8cm、幅9.4cm、厚さ4.1cm、重さ1179g。18は両刃の局部磨製石斧である。交互剥離による両面調整で成形した平面形は短冊形だが、背面中央には錐状の後を残して甲高の形態となる。刃部成形のために縦方向剥離を行ったとみられるが、研磨が丁寧なため痕跡はみられない。胴部の側面は敲打調整で丁寧に整形している。刃部を中心に丁寧な研磨を行っており、裏面は端部まで磨いている。玄武岩製。長さ15.6cm、幅6.7cm、厚さ3.2cm、重さ414g。

両石斧は刃部を中心に研磨する局部磨製であり、技術形態的特徴から縄文時代草創期の神子柴型石斧の範疇に含められる（横田1981他）。また、石斧2点のみが上下に重なり合う出土状況からデ

ボ（埋納行為）とみられる。

九州地方における縄文時代草創期の局部磨製石斧をみると、技術形態的に大きく3つの地域性がある。このうち、独自の技術変遷を遂げる南九州を除き、西北九州と東九州における技術形態差が注意されてきた（杉原2004他）。西北九州では、長崎県茶園遺跡、直谷岩陰遺跡、佐賀県地蔵平遺跡、福岡県門田遺跡、能古島採集品などがある。大小の差異はあるが、多くは背面中央が甲高で刃部に向かって鋭く薄く仕上げる技術形態でまとまりがある。一方、東九州では、福岡県金居塚遺跡、大分県市ノ久保遺跡、丹生遺跡群、宮崎県白ヶ野遺跡などがある。宮崎県白ヶ野遺跡例を除けば、多くは両面調整を主体とする扁平で両刃である。本遺跡の大型品については、技術形態的にも金居塚遺跡例に酷似する。また小型品については能古島採集品や地蔵平遺跡例に近い。

東九州の草創期に該当する局部磨製石斧は、両刃で扁平な形態をとるものが多いが、これは対岸の四国地方でも同様の傾向にある。¹³この点については、西北九州の事例と対比した時、僅かな時間差が存在して時期的にも新しくなる可能性もある。特に東九州では、細石刃が共伴した石斧は市ノ久保遺跡例だけであり、可能性のある宮崎県五ヶ瀬川流域の慈眼寺雲霧遺跡や白ヶ野遺跡を含めても事例は限られる。つまり、細石刃石器群との共伴を窺わせる資料は限られており、多くは単体出土である。また、別時期の遺物と共に出土することが多いのも確かである。金居塚遺跡例は原位置遊離でほかに縄文早期の出土遺物もあったが、こうした資料との関係も考慮する必要があるかもしれない。ただし、本遺跡ではその可能性を直接推測させるような土器類の出土状況は無い。以上から、草創期の局部磨製石斧として評価できる。

礫器（19・20） 19は扁平な安山岩礫の端部に刃部加工を行っている。チョッパー状の形態で刃部は基本的に片刃だが、裏面から剥離している箇所もある。在地産の安山岩製で長さ15.0cm、幅14.2cm、厚さ3.9cm、重さ968g。20は扁平な安山岩礫素材で端部の表裏に直線的に刃部加工を行っている。スクレイパーエッヂに近い形状である。右先端部を欠損する。在地産の安山岩製で、長さ11.5cm、幅18.7cm、厚さ2.9cm、重さ478 g。

台石・石皿類（21・22） 21は安山岩礫を素材とする台石状の石製品である。擦痕など明瞭な使用痕はみられない。平面14.8cm×19.1cm、厚さ11.7cm。22は扁平な安山岩礫で中央が窪んでおり石皿とされる。明瞭な使用痕などはみられない。平面形13.7cm×10.2cm、厚さ4.3cm。

磨石・敲石類（23～29） 楕円形で偏平なものと球形になるものがある。いずれも安山岩製礫を使用しており、本来は堆積層に混入する可能性がないため人為的に持ち込まれている。23は平面形が10～12cm前後の楕円形で厚さは5.5cm、中央に平滑面がある。重さ1013g。24は平面形は8cm前後の球形礫でクラックが入る。アカホヤ下、集石4付近出土。重さ385g。25は平面形10cm前後の円形で厚さ6.8cm。図上端部に破碎痕、中央に窪みがある。敲石として使用されている。重さ723g。26～28はいずれも球形で、人為的な痕跡や使用痕はみられない。26は5～6cmの球形礫。重さ222g。27は6.6cm×6.9cm、厚さ4.8cm。重さ218g。28は7.1cm×6.2cm、厚さ6.0cm。重さ286g。29はクラックが入る。側面に敲打痕がみられ、一部平滑面とみられる面がある。平面形7.0cm×7.6cm、厚さ4.5cm。重さ316g。

その他（30） 扁平な剥片状の安山岩礫を使用している。加工部とみられる下端部を大きく欠損しており具体的な調整加工などは不明である。長さ12.1cm、幅10.9cm、厚さ2.7cm、重373 g。

(4) 小 結

下伊良原高木神社の伝承、あるいは神社がどのような変遷を経てきたかなどを探ることを目的とした調査であったが、アカホヤ単純層の確認、縄文時代の遺物の出土も貴重な副産物であった。出土遺物については縄文時代の土器・石製品を除いては、所謂中世以降の遺物である。弥生～古代に属する遺物は皆無といってよい。以下で簡単にまとめておく。

縄文時代 縄文時代の遺物は大粒の楕円文を外面と内面口端部付近に施文する肉厚の押型文土器、複数の突帯で飾る前期轟B式、そして複数の直線・曲線で口縁部付近を装飾する後期鐘崎式土器、そして石製品などが出土した。轟B式土器は主としてアカホヤ火山灰が薄くなる付近から出土していて、火山灰との層位関係を確認できなかったが、一般的にアカホヤ上層に位置付けられている。石製品の評価は前頁に記した。

また、遺構としては集石が數基見られた。蒸し焼きに供されたといわれ、実際にこの状態で土器は使用できない。火が貴重なものであれば、土器を使用する方が遙かに効率的であろうから、あるいは当地における土器出現以前に遡る可能性も考えられよう。これらの集石遺構はアカホヤ以前との感触を得ている。

中世前期 随所で出土した口縁部が発達する土師器鍋は行橋市延永ヤヨミ園遺跡で以下のような供伴関係にある。

Ⅲ A B 区 5号土坑：外方に踏ん張る形の断面台形～三角形の中間的な小振りの高台をもつ瓦器椀
Ⅲ A B 区 13号土坑：内外面に磨きを多用する同上高台付の瓦器椀、同安窯系青磁皿等

Ⅲ C 区 25号土坑：龍泉窯系青磁蓮弁文椀・同割花文椀・同見込印花文椀、同安窯系青磁椀等

Ⅲ C 区 溝14：溝ではあるが、断面三角形の小振りな高台付瓦器椀 4点と供伴

これらの組合せから、この種の土師器鍋は12世紀後半から13世紀にかけて使用されたものであるといえる。12世紀第1四半期に比定される北九州市愛宕遺跡土坑一括資料^{注5}では、型式的に先行するといってよいタイプの鍋が出土していて、その上限はより遡る。

また、これも遺構に伴うものではないが高台がしっかりとあるいは丁寧に鏡磨きで調整された瓦器椀・土師器椀などもその頃と考えることができるが、関連する遺構、祭祀の痕跡といったものは確認できなかった。ただ、その頃にこの地にヒトの行為の痕跡が確認できるという意味で、社伝にいう「貞応年間（1222～24）」の遷座がまったく根拠のことではないといえよう。

中世後期 1・2トレンチ間の前庭中央付近で火を使った痕跡があり、その西側に南北方向に礫が並んでいた可能性が考えられ、さらに、しっかりとした柱穴、根石をもつ柱穴もそれらに伴う可能性が考えられた。さらに、2トレンチの列石が想定される付近で見られた「不自然な土層ライン」も関連するものであろう。これらは神社祭祀と関わるものと考えていいのではなかろうか。後述する上伊良原高木神社でも火を用いた「祀り」が行われた可能性を考えている。この「祭祀空間」が想起される付近で、土師器・銅錢がまとまって出土した。土器は第30図に示したように、底径が小さく、体部から口縁部にかけて直線的に浅く聞くもので、復元口径13.5cm前後、器高3.0cmほどの大きさである。小皿もほぼ同様の形態で、復元口径7cm強、器高1.5cmほどであった。佐藤浩司氏はこの種の土器の編年^{注6}を提示している。その中で、「薄手で底径が小さく、体部の中位で外反し大きく聞くCタイプ」のこの種の土師器杯は14世紀前半に出現し、「14世紀後半から15世紀までは法量を縮小しながらも存在し、16世紀前半までこのようである。」としている。氏の論考に当てはめると、当遺跡の祭祀土器群は長野A遺跡Ⅶ区1号土坑（14世紀後半～15世紀前半）と長野D遺跡

17号土坑（15世紀中頃前後）の中間的法量をもつことから、15世紀前半～中頃に比定できよう。出土後に行方不明となっている銅錢の存在が気がかりではあるが、確認した銅錢では「永樂通宝」（初鑄1411年）が最も新しいもので顕著はない。中世前期の祭祀の痕跡を確認できなかったが、中世後期のこの頃に火を用いた祭りが行われたことは間違いない。社伝に該期の記録が残っていないが、石列が構築されたかも知れないということや複数の大形柱穴の存在などを高く評価すれば、一定の祭祀空間の整備－想像をたくましくすれば神殿の創設のような事柄があったことも推測される。

近世『京都都誌』に記載されてない記録が「伊良原一民俗文化財の調査一」（『福岡県報』第143集、1999）にいくつか掲載されているので、それを引用しておく。

寛保元年（1705）：宝永2年（1705）に彦山座主相有が揮毫した社号を扁額にし懸ける

宝暦10年（1760）：氏子中、仲津郡奉行三宅圓司より石鳥居1基寄進

宝暦14年（1764）：宝殿（神殿）再建

東端石垣と鳥居跡は先述したように同時に存在した、あるいは計画的に配置された可能性が考えられる。ただ、その造営の時期を確定する根拠がないが、上記宝暦10年の鳥居寄進の記事が重要な意味をもっているかも知れない。同じく自然石で築かれた石垣1については、中央付近に横置きされた大きな石材が石階段であろうが、鳥居跡・東端石垣の石階段の中心線上にのらないことから、同時性を云々できない。残された記録・伝承で関連が推測できるのは、元和4年（1618）の拝殿再建、延宝6年（1678）の神殿再建、宝暦14年の本殿再建であろうか。この自然石で造られた石垣は江戸後期の遺構であろうとの指摘があり、宝暦14年構築の可能性が高い。

東端石垣前面から出土した陶磁器については、所謂蛇の目凹形高台をもつものがあって、これは18世紀中頃に現れて昭和の時代まで使用された形態であるという。他の染付をみても発色が非常に鮮やかなものがあり、これらは明治29年の「広坪大石垣新設・石階段改築」の記事に対応する遺物といえそうである。「広坪」は本報告で「前庭」とした拝殿東下の広場の意であろうし、「大石垣」という表現も上下2段からなる移設前の石垣を意味するものと解してよいだろう。

本殿・幣殿・拝殿のそれぞれ東に積み上げられた間知石積みは明治45年の「神殿後方山岳ヲ探掘開拓シテ、後方上部ヲ繰上ヶ現今ノ状況トナル。」に対応するものと考えられる。移設前に東端の鳥居付近にあった2段の石積みは自然石を用いたものであるが、ここでは花崗岩を成形した間知石が使用されている。石垣2の抜き取り穴から出土した「三ツ矢サイダー」瓶について、「縁味帯びる透明な瓶」という問い合わせに対して、

明治40年（1907）帝国鉱泉（株）「三ツ矢平野シャンパンサイダー」

大正10年（1921）日本麦酒鉱泉（株）「三ツ矢シャンパンサイダー」

昭和8年（1933）大日本麦酒（株）「三ツ矢シャンパンサイダー」

昭和47年（1972）朝日麦酒「三ツ矢サイダー」

が該当し、瓶底のデザインについては資料がない旨、アサヒ飲料（株）からの回答を得た。「縁味帯びる透明な瓶」との表現は誤解を与えたかも知れないが、参考までに記しておく。

1トレンチ土層図に見るように、石垣2は解体前の拝殿に近すぎることから、拝殿建設に当たって石垣3を構築するために抜き取られ、遣棄されたものと考えてよい。したがって石垣2の解体・石垣3構築は大正10年3月10日の記事にある「拝殿地ナラシ、石垣組直シノ事」と見てよいであろう。神崎氏報文にあるように拝殿・幣殿は大正11年頃に改築された。

さて、第3図に示した絵図は明治31年に刊行されたもので、実際の姿をどこまで反映しているか確証はない。とはいって、現況で東から狛犬・鳥居が置かれていたものが絵図では逆になり、また拝殿東側の石垣3が描かれていない。また、本殿南の末社へ通じる石段は現状の石段（第8図）と同

じような位置にある。西側に直線的な石垣があることから判断して、この絵では本報告で前庭と呼んだ部分に拝殿が描かれていると考えてよいようである。すなわち、ここに描かれた石垣は石垣2と見てよいであろう。したがって、この絵では現拝殿の位置に本殿・幣殿が位置し、現前庭に拝殿が置かれている。

石垣2の構築は記録から特定できないが、間知石積という新しい技法を使うことから、宝曆14年の本殿再建時に構築された可能性が考えられる。間知石積み構築物としてはこの神社で最も古いものとなる。また、現鳥居前後の明治29年に構築された石垣はこの図に描かれたものと同一と見てよいようである。

そして、これは確証がないが、大正3年の本殿等の移設の伝承（11頁参照）はあるいは大正11年の拝殿建設と混乱しているのではなかろうか。当神社においても本殿・幣殿・拝殿が連接していて、拝殿を残して本殿・幣殿だけを新規開拓した位置に分離移設することは考えがたく、そうした場合には、8年後に建て替える必要のあるほどの老朽化した拝殿をも移設したはずであり、不自然さがある。大正3年移設の伝承は11年の間違いではないかと疑っている。ただその場合にも、明治45年の開削から10数年の長期の開きがあるが、計画立案・資金調達などに要したと想像することもできよう。

註

- 1 杉原敏之「九州の様相—縄文時代草創期における狩猟具の動向と地域性—」（『中・四国地方旧石器文化の地域清と集団関係』中・四国旧石器文化談話会20周年記念シンポジウム、2004）
杉原敏之「第10章 列島西端における縄文文化成立期の様相」（『縄文化の構造変動』六一書房、2008）
- 2 横田義章「(3) 表探および関連資料」「金居塚遺跡Ⅱ」所収（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集 福岡県教育委員会、1997）
横田義章1981「いわゆる「神子柴型」石斧の資料」（『研究論集』7 九州歴史資料館、1981）
- 3 多田仁「第9章 四国地方—旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器生産を中心に—」（『縄文化の構造変動』六一書房、2008）
多田仁「四国地方中・西部における旧石器時代から縄文時代草創期の石斧3」（『紀要愛媛』第11号、（公財）愛媛県埋蔵文化財センター、2015）
- 4 九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡—Ⅲ区Ⅰ—」（『一般国道201号行橋インター関係埋蔵文化財発掘調査報告』第1集、2013）
九州歴史資料館「延永ヤヨミ園遺跡—Ⅲ区Ⅱ—」（『一般国道201号行橋インター関係埋蔵文化財発掘調査報告』第5集、2015）
- 5 佐藤浩司「12世紀の食膳具—愛宕遺跡の土坑一括資料を中心にして—」（『研究紀要』第11号、1997）
- 6 佐藤浩司「北九州市域の15～16世紀の土師器」（『大宰府陶磁器研究—森田勉氏追悼論文集—』1995）
肥前磁器関係は九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000のほか、大橋康二氏の一連の著作によった。

图 53 住用房带地基剖面图 (1:200)

